

Hokkaido University News

北大時報

平成24年

12

No. 705 December 2012

次期総長候補者として現理事・副学長の山口佳三氏を選出
サステナビリティ・ウィーク2012の開催

お知らせ

・冬期間の駐車について



1 教育支援体制の構築に向けて

■ 全学ニュース

- 2 次期総長候補者として現理事・副学長の山口佳三氏を選出
- 2 平成24年度科研費審査委員表彰に本学から2氏
一工学研究院 名和豊春教授、薬学研究院 市川 聡准教授一
- 3 平成24年度医学教育等関係業務功労者表彰に本学から2氏
- 4 文学研究科教授 高橋英光著の図書が平成24年度(第46回)市河三喜賞を受賞
- 4 平成24年度北海道大学フロンティア奨学金受給者の決定
- 5 北大フロンティア基金
- 6 AO入試合格者の発表
- 6 帰国子女入試合格者の発表
- 7 大学入試センター試験 本学一般入試個別学力検査等実施体制等の決定
- 10 第21回北海道大学教育ワークショップ(FD)を開催
- 11 「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催
- 12 「冬山登山講習会」を開催
- 13 第12回北大・九大合同フロンティア・セミナーを開催
- 13 第1回「食と健康」研究会を開催
- 14 動物実験実施者等教育訓練を実施
- 14 遺伝子組換え実験の申請に係る講習会を実施
- 15 「平成24年度 安全監督者会議」を開催
- 15 平成24年度北海道地区国立学校等安全管理協議会に参加
- 16 サステナビリティ・ウィーク2012の開催
- 40 第20回全国共同利用情報基盤センター長会議を開催
- 40 平成24年度北海道大学情報セキュリティセミナーを開催
- 41 日独交流150周年記念植樹
- 41 北大インターナショナルハウスで消防避難訓練を実施

■ 部局ニュース

- 42 グローバルCOEプログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」主催
国際サマースクール2012フォローアッププログラムを開催
- 43 スラブ研究センターがBRIT XII (Border Regions in Transition : 移行期の境界地域) 研究大会を東アジアで初開催
- 44 教育学研究院が北海道学習障害児・者親の会と連携協定を締結
- 45 平成24年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行政
- 45 歯学研究科で市民公開特別講座「インプラントって何？」を開催
- 46 薬学研究院でアインファーマシーズ寄附分野シンポジウム「医療安全における薬剤師の果たすべき役割」を開催
- 47 生命科学院でノーベル化学賞受賞者 (Johann Deisenhofer 博士) による講義を実施
- 48 経済学部で特別講演会「北海道の資源を活かす経営」を開催
- 49 「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催
- 49 総合博物館がキャンパス紹介映像を制作
- 50 法学研究科・法学部・公共政策大学院で留学生パーティを開催



教育ワークショップ (FD)



「食と健康」研究会

- 50 経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催
- 51 附属図書館が「附属図書館講演会」及び「国立大学図書館協会地区協会助成事業北海道地区ワーキンググループ実施報告会」を開催
- 52 附属図書館で「UMass-Hokudai Library Workshop」を開催
- 53 附属図書館と学生サークル「Sapollo」との協働によるパネル展示を開催
- 54 附属図書館・大学文書館共催展示「台湾は天然の恩恵裕なる——植民地台湾を駆けた北大卒業生たち」第Ⅱ期を開催
- 55 薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を挙行政
- 55 歯学研究科で「動物供養祭」を挙行政
- 56 消防訓練の実施

■ お知らせ

- 57 冬期間の駐車について
ー除雪・通行の支障となる駐車はやめましょうー

■ 同窓会との交流

- 57 北海道大学環境科学同窓会 設立祝賀会

■ 諸会議の開催状況 58

■ 学内規程 58

■ 研修

- 58 平成24年度国立大学法人北海道大学簿記研修
- 59 平成24年度北海道大学教務事務実務研修
- 59 平成24年度北海道地区大学等留学生担当職員研修
- 59 平成24年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修

■ 表敬訪問 60

■ 人事 61

- 61 新任教授紹介

■ 訃報

- 62 名誉教授 久保 周一郎 氏
- 62 名誉教授 内野 純一 氏

■ 資料

- 63 平成24年度外国人留学生数 (平成24年11月1日)
- 64 平成24年度国別外国人留学生数 (平成24年11月1日)
- 65 北大時報掲載記事事項別一覧 (平成24年掲載分)

歯学研究科
市民公開特別講座「インプラントって何？」脳科学研究教育センター
合宿研修法学研究科・法学部・公共政策大学院
留学生パーティ経済学研究科・経済学部
外国人留学生懇親会

表紙: 旧札幌農学校図書館 (1955年頃)

裏表紙: 北の息吹® イワヒゲ (*Cassiope lycopodioides*)

教育支援体制の構築に向けて

教育担当理事，高等教育推進機構長

やまぐち けいぞう
山口 佳三



高等教育推進機構は，総合入試導入前年の平成22年10月に発足しました。発足当初は，全学教育部，総合教育部，高等教育研究部，教育支援室の3部1室体制からなり，教育支援室には，アカデミック・サポートセンターと自然科学実験支援室が置かれていました。平成24年4月からは，大学院教育部が置かれ，4部1室体制となり，本学の学部教育・大学院教育の全学的な推進を図る役割を担っています。この稿では，来年度に向けて，教育支援体制の充実のために，現在準備を進めている事柄を報告したいと思います。

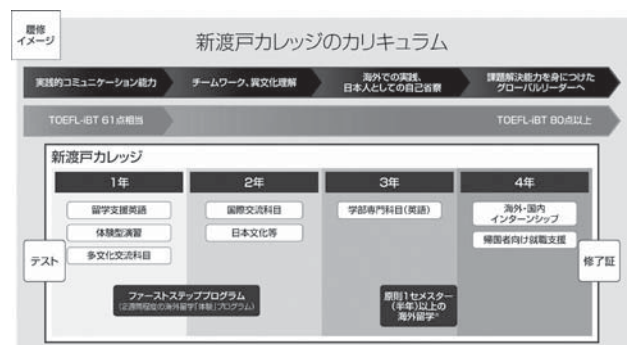
新渡戸カレッジ発足に向けて

北海道大学では，今年度文部科学省グローバル人材育成事業の採択を受けて，平成25年度から，現代のグローバル社会で活躍できるリーダーを育成するための特別教育プログラムとして，新渡戸カレッジを開校します。新渡戸カレッジに入校した北大生は，それぞれ所属する学部の専門教育を受けるだけでなく，カレッジ生としてグローバル社会のリーダーに必要なスキルを身につけるための特別プログラムを受けます。従って，この特別教育プログラムは，北大の12学部にも所属する全ての学生を対象とした横断的教育カリキュラムとなります。定員は1学年200名です。この特別プログラムの修了までには，原則として，1セメスター（半年）以上の海外留学を体験させます。留学を念頭においた実践的な英語力を修得させるため，留学支援英語，国際交流科目，英語による学部専門科目等が提供されます。このカレッジのもうひとつの特徴は，本学の卒業生が様々な支援してくれることです。カレッジ生には，同窓生がメンターとしてキャリア形成のサポートをします。カレッジへの入校については，平成25年度に入学した学生のうち，希望者にプレースメントテストを実施して選別します。高等教育推進機構ではスタッフを配置して，英語による教育のためのFD活動を支援します。先々には，この活動をティーチング・サポートセンターへと拡大すべく計画しています。

オープンエデュケーションセンター設置に向けて

北海道大学では，これまで教務情報システムによる教育基本データの管理，ELMS（教育情報システム）を活用した教育・学習支援，CALL（言語教育用電子計算機システム）やCoSTEPによる広い意味でのeラーニングの実施，及びOCW（オープンコースウェア）事業や附属図書館HUSCAP事業の展開など，広くOER（オープン教育リソース）活動に関わる取り組みを推進してきました。しかし，これらはそれぞれの担当部局等の責任のもとで活動が進められているため，取り組みの類似性ないし重複が見られ，また，連携・協力が図られていないなどの問題点が指摘されています。そこで，教育改革室ではワーキンググループを立ち上げ，これらの活動の実態を検証し，全学的な統制のもと連携を図りつつOER活動を進めるとともに，これを活用した教育・学習とその研究開発を推進する体制としてオープンエデュケーションセンターの設置について検討しています。このセンターが設置された際には，道内7国立大学の教養教育連携の中核として機能することが期待されています。

こうした活動を通して，高等教育推進機構では，教育支援体制の充実を図りたいと願っています。全学の皆様のご理解・ご協力をお願いします。



■全学ニュース

次期総長候補者として現理事・副学長の山口佳三氏を選出



山口 佳三 氏

佐伯 浩現総長の任期満了に伴う次期総長候補者の選考が行われ、現理事・副学長の山口佳三氏が次期総長候補者として選出されました。

本選考は、国立大学法人北海道大学総長選考会議規程に基づく所定の手続きを経て、12月10日（月）開催の総長選考会議において、同会議委員の投票により行われたものです。

なお、任期は平成25年4月1日から平成29年3月31日までの4年となります。

（総務企画部総務課）

平成24年度科研費審査委員表彰に本学から2氏 —工学研究院 名和豊春教授，薬学研究院 市川 聡准教授—



表彰者との記念撮影

科学研究費助成事業の配分審査を行っている独立行政法人日本学術振興会では、審査の質を高めるため、同会設置の学術システム研究センターにおいて、審査終了後、審査結果の検証を行い、その結果を翌年度の審査委員の選考に反映させています。

さらに平成20年度からは、検証結果に基づき模範となる審査意見を付した

審査委員の表彰を実施しており、今年度は約5,000名の第1段審査（書面審査）委員の中から115名が選ばれ、本学からは工学研究院 名和豊春教授，薬学研究院 市川 聡准教授の2名が表彰の対象となりました。

本学の研究者から表彰対象者が選ばれるのは、昨年度（3名）に続き3年連続となります。



伝達式の様子（名和教授）



伝達式の様子（市川准教授）

表彰の伝達式は11月20日（火）に行われ、上田一郎理事（研究担当）・副学長から名和教授，市川准教授へ表彰状と記念の楯が手渡されました。

（研究推進部外部資金戦略課）

平成24年度医学教育等関係業務功労者表彰に本学から2氏

本年度の医学教育等関係業務功労者として、本学から北海道大学病院検査・輸血部 臨床検査技師 奥原浩之氏、同看護部 看護師 黄美穂子氏が表彰され、11月22日（木）ホテルフロラシオン青山において、表彰式が行われました。

この表彰は、文部科学省が毎年、医学または歯学に関する教育・研究若しくは患者診療等の補助的業務に従事し、顕著な功労のあった方々に対して行うものです。

各氏の表彰に当たっての感想を紹介します。

（総務企画部広報課）



北海道大学病院検査・輸血部
臨床検査技師
おくはら ひろゆき 氏
奥原 浩之 氏



北海道大学病院看護部
看護師
うい みほこ 氏
黄 美穂子 氏

11月22日（木）、東京で開催された医学教育等関係業務功労者表彰式に出席してまいりました。臨床検査関係業務はもとより、看護関係業務、診療放射線業務、薬剤関係業務、歯科技工業務、歯科衛生業務、リハビリ関係業務、給食関係業務、環境整備関係業務、研究補助業務、解剖関係業務、実験動物管理関係業務と、私の知らない職種もあり多種多彩な職種の人達が対象者だったことを知りました。そして、北海道から5人選出され、全国からも101人と思っていたよりも少ない人数しか選出されていないことを知り、大変な賞を頂いたことに戸惑いながらも感激してまいりました。

思い起こせば、北海道大学病院検査部に勤めてから35年になりました。この賞を頂き振り返ると毎年4ヶ月～6ヶ月の間、毎日来る実習生に講義をしたり、実習していたんだなと思い出しました。朝の挨拶もしないような実習生や、教えているのに目の前で寝る実習生が居ても我慢して教えていたのを思い出しました。振り返ると、神経生理は面白い、就職したら神経生理をやりたいという学生の一言を聞きたくて教えていたのだらうと思います。神経科臨床医に、研修医の実習を2年間位頼まれて引き受けた時もありました。あの時のことは鮮明に記憶しておりますが、下調べが大変で後で後悔したのを懐かしく思い出しました。

最後に、この功労賞は私が一人で取れたものではなく、私を厳しく指導してくださった検査部の諸先輩方、歴代の部長、歴代の技師長、職場の同僚達のお蔭であり深く感謝しております。また、私をこの職場に置いてくださいました北海道大学病院の関係各位にも深く感謝しております。

11月22日（木）、医学教育等関係業務功労者表彰式に出席し、101名の方々と共に表彰を受けてまいりました。

私が看護師になるきっかけは、昭和46年に北海道大学医学部附属看護学校に入学したことでした。殆どの同期が看護師志望という中で、私は資格の取得のみを希望しており、看護師として働くことは考えていませんでした。同期生からは、「こんなに長く看護師として働いているとは思わなかった」とよく言われます。このような私が看護師として40年近く北海道大学病院に在職したきっかけはふたつありました。ひとつは、真剣に患者さんと向き合い看護を行っている先輩看護師の姿を常に身近に見ることができたこと、もうひとつは、新米看護師であった私が休暇を終えベッドサイドへ行くと、「久しぶりね」と声をかけてくれた患者さん達でした。新米の私を待っていてくれた患者さんがいたことが、とても嬉しかったことを今も覚えています。

私は第3内科をスタートに皮膚科形成外科、循環器内科、小児科、口腔外科、そして現在はリハビリ科・麻酔科・消化器内科に勤務しています。それぞれの部署でじっくり専門分野の看護を実践してきたことが私の財産になっています。この間には2人の子供に恵まれ、育児と仕事の両立という時期もありました。両立の秘訣は「無理をしない」ということだったように思います。後輩に残す言葉があるとすれば、患者さん一人ひとりの人生の重みを尊重し、寄り添いながら看護を実践すること。そして無理せず自分自身も大切にしてほしいということです。

最後に今回の受章にあたり、看護部長をはじめ多くの皆様のご尽力に深く感謝するとともに、北海道大学病院の益々の発展を願っております。

（北海道大学病院）

文学研究科教授 高橋英光著の図書が 平成24年度（第46回）市河三喜賞を受賞

文学研究科西洋言語学講座教授 高橋英光著の図書「*A Cognitive Linguistic Analysis of the English Imperative: With Special Reference to Japanese Imperatives*（英語命令文の認知言語学分析：日本語命令文への論及を含む）」（John Benjamins, 2012年）が、平成24年度（第46回）市河三喜賞を受賞しました。

市河賞とは、優れた英語学研究に与えられる賞として日本の英語学の祖と言われる元東京帝国大学教授、市河三喜博士の名にちなんで1966（昭和41）年に設けられた賞です。一般財団法人語学教育研究所が運営し、英語学の分野で最も権威ある賞と言えます。同書は、認知言語学の観点からなされた世界で最初の英語命令文の包括的研究であり、オランダのジョン・ベンジャミン社からHuman Cognitive Processingシリーズ第35巻（<http://benjamins.com/#catalog/books/hcp.35/main>）として出版されました。

本書は、英語命令文が具体的文脈の中で聞き手に行使する力を数値化する独自のパラメータを提示し、さらに受動態命令文、完了命令文等の複雑な命令構文、動詞の使用頻度と使い方、典

型と非典型、命令文と間接指令文の使い分けなど、英語命令文に関わる多様な現象を網羅しています。そして最後に、提示した理論が英語のみならず日本語を含む他言語にも適用する可能性を示しています。また、本書の裏表紙には、認知言語学の創始者の一人であるロナルド・ラネカー教授（カリフォルニア大学サンディエゴ校名誉教授）の推薦文が寄せられています。

市河賞の贈賞式は、11月17日（土）・18日（日）に東京家政大学で開催された、今年度の語学教育研究所の研究大会の中で行われ、高橋教授には賞状と市河博士の東京帝国大学卒業の際の論文のファクシミリ版、記念の時計が授与されました。選考委員長である中島平三教授（学習院大学、元日本英語学会会長）は受賞理由として、「小説とコーパス*から膨大かつ有意義なデータを提示している」、「生成文法や語用論等の言語学の先行研究の成果を十分に踏まえている」、「狭いひとつの方法論に固執せず広い視点から問題を分析している」、「英語母語話者でなくても世界水準の英語学研究ができることを実証した」、及び「英語教育にも貢献するものが大きい」ことを挙げました。

今回の高橋教授の受賞は、本学の多くの英語学・言語学研究者にとって大きな励みになるものと思います。

*コーパス

大量の言語使用例を集積した電子資料

（文学研究科・文学部）



賞状授与の様子



賞状を手にする高橋教授

平成24年度北海道大学フロンティア奨学金受給者の決定

この度、北海道大学フロンティア奨学金の学部2年次以上及び大学院生の平成24年度受給者が決定しました。

北海道大学フロンティア奨学金は、本学が掲げる「フロンティア精神」、「国際性の涵養」、「全人教育」及び「実学の重視」の4つの基本理念のもとに、将来、社会の各分野においてリーダーとして活躍できる人材の育成を目的と

して、今年度から創設された返還義務のない給付型の奨学金です。

また、本奨学金は企業、個人、同窓生及び教職員の皆様方からご支援をいただいております「フロンティア基金」により運営されています。

今年度は各学部・研究科等から推薦があった41名の学生のうち、選考委員による厳正なる審査の結果、学部生14

名、大学院生10名が本奨学金最初の受給者として決定しました。受給者には1年間にわたり、月額5万円が給付されます。

なお、本学1年次（総合教育部）については、平成25年3月に受給者が決定する予定です。

（学務部学生支援課）

北大フロンティア基金

北大フロンティア基金は、本学の創基130年を機に、教育研究の一層の充実を図り、これまで以上に自主性・自立性を発揮して大学としての使命を果たすため、平成18年10月に創設しました。

募金目標額は50億円です。奨学金制度の充実や留学生への支援などの学生支援を中心に、研究支援、学部等支援など様々な事業を行っており、期限を付さない、息の長い募金活動することとしています。

皆様には基金の趣旨にご賛同いただき、ご協力をお願いします。

北大フロンティア基金情報	13,677件 2,537,227,672円
基金累計額（11月30日現在）	教職員の寄附率 29.1%（1,129件／3,878人）

11月のご寄附状況

法人等4社、個人53名の方々から3,721,000円のご寄附を賜りました。

そのご厚志に対しまして感謝を申し上げますとともに、同意をいただいているの方々のご芳名、総合博物館への銘板の掲示について掲載させていただきます。（五十音別・敬称略）

寄附者ご芳名（法人等）

厚別中央通どうぶつ病院、原子燃料工業株式会社、一般財団法人苫小牧保健センター、ドリーミン・ベル

寄附者ご芳名（個人）

合川 正幸	石 好八郎	石川三千雄	上田 敦	大槻 博	小内 透	小原 大和	金川 眞行
加茂川幸夫	工藤 英洋	倉持 仁	小長井奎幸	小松 寿幸	近藤 哲也	佐野 公昭	Stuhlraeger-中西 眞理
杉村 興作	瀬名波栄潤	高橋 秀樹	高橋 光彦	千葉 博之	土家 琢磨	寺澤 睦	豊田 威信
中山 誠一	西田 明弘	野坂 政司	春名 敏弘	平井 喜郎	星野洋一郎	堀田 博司	三田村好矩
柳谷 君予	山崎 賢司	山田 昭雄	吉田 広志				

銘板の掲示（20万円以上のご寄附） （法人等）

一般財団法人苫小牧保健センター

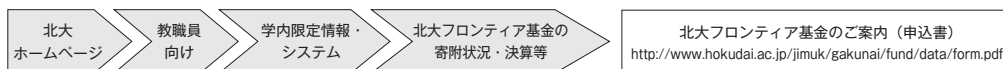
（個人）

小松 寿幸、高橋 秀樹

ご寄附のお申し込み方法

①給与からの引き落とし

申込書は、本学ホームページの「学内限定情報・システム」からダウンロードし、ご記入の上基金事務室に提出してください。



②郵便局または銀行への振り込み

基金事務室にご連絡ください。払込取扱票をお渡しします。

③現金でのご寄附

寄附申込書に現金を添えて、事務局財務部経理課収入担当にご持参ください。申込書は、本学ホームページから上記①の要領でダウンロードしてご記入いただくか、各部局事務担当及び事務局財務部経理課収入担当にご用意していますので、ご利用ください。

北大フロンティア基金に関する問い合わせ 基金事務室（事務局・学内電話 2017）

（総務企画部広報課）

AO入試合格者の発表

平成25年度AO入試は、募集人員63名に対し、163名の出願があり、自己推薦書、個人評価書等の出願書類による第1次選考合格者に対して、11月18日（日）に第2次選考の課題論文と面接試験を実施し、12月4日（火）に合格者発表を行い、33名が合格しました。

なお、大学入試センター試験を課す医学部及び工学部の合格者発表は、平成25年2月12日（火）を予定しています。

（学務部入試課）

平成25年度AO入試合格者数等一覧

学部・学科等		募集人員	志願者数	倍率	合格者
理学部	物理学科	5	4 (1)	0.8	3 (1)
	化学科	8	19 (10)	2.4	7 (7)
	地球惑星科学科	5	17 (6)	3.4	4 (0)
医学部	医学系	5	6 (2)	1.2	
	保健学系	7	23 (17)	3.3	
	看護学専攻 作業療法学専攻	4	21 (16)	5.3	
歯学部		5	17 (7)	3.4	5 (3)
工学部応用理工系 （応用マテリアル工学コース）		4	6 (1)	1.5	
水産学部		20	50 (11)	2.5	14 (3)
計		63	163 (71)	2.6	33 (14)

※（ ）内の数字は、道内高校出身者で内数。

帰国子女入試合格者の発表

平成25年度帰国子女入試は、12学部に出願があり、出願書類による第1次選考合格者に対し、11月18日（日）に第2次選考の課題論文と面接試験を実施し、12月4日（火）に合格発表を行い、10名が合格しました。

（学務部入試課）

平成25年度帰国子女入試合格者数等一覧

学部・学科等			募集人員	志願者数	合格者
文学部			若干名	3 (2)	1 (1)
教育学部				3 (1)	1 (1)
法学部				4 (3)	2 (2)
経済学部				7 (3)	1 (0)
理学部	数学科			－	－
	物理学科			－	－
	化学科			－	－
	生 物 科学科	生物学専修分野		3 (0)	1 (0)
		高分子機能学専修分野		－	－
	地球惑星科学科			1 (0)	0 (0)
医学部	医学系			7 (4)	0 (0)
	保健学系	看護学専攻		－	－
		放射線技術科学専攻		－	－
		検査技術科学専攻		－	－
		理学療法学専攻		1 (1)	0 (0)
		作業療法学専攻		－	－
歯学部				1 (0)	0 (0)
薬学部				1 (0)	1 (0)
工学部	応用理工系			2 (1)	1 (1)
	情報エレクトロニクス系			－	－
	機械知能工学系			7 (1)	2 (1)
	環境社会工学系			1 (1)	0 (0)
農学部				2 (0)	0 (0)
獣医学部				3 (1)	0 (0)
水産学部				1 (0)	0 (0)
計				47 (18)	10 (6)

※（ ）内の数字は、女子で内数。

大学入試センター試験 本学一般入試個別学力検査等 実施体制等の決定

11月22日（木）開催のアドミッションセンター企画運営会議・総務部門・試験場部会合同会議において、平成25年度大学入試センター試験及び本学一般入試個別学力検査等に係る実施体制等を決定しました。

なお、大学入試センター試験については、藤女子大学、天使大学、東海大学札幌キャンパス、北海道武蔵女子短期大学との共同実施となります。

主な事項は、次のとおりです。

(学務部入試課)

大学入試センター試験

1 実施本部の設置

試験実施について総括し、連絡・調整するため実施本部を設け、その下に総務部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置く。

2 試験場及び担当学部

(札幌市)

試験場・会場	試験場所	担当学部等
北海道大学試験場		
農学部会場	農学部	農学部
人文・社会科学総合教育研究棟会場	人文・社会科学総合教育研究棟	※法学部・経済学部
理学部会場	理学部	理学部
工学部会場	工学部	工学部
高等教育推進機構A会場	高等教育推進機構E棟1階、2階	※教育学部・文学部
高等教育推進機構B会場	高等教育推進機構E棟3階	※薬学部・歯学部
高等教育推進機構S会場	高等教育推進機構S棟	※医学部・獣医学部
高等教育推進機構N会場	高等教育推進機構N棟	実施本部
藤女子大学試験場	藤女子大学	藤女子大学・天使大学・東海大学

※は、複数学部で担当する試験場の主担当学部。

(函館市)

試験場	試験場所	担当学部
北海道大学水産学部試験場	水産学部	水産学部

3 試験場関係者の集合及び解散時刻

試験関係者	1月19日（土）・20日（日）	
	集合時刻	解散時刻
1 実施本部、広報部	7時30分	本部長の指示による
2 総務部	7時10分	〃
3 救急医療部	8時10分	〃
4 連絡部	7時00分	連絡部会責任者の指示による
5 試験場責任者、試験場責任者補佐、試験場部員、試験場事務担当者	7時20分	本部長の指示による
6 室内監督者	8時30分	試験場責任者の指示による
7 監督補助者（リスニング監督補助者を含む。）	8時30分	〃
8 室外監督者	8時00分	〃
9 連絡員	7時00分	連絡部会責任者の指示による

なお、監督者説明会を平成25年1月11日（金）及び1月15日（火）に学術交流会館で開催しますので、監督者等となった方はいずれか一方に必ず出席願います。

本学一般入試個別学力検査等

1 実施本部の設置

試験実施について総括し、連絡・調整するため実施本部を設け、その下に総務部、出題部、採点部、試験場部、救急医療部、連絡部及び広報部を置く。

2 試験場及び担当学部

前期日程

試 験 場	試 験 場 所	担 当 学 部
第1試験場（農 学 部）	農 学 部	農 学 部
第2試験場（人文・社会科学総合教育研究棟）	人文・社会科学総合教育研究棟	※文 学 部 ・ 教 育 学 部
第3試験場（理 学 部）	理 学 部	理 学 部
第4試験場（工 学 部）	工 学 部	工 学 部
第5試験場（高等教育推進機構E棟1階、2階）	高等教育推進機構E棟1階、2階	※経 済 学 部 ・ 法 学 部
第6試験場（高等教育推進機構E棟3階）	高等教育推進機構E棟3階	※歯 学 部 ・ 薬 学 部
第7試験場（高等教育推進機構S棟）	高等教育推進機構S棟	※獣 医 学 部 ・ 医 学 部

※は、複数学部で担当する試験場の主担当学部。

（上記7試験場で受験者を収容できない場合、別の試験場を設けることがある。）

（第5試験場は、高等教育推進機構大講堂、N1及びN2の教室を含む。）

（第7試験場は1日目を獣医学部、2日目を医学部が担当する。）

後期日程

試 験 場	試 験 場 所	担 当 学 部
第1試験場（農 学 部）	農 学 部	農 学 部
第2試験場（人文・社会科学総合教育研究棟）	人文・社会科学総合教育研究棟	※法 学 部 ・ 経 済 学 部
第3試験場（理 学 部）	理 学 部	理 学 部
第4試験場（薬 学 部）	薬 学 部	薬 学 部
第5試験場（歯 学 部）	歯 学 部	歯 学 部
第6試験場（工 学 部）	工 学 部	工 学 部
第7試験場（高等教育推進機構E棟）	高等教育推進機構E棟1階、2階	※教 育 学 部 ・ 文 学 部
第8試験場（高等教育推進機構N棟）	高等教育推進機構N棟	獣 医 学 部
第9試験場（高等教育推進機構S棟）	高等教育推進機構S棟	医 学 部
第10試験場（水 産 学 部）	水 産 学 部	水 産 学 部

※は、複数学部で担当する試験場の主担当学部。

（第7試験場は、高等教育推進機構大講堂、N1及びN2の教室を含む。）

3 試験場関係者の集合及び解散時刻

前期日程

試 験 関 係 者		2月25日（月）・26日（火）	
		集 合 時 刻	解 散 時 刻
1 実施本部，広報部		7時20分	本部長の指示による
2 総務部		7時10分	〃
3 出題部	責任者，責任者補佐	8時30分	〃
	教科・科目責任者	各担当科目の試験開始の30分前	
	部員	各担当科目の試験開始の10分前	
4 採点部		採点部会責任者の指示による	
5 救急医療部		8時00分	本部長の指示による
6 連絡部		7時20分	〃
7 試験場責任者，試験場責任者補佐，試験場部員，試験場事務担当者		7時20分	〃
8 室内監督者		8時15分	試験場責任者の指示による
9 室外監督者		7時50分	〃
10 連絡員		7時20分	連絡部会責任者の指示による

後期日程

試 験 関 係 者		3月12日（火）	
		集 合 時 刻	解 散 時 刻
1 実施本部，広報部		7 時50分	本部長の指示による
2 総務部		7 時20分	〃
3 出題部	責任者，責任者補佐	9 時00分	〃
	教科・科目責任者	各担当科目の試験開始の30分前	
	部員	各担当科目の試験開始の10分前	
4 採点部		採点部会責任者の指示による	
5 救急医療部		8 時30分	本部長の指示による
6 連絡部		7 時50分	〃
7 試験場責任者，試験場責任者補佐，試験場部員，試験場事務担当者		7 時50分	〃
8 室内監督者		8 時50分	試験場責任者の指示による
9 室外監督者		8 時20分	〃
10 連絡員		7 時50分	連絡部会責任者の指示による

なお、監督員説明会を前期日程は平成25年2月19日（火）及び2月22日（金）、後期日程は3月8日（金）及び3月11日（月）に高等教育推進機構大講堂で開催しますので、監督者等となった方はいずれか一方に必ず出席願います。

第21回北海道大学教育ワークショップ（FD）を開催



教育ワークショップ参加者

全学の主に若手教員を対象とした教育ワークショップを11月9日（金）・10日（土）の両日、奈井江町の農業構造改善センターを会場に会合形式で開催しました。

このワークショップは、本学のFD（ファカルティ・ディベロップメント）の一環として、平成10年度から毎年実施しているもので、平成19年度からは春と秋の年2回実施しています。今回は6月に行われたワークショップ同様、「総合教育の充実を目指して」をテーマに開催しました。本学の教員24名と他大学から3名の計27名の参加があり、仮想的な授業科目を立案し、そのシラバスを作成することにより教育の基礎を理解し、新しい教育手法を身

に付けることを目指しました。

開催にあたり、山口佳三理事・副学長から挨拶があった後、「北大の全学教育と総合入試」、「授業における著作権」、「特許出願」等のミニレクチャーを挟み、午後からは4グループに分かれ、シラバスを作成するメインプログラムに入りました。

このプログラムでは、課題の説明、グループ討論と成果の発表、全体討論をセットにして3回行い、シラバスを具体的に作り上げていく過程を通して、授業の目的・内容・評価方法の3つの基本的要素を体験的に学びました。

グループ作業は、討論進行係、記録係、発表係の役割分担を決めて進められ、設定された課題を次々と実施して

いきました。各グループでは、それぞれ工夫を凝らした授業科目に係るシラバスが設計され、発表の場では質問や議論が活発に行われました。

最後に、細川敏幸高等教育推進機構高等教育開発研究部門長から受講者へ教育ワークショップ修了証書が手渡されました。

参加者からは、「シラバスの作成方法を学び、実際に作成する際の参考になった」、「教育方法・評価についての知識が得られた」、「他分野の教員と討論及び交流ができて良かった」等の感想が寄せられました。

（高等教育推進機構）



グループ討論の様子



発表時の意見交換の様子

「北海道地区FD・SD推進協議会」 総会を開催



テーマ別セッションの様子

11月21日（水）、学術交流会館において、「北海道地区FD・SD推進協議会」の第3回総会を開催しました。

当推進協議会は、参加校である道内53の大学・高等専門学校が連携・協同して、FD・SD及びTAD*の推進に係る情報の交換・共有やプログラムの共同開発を目的として平成21年10月に設立され、本学が代表幹事校を務めています。

総会の第1部（午前の部）には、関係者約50名が出席し、山口佳三理事・副学長の挨拶の後、大学コンソーシアム京都 川面きよ専門研究員から「大学コンソーシアム京都の現状と課題～第4ステージプランに向けて～」と題した特別講演が行われ、出席した関係者は熱心に聞き入っていました。また、講演後には、活発な質疑応答がなされました。

この後、総会の議事となり、次期幹事校の選出、平成24年度の活動報告及び平成25年度活動計画に関する検討等が行われました。

総会の第2部（午後の部）には、関係者41名が出席し、FDやSDに関する諸問題についてテーマ別セッションが行われました。

テーマ別セッションでは、FDやSDに関してそれぞれの大学が抱えている現状や課題について、次の3つのテーマ「初年次教育における学習意欲の向上について」、「学習支援について」、「SDにどう着手するか」に分かれて事例等を報告し、討議が行われました。

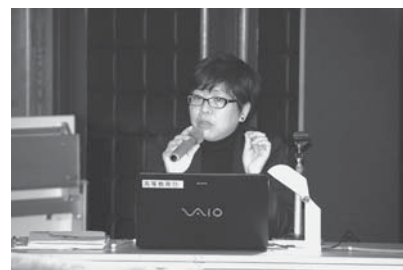
*TAD

ティーチング・アシスタント（TA）の教育能力向上のための組織的取組み

（学務部教務課）



総会の様子



川面講師による特別講演

「冬山登山講習会」を開催



会場の様子



11月20日（火）午後6時30分から、情報教育館3階スタジオ型多目的中講義室において、大城和恵さん（心臓血管センター北海道大野病院医師）を講師に招き、冬山登山講習会を開催しました。

本講習会は、学務部と体育会山スキー部（顧問：獣医学研究科教授 片倉 賢）の主催により行われたものです。

大城医師は日本初の国際山岳医であり、自身も豊富な登山経験を有する登山家です。また、本学OBの三浦雄一

郎氏のMIURA EVEREST 2013の帯同医師に選ばれるなど、国内外で活躍されています。

そのご自身の豊富な経験と国際山岳医としての立場から、「低体温症と雪崩埋没のファーストエイド～事例から学ぼう」と題して講演いただきました。

大城医師は、低体温症になった場合の対処方法、雪崩に遭った方の救助等について、海外の事例などを交えて話されました。また、冬山という特異な現場で救難救急や医療に携わる方々の苦労や、雪崩による遭難を防ぐための

海外の活動等も紹介されました。

会場には70名を超える一般市民、山岳系団体関係者、学生及び教職員が来場し、熱心に聞き入っていました。

講演終了後は、参加者から雪崩に遭った場合の措置などについて、熱心な質疑があり、命の大切さとともに冬山の安全登山について、決意を新たにしていました。

（学務部学生支援課）



講演を行う大城医師



質疑応答の様子

第12回北大・九大合同フロンティア・セミナーを開催

11月9日（金）、東京ステーションコンファレンス（東京都千代田区丸の内）において、「地域医療と生活習慣病の未来」をテーマに第12回北大・九大合同フロンティア・セミナーを開催しました。本セミナーは、本学と九州大学が現在進めている研究について、広く産業界、社会人、同窓生の皆様に知っていただき、各分野の方々との連携・交流を深めるため、平成20年度より合同で開催しています。

第12回目となる今回のセミナーは、同窓生のほか、医療関係の仕事をされている方々等から200名を超える申込があり、約170名の方々にご参加いただきました。

最初に登壇した本学の大滝純司教授（医学研究科）は、「医療体制と医学教育改革～医療崩壊の危機とグローバル化の嵐の中で～」と題し、医師の偏在とその諸問題や、医学教育の改革の状況、及びグローバル化の状況について、DVD映像等を交えながらわかりやすく講演を行いました。

次に、九州大学の清原 裕教授（医学研究科）は、「変貌する日本人の生活習慣病～半世紀に及ぶ久山町研究からのメッセージ～」と題し、長年にわたり福岡県久山町で行われている生活習慣病に関する研究から得た成果を元に、生活習慣病の時代的な変化や今後の課題や対策について講演されました。

休憩をはさんで行われたパネルディスカッションでは、本学の吉岡充弘教授（医学研究科）がコーディネーターとなり、講演を行った大滝教授及び清原教授がパネリストとなって、両教授の講演内容を中心に、参加者から寄せられた質問への回答を交えながら進められ、盛会のうちに終了しました。

なお今後も、平成25年1月12日（土）に都市センターホテル（東京都千代田区平河町）で第8回九州大学・北海道大学合同活動報告会の開催を予定して



講演する大滝教授



パネルディスカッションの様子

いますので、このイベントにも多くの皆様にご参加いただきますよう、よろしくお願いいたします。

（研究推進部研究振興企画課）

第1回「食と健康」研究会を開催

11月20日（火）、創成科学研究棟5階大会議室において、産学連携本部が主催する第1回「食と健康」研究会を開催し、本学研究者をはじめ、食関連の研究をされている学外の研究者、企業の皆様など、107名の方々にご参加いただきました。本研究会は、安全・安心で高品質な「食」に恵まれた北海道において「食」「健康」「医療」分野のプロジェクト立ち上げを目指し、その取り組みを創出するための産学官のプラットフォームです。

北海道においては、「食」に関する産学官連携プロジェクトが複数展開され、「北海道フード・コンプレックス国際戦略総合特区」など産学官金が連携・協働して、「食」の総合産業化を目指す取り組みも進められています。こうした中で、本研究会では、大学の研究シーズを活用して事業化を目指す

ために、学の研究者と産業界等の関係者が相互にオープンな環境で意見交換ができる場を提供するとともに、そこから生まれる課題、テーマ等を整理し、共同研究やプロジェクト形成による競争的資金獲得などを行っていきます。

当日は、上田一郎産学連携本部長の挨拶の後、同本部の木曾良信TLO部門長をはじめとする各担当者から研究会の趣旨・概要や各部会の事業説明が行われましたが、学内者43名に対して学外者64名という参加者があり、本研究会に対する道内関係機関・企業等の期待や関心の高さがうかがい知れました。

本研究会の事務局は、今後とも当産学連携本部が担ってまいります。皆様の期待に応えられるよう、新たなプロジェクト形成に向けて、関係者のご協力を得ながら具体的な成果の創出を目指してまいります。

本研究会に興味のある学内研究者はお気軽に、お問い合わせください。

◆連絡先：jigyo@mcip.hokudai.ac.jp

（産学連携本部）



上田本部長による挨拶



木曾TLO部門長による事業概要説明

動物実験実施者等教育訓練を実施

11月5日（月）・6日（火），クラーク会館講堂において，動物実験の従事者を対象にした教育訓練を開催しました。

この教育訓練は，動物実験の従事者に，関係法令，本学規程等の基礎的な知識，実験申請にあたっての留意点及び実験を実施する上での注意事項等について理解してもらうことを目的とし

たもので，本学規程で受講が義務付けられているものです。

今回の教育訓練には，職員・学生等合わせて約220名が出席し，動物実験委員会委員長である医学研究科 有川二郎教授による挨拶の後に，同委員会委員の先端生命科学研究院 幸田敏明教授，獣医学研究科 安居院高志教授，理学研究院 北田一博准教授，遺伝子

病制御研究所 森松正美准教授及び医学研究科 小山内努特任助教が講義を行いました。

今回受講できなかった従事者の方は，次回の教育訓練をぜひ受講するようお願いします。

（総務企画部総務課安全衛生室）



挨拶を行う有川教授



講義を行う幸田教授



講義を行う安居院教授



講義を行う北田准教授



講義を行う森松准教授



講義を行う小山内特任助教

遺伝子組換え実験の申請等に係る講習会を実施

11月8日（木），クラーク会館講堂において，遺伝子組換え実験等の従事者を対象にした遺伝子組換え実験の申請等に係る講習会を開催しました。

この講習会は，遺伝子組換え実験等の従事者に，関係法令，本学規程等の基礎的な知識及び実験を申請するに当たっての注意事項等について理解してもらうことを目的としたもので，本学規程で受講が義務付けられているものです。

今回の講習会には，職員・学生等合わせて約310名が出席し，遺伝子組換

え実験等安全委員会委員長である薬学研究院 有賀寛芳教授が講義を行いました。

今回受講できなかった従事者の方

は，次回の講習会をぜひ受講するようお願いします。

（総務企画部総務課安全衛生室）



講義を行う有賀教授



会場の様子

「平成24年度 安全監督者会議」を開催

11月20日（火）、事務局大会議室において、「平成24年度 安全監督者会議」を開催しました。安全監督者は、本学札幌キャンパス事業場の部局等の長等であり、部局の安全衛生管理の最高責任者です。当日は、安全監督者及び衛生管理者、安全衛生管理を担当する教員、事務担当者等の44名が出席しました。

会議では上田一郎安全衛生本部長の挨拶の後、澤村正也安全衛生本部副本部長から、本学に配置されている衛生管理者の現状及び安全衛生本部が理学部、農学部において試行的に実施している全学安全衛生巡視についての説明

があり、また、今後、試行の範囲を拡大していく上での協力要請が行われました。

続いて、巡視の中で特に指摘の多い事例紹介、最後に学生に対する健康診断の受診について周知の要請がありました。

出席者からは、各部局で独自に実施している衛生管理者による巡視と安全衛生本部の全学安全衛生巡視との兼ね合いや、普段の部局での安全衛生管理上の問題についての質問や要請が出されるなど、活発な質疑応答が行われました。

安全衛生管理には、現場の自主管理

とともに、トップの高い意識が必要であり、安全衛生本部では今後も実際の事例を多く取り込みながら、安全衛生管理に必要な知識について安全監督者の皆様に伝えて参ります。

（総務企画部総務課安全衛生室）



説明する上田本部長（右）と澤村副本部長（左）

◆巡視の際、特に改善のお願いをしている事例

1. 棚・ロッカーの固定
2. 電気配線の定格容量の遵守（タコ足防止）
3. ボンベの2点支持、ボンベ台の固定
4. 毒物及び劇物の適正保管（保管庫の施錠と鍵の管理、金属製の保管庫等）



会場の様子

平成24年度北海道地区国立学校等安全管理協議会に参加

11月22日（木）、小樽商科大学において、平成24年度北海道地区国立学校等安全管理協議会（主催：小樽商科大学）が開催され、本学の各部局等から17名が参加しました。本協議会は毎年、道内の大学等の安全衛生管理担当者が集まり、研究室の作業環境管理から健康診断、メンタルヘルスまで多岐にわたる労働安全衛生管理業務について、講習や情報交換を行い、発意研鑽の場として活用されています。

会議では本学の安全衛生本部副本部長 澤村正也教授から「国立七大学安全衛生管理担当者連絡協議会中間報告書」について報告がありました。これは、大学の安全衛生管理の現状における問題点と課題を示したものです。

また、中央労働災害防止協会の工藤薫氏から、職場の安全衛生管理業務の

状況や様々な課題について解説があったほか、株式会社アムリプラザの庄野二郎氏から、職場のメンタルヘルスについて、体験型学習を通じての解説が行われました。

メンタルヘルス対策は、例年、この会議で取り上げられている話題ですが、今回は「聴き方」やハラスメント診断などを通じ、カウンセリングの難しさやハラスメントの実態について、自ら体験して学ぶことのできるよい機

会となりました。

安全管理協議会は、毎年10月から11月の期間に開催され、学内で安全衛生管理に関わる教職員であれば誰でも参加できるものです。来年度も安全衛生管理者にとって時流に沿った実務的なテーマを協議するため、開催される予定です。

（総務企画部総務課安全衛生室）



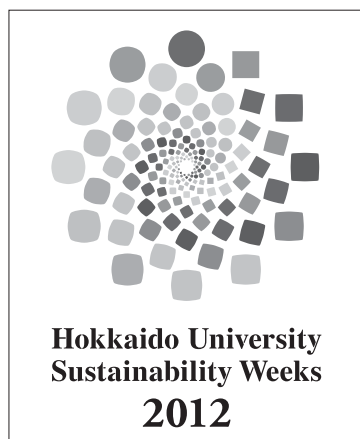
澤村教授による報告



会場の様子

サステナビリティ・ウィーク2012の開催

サステナビリティ・ウィーク2012を振り返って



サステナビリティ・ウィーク2012実行委員長
国際担当理事・副学長 本堂 武夫

北海道大学サステナビリティ・ウィークは今年、公式にロゴマークを定め、気持ちも新たに6回目を開催しました。テーマとして「安心して暮らせる社会づくり」を掲げ、我々の暮らしを脅かす災害やエネルギー問題等の不安定な世界情勢といった多様な不安要素の回避や解決を目指して議論する機会を提供しました。

第1回のホームカミングデー2012開催日と同日の10月6日（土）に開幕し、10月21日（日）までの16日間に15企画を開催しました。これに、前後の期間を合わせると、36行事が実施されました。

全体像

あらゆる学問分野から参加がありましたが、これを大きく5つに分類すると、次のようなサブ・テーマに集約されます。

- （1）社会のモデルを示す：9行事
北海道のポテンシャルを活かし、安心して暮らせる社会のモデルを世界に発信する企画
- （2）協力ネットワークを広げる：5行事
国境を越えた協力をさらに進めるための企画
- （3）健やかに人間らしく生きる：10行事
一人ひとりが身体的、精神的、社会的に良好な状態（Well-being）で質の高い生活（Quality of Life）を送れるコミュニティの実現に向けた企画
- （4）調和を見いだす：3行事
自然の恩恵を意識しつつ環境を損なわずに暮らす道を模索する企画
- （5）未来への学び：9行事
知習や課題を分かち合い共感することを通じて、新たな未来を切り開く心、ちから、仲間を育む企画

サステナビリティ・ウィークの価値

中には、公共政策大学院と環境科学院が共催している「環境政策セミナー」や、工学研究院の「持続可能なサニテーション」、文学研究科の「地理空間が拓く未来」のように、毎年サステナビリティ・ウィークに参加し、着実に議論を積み上げている企画がいくつもあります。一方で、附属図書館の「STAND UP TAKE ACTION」のように新たに加わった企画や、数年ぶりに復活参加した企画、隔年で参加するため今年はお休みの企画などがあります。どれもサステナビリティ・ウィークという一つのプラットフォームに集うことが歓迎されます。

なぜならば、行事一つひとつを個別に開催していたのは異なる成果を生み出すからです。それは、他の学問分野と共通する課題の発見を促す効果や、日本国内さらには国際社会における本学のレジリエンス（視認性）を高める効果、本学が備え持つ人的資源・知的資源を可視化する効果です。その中でも最も注目すべきは、現代社会が抱える課題について本学が果たしている社会的責任の内容、つまり社会貢献のメニューや状況が一覧できる点が、サステナビリティ・ウィークの価値であり、全学で取り組むのに相応しい行事であることのひとつの理由です。

将来に向けて

そもそも2005年から本学の国際（展開）戦略テーマとして「持続可能な開発」を掲げ、2007年にサステナビリティ・ウィークを開始した背景には、世界の要請に応える大学として、国際社会の中でその存在を顕在化していきたいという思いがありました。今、世界のカレンダーを見ますと、2014年は国連「持続可能な発展のための教育の10年」（DESD）キャンペーンの最終年であり、2015年はミレニアム開発目標（MDGs）の達成が問われる年です。より良い世界を築くために国際社会が一体となって取り組むべき事項について、大学もこれまでの働きが検証される時期が近づいています。

そこで世界の動きに先んじて本学は、来年のサステナビリティ・ウィーク2013の中で、これまでの本学の働きを総括し、2015年以降に本学がどのように国際社会に貢献していくか方向を定めるための手掛かりを得たいと考えています。

最後に

毎年企画される方々の利便性を考えて、今後サステナビリティ・ウィークは開催時期を固定することにし、10月の最終週から11月の最初の週にかけて開催すること、その直前の土曜日にオープニング行事を行うことを決定しました。従いまして、2013年は10月26日（土）から11月3日（日）に開催します。

持続可能な社会の実現の担い手が世界中から集まる機会として、また本学のアクティビティを内外に問う機会として、北海道大学はサステナビリティ・ウィークの一層の発展を目指していきます。皆様のご理解とご参加をお願い申し上げます。



サステナビリティ・ウィーク2012の看板を紹介する学生レポーター
10/6（土）・7（日）開催
「24時間国際サステナ対話」にて



授賞式の記念写真
10/13（土）～21（日）開催
「第4回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」にて



集まった行事のチラシ



サステナビリティ・ウィーク2012のパンフレット



サステナビリティ・ウィークのウェブサイト
<http://www.sustain.hokudai.ac.jp/sw/jp/>

9月10日（月）～14日（金） 会場：オウル大学、オウランカ研究所（フィンランド）

フィンランドー北大 ジョイント・シンポジウム：北方圏の環境変化

主催：オウル大学、ラップランド大学、北海道大学、フィンランドセンター／実施責任者：国際本部国際連携課 国際企画担当

9月に入り最も寒い朝、フィンランド・オウル市において、5日間にわたる第5回フィンランドー北大 ジョイント・シンポジウムが開幕しました。

オープニングセレモニーはオウル大学のLauri Lajunen学長の挨拶で始まりました。挨拶では、オウル大学は特に環境テクノロジーの分野で顕著な業績を挙げていることが強調されるとともに、近い将来、本学とオウル大学間で環境に特化したジョイント・マスター・プログラムが始まるよう強い期待が示されました。

次に、本堂武夫理事・副学長が、本学が学生の留学を強く後押ししていることの一例として、シンポジウムの1週間前、学生16名がヘルシンキ大学とラップランド大学を訪れた「ファースト・ステップ・プログラム」を紹介しました。また、本堂理事・副学長は、フィンランドと日本は同じ巨大な隣人・ロシアとの良好な関係を築くことが極めて重要であると提起しました。

ラップランド大学のMinna Uotila副学長は、本学の学生が「ファースト・ステップ・プログラム」で同大学を訪れたことを話され、今後も交換留学プ

ログラムを歓迎したいと述べました。さらに、社会福祉と北極圏の課題に関して共同研究の活性化を促したいと話しました。

フィンランドセンターのKauko Laitinen代表は、北海道とフィンランドが特別でしかも長い付き合いがあることを強調し、フィンランドセンターの今年の研究課題が「高等教育」「地域研究」「建築とデザイン」であることを紹介しました。

シンポジウム・セッションは、フィンランド日本教育協会のHeikki Makipaa理事長によるプレゼンテーション「北方圏の自然環境に関するフィンランドと日本の協力」で始まりました。彼の主たるメッセージは、私たちは子どもたちのために「持続可能な社会」を構築する責任があり、そのような社会を創る上で、この種の研究集会は重要だということでした。また、「University of the Arctic（北極圏大学）*」への加入は、パートナー大学を互いに訪れるよい機会にもなると言及しました。

昼食や休憩時間にも参加者間で様々な対話が続けられ、新しいアイデアを生み出しているように見受けられまし

た。全ての参加者は、このシンポジウムが将来も続くことを望んでおり、来年は札幌での開催を予定しています。

*University of the Arctic：

北極圏8ヶ国（カナダ、デンマーク、フィンランド、アイスランド、ノルウェー、ロシア、スウェーデン及びアメリカ合衆国）の教育研究機関を中心とした、北方圏の持続的な発展を目的とする教育研究機関ネットワーク。



本堂理事・副学長のスピーチ



オウランカ研究所前での集合写真

9月13日（木）・14日（金） 会場：NOVOTEL BOGOR（インドネシア共和国）

環境・生態に関する施策と環境評価モデリング

主催：サステイナビリティ学教育研究センター／共催：インドネシア科学院（LIPI）／実施責任者：農学研究院 教授 大崎 満

地球規模課題対応国際協力事業（SATREPS）の採択課題のひとつである「インドネシアの泥炭・森林における火災と炭素管理」プロジェクト（2008年北海道大学採択）における国際シンポジウムの一環として、本企画をインドネシア科学院（LIPI）と共同開催しました。

本企画は、インドネシアの熱帯泥炭地における持続可能な環境マネーজে

ントに焦点を当て、環境政策とモデリングに関する議論を深めることを目的としています。特に、昨今の地球の温暖化問題におけるインドネシアを取り巻く状況は世界的にも大変注目を浴びています。熱帯生態系に対する国際的な関心が気候変動への適応策と緩和策、及び生物多様性の観点から大変重要とされているため、本企画の「環境・生態に関する施策と環境評価モデリン

グ」に対して、参加者から大変な興味と関心が寄せられました。特に、特別講演としてWetlands InternationalからNyoman Suryadiputra氏が「Sustainable Developments on Peatland Areas（熱帯泥炭地における持続可能な開発）に関する発表を行い、日本大学の小林紀之先生が「International Movement of Carbon Credit（カーボンクレジットの国際的動向）」に関する発表を行いました。そ

して、国立環境研究所の大石 優氏、亀井秋秀氏からはGOSAT, GOSAT-2, and Regional Carbon Flux Estimation (GOSAT*, GOSAT-2と地域的なカーボンフラックス評価)に関する講演が行われ、活発な議論を行うことができました。

また、本学の学生2名を本シンポジ

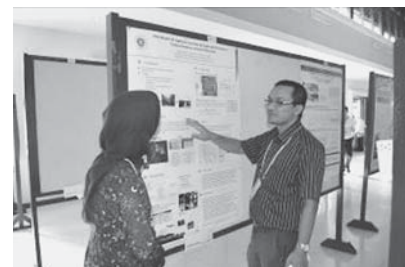
ウムに派遣することができました。海外での発表に加え、海外の多くの研究者と議論を重ねる経験をしたことにより、彼らの今後の研究活動が大変有意義なものになることは言うまでもありません。また、こうした活動は、研究面においても大変重要な位置づけとなっています。サステナビリティ学

教育研究センターは、今後も学生の人材育成に力を入れ、学生への発表の機会を形成していきます。

*GOSAT：温室効果ガス観測技術衛星「いぶき」



関係者の集合写真



ポスターセッションの様子

9月15日(土) 会場：歯学部講堂

本当は歯じゃない歯痛のはなし

主催：歯学研究科／共催：北海道大学歯学会／実施責任者：歯学研究科 助教 有馬太郎

9月15日(土)、晴天のもと、講演会「本当は歯じゃない歯痛のはなし」を開催しました。歯学研究科からサステナビリティ・ウィークへの企画提案は今回で3回目となり、現在まで「顎関節症診断方法」、「痛みについてのサイエンス」を紹介してきました。今年は「歯痛のようで、歯痛ではない痛み」について、つまり患者さん自身は「歯が痛い」と訴えているのにも関わらず原因が歯ではない痛みをテーマとしました。

今回は、歯学研究科から3名の教員が参加し、海外からはデンマーク・オーフス大学より2名の研究者をお招きしました。それぞれが本表題についての臨床経験と研究、過去に行った研究結果を紹介し、各トピックについて活発に討論を行いました。

午前の部では、松下和裕助教が口腔内の手術に伴う神経の損傷について、臨床の症例報告を主体として講演を行いました。続いて、臨床口腔生理学分野のPeter Svensson教授に顎顔面領域

の神経損傷と診断方法、治療法と治療経過について、わかりやすく解説いただきました。

午後の部に入り、いよいよ本題の非定型歯痛について、岡田和樹助教が概念と臨床症例報告を紹介しました。その後、臨床口腔生理学分野のLene Baad-Hansen准教授に同じく非定型歯痛について、定義や発生メカニズム等を講演いただきました。最後に、北川義政教授が顔面神経麻痺や顎欠損と咀嚼筋運動能力の変化について講演しました。全講演終了後には講師の先生方と聴衆との間でディスカッションが行われました。聴衆から臨床、もしくは一般生活の中で困ったことや問題について質問があり、それに対して講演者が知識を寄せて話し合い、とても有意義な時間となりました。

参加者は市民の方や教員、大学院生で37人(うち日本人学生5人、外国人留学生2人)でした。毎年のことですが、ほとんどの方が「よかった」と言ってくださり、数名の方からは「講演は

英語でなくてもよいのではないか？」というご意見をいただきました。総じて大成功のイベントとなりましたが、来年度も一般市民の方が興味を持ってくれるような企画を行いたいと思います。



講演の様子



参加者の様子

9月15日（土）・16日（日） 会場：学術交流会館講堂

第19回日本時間生物学会 特別講演・企画シンポジウム「持続可能な社会と生物時計」

主催：第19回日本時間生物学会学術大会／共催：医学研究科時間医学講座／実施責任者：医学研究科 特任教授 本間さと

「持続可能な社会と生物時計」と題した特別講演・企画シンポジウムを2日間にわたり行いました。

9月15日（土）には、コロンビア大学教授 R.Silver博士による特別講演「脳内中枢時計における環境情報の時間的統合」と、2つのシンポジウム「ほ乳類中枢時計視交叉上核の謎にせまる」、「末梢臓器振動体の臓器特異性、同調、相互作用」を開催しました。

特別講演でSilver博士は、季節による日長変動や環境照度の変化が、ホルモンの変動を介して動物の行動量と行動リズムに影響を与えるメカニズムについて、鳥類と齧歯類を例に解説しました。また、齧歯類の中枢時計のイメージング研究成果を数理的にクラスター解析し、様々な遺伝子障害による影響をグラフィック表示しました。その後の午前のシンポジウムでは、中枢時計の環境照度、温度による調節や時計遺伝子機能について討議が行われ、午後は、摂食時間や食事内容によって臓器の時計が遺伝子発現や生理機能のリズムを変化させるメカニズムについて討

議しました。両シンポジウムを通じて、生物が体内の時計機構を用いて、個体レベルでエネルギー効率を最適化すること、生物時計が個体や種の持続可能性のために重要な機能を持つことが明らかに示されました。

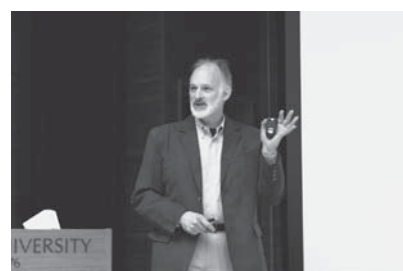
翌16日（日）は、アメリカ・バンダービルト大学のC.Johnson博士によるシアノバクテリアの生物時計の分子機構に関する特別講演と2つのシンポジウムを開催しました。Johnson博士は、地球上で約24時間周期の生物時計を発達させた生物が繁栄するに至った経過について、試験管内で異なる周期のシアノバクテリア変異体の競合実験によって明らかにしています。

シンポジウム「周期決定機構」では、約24時間という生物時計の周期が決定されるメカニズムについて、「生物時計と時を刻む分子」では、24時間周期のリズム発振のための細胞内タンパク修飾のメカニズムについて発表がありました。いずれの発表でも、地球の自転による24時間の明暗サイクル、公転による日長や気温の季節変動に応じ

て、生物が活動量・活動時間・摂食パターンなどを選択し、繁殖や渡り・冬眠・回遊などを行う環境適応戦略として、生物時計がサステナビリティに重要な働きを持つことが確認されました。



コロンビア大学 Silver博士



バンダービルト大学 Johnson博士

9月18日（火） 会場：2iE・国際水環境工学研究所（ブルキナファソ共和国）

国際シンポジウム：アフリカにおけるサステナビリティ学の展開

主催：サステナビリティ学教育研究センター／共催：2iE・国際水環境工学研究所／実施責任者：サステナビリティ学教育研究センター 教授 田中教幸

9月18日（火）、アフリカ・ブルキナファソ共和国にある2iE・国際水環境工学研究所において、戦略的環境リーダー育成拠点事業の一環として毎年実施している国際シンポジウムを開催しました。

2iEの副学長 マイガ教授の開会挨拶の後、本学、台湾・成功大学、インドネシア・パラカラヤ大学、インドネシア・ガジャマダ大学、中国・浙江大學、ブルキナファソ・2iEの代表者から、持続的発展のための教育と研究に関連する14の発表がありました。

本シンポジウムでは、特にアフリカ

の持続的発展に必要な人材の育成、アフリカの環境に適した科学技術の応用に関しての活発な議論が行われ、今後の共同教育プログラムの展開とインターネットによる講義の共有、共同研究を推進するための情報共有を行うことができました。

また、来年度の国際シンポジウムは浙江大學で開催することで、合意が得られました。さらに、フィールド研修プログラム実施の可能性をアフリカまたは中国で検討することが決まりました。



シンポジウムの様子



出席者の集合写真

9月18日（火） 会場：学術交流会館第1会議室

市民セミナー 安心した暮らしと在宅ケアを支える

主催：保健科学研究院／共催：計測自動制御学会 第27回生体・生理工学シンポジウム／実施責任者：保健科学研究院 教授 傳田健三

保健科学研究院は、在宅を中心に安心した暮らしを支えるための健康科学・技術を紹介するイベントとして市民セミナーを開催しました。共催した学会から招いた2名の講師と、学内からの2名の講師は、生体計測技術、看護工学、褥瘡^{じよくそう}*のバイオメカニクス、在宅看護といった専門分野の技術が在宅ケアや安心した暮らしを支える様子について講演しました。また、参加者の理解がより深まることを目的に、在宅ケアの現状と社会資源に関する短い講義が講演に先立って行われました。

平日昼間のセミナーでしたが、参加者は学外23名、学内12名と多くの方々の参加がありました。特に、他大学の学生や教員が多数参加しており、市民に開かれた大学・保健科学研究院を実感していただけたことと思います。

講演毎の質疑では的確な質問が続い

たため、セミナーは予定時間を30分以上超過して終了しました。さらに、参加者からのアンケートでは広報の充実などの問題点が指摘されました。これらはセミナー運営における問題点です。その一方で、これらの意見はセミナーへの関心の高さと、今後のセミナー開催への期待を反映していると考えています。

保健科学・健康科学は一般の方からの関心が高い分野というだけでなく、急速に進む高齢化社会を支える重要な分野です。保健科学研究院は市民セミナーなどを通じて、今後も広く情報発信に努めていきます。

*褥瘡

生体組織に長時間荷重が加わることで血流障害が生じ、組織壊死を起こすものをいう。



講演の様子



講演者の集合写真

10月6日（土）～11月30日（金） 会場：メインストリート等、キャンパス内の路上

電動カートDE北大散策

主催：環境科学院GCOEプログラム環境教育研究交流推進室／実施責任者：地球環境科学研究院 コーディネーター 吉村暢彦

サステナビリティ・ウィークの期間中、持続可能な社会づくりのための実験場である本学キャンパスを活用し、敷地内交通の低炭素化に向けた実験を行いました。学内の交通の目的を観光、教職員などの学内移動、配送業務の3つに分け、それぞれに対して電動のカート（LCC：Low Carbon Cart）で運行することができるかを検討しました。

観光においては、正門横のインフォメーションセンター「エルムの森」から総合博物館に行く観光客約400名の方にご乗車いただきました。LCCの動力が電動であることから、太陽光や風力発電といったエネルギーについて話すことも多く、環境コミュニケーションが生まれる空間となりました。10km程度のスピードで運行したため、景色を眺めるのに調度良かったようです。

学内移動については、学内循環バスのバス停付近で声かけするなどし、約70名の方に実験に参加していただきました。目的地まで小回りが利くからよい、寒い冬の時期に走ってほしいといった声が聞かれ、バスとの補完性を発揮できる可能性も示唆されました。配送業務については現在、北大生協や富士ゼロックス株式会社にもご協力いただき、データを取得しているところです。

今年は悪天候の日が多く、太陽光パネルでのバッテリー充電が困難な日が続きましたが、11月に入り天候が回復したため、グリーン電力100%で走行実験を行うこともできました。LCCは中古のゴルフカートを改造したものです。新しい技術を導入するだけでなく、既存の技術を組み合わせ、新しい機能を社会に提案することも環境科学院の

研究として行っていきたいと思っています。



イチョウ並木を走るLCC



ドライバーの中西浩崇さん（環境科学院 修士2年）

10月6日（土）・7日（日） 会場：学術交流会館前

北大カフェプロジェクト サステナ・カフェ

主催：北大カフェプロジェクト／実施責任者：北海道大学工学部2年 坂口明日美

「サステナビリティ」をテーマにしたコミュニケーション・スペースの創出を目的に、札幌キャンパス内で最も人通りの多い学術交流会館前に2日間、カフェを開設しました。10月6日（土）同日に開催された「ホームカミングデー2012」を訪れた同窓生をはじめ、学生、市民、観光客の方など総勢200人に無料で飲み物を提供し、会話を楽しむことができました。

北大カフェプロジェクトは活動を開始して6年になり、これまでに39回、主に本学構内で季節に合わせたカフェや、他のイベントとのコラボレーションカフェを開設してきました。今年は

初めてサステナビリティ・ウィークに参加し、これをきっかけに「サステナブルなカフェ」とはどのようなものかを考える機会となりました。そして、今回は間伐材を使用した紙コップを使用し、マイカップの持参を呼びかけました。私たち北大カフェプロジェクトは、これからも人と人をつなぐカフェづくりを目指します。同時に、今回の「サステナ・カフェ」にとどまらず、今後もサステナブルな活動に目を向け、カフェという領域で可能な取り組みを積極的に行っていきたいと考えています。



カフェでの交流の様子



カフェプロジェクトのメンバー

10月6日（土）・7日（日） 会場：附属図書館メディアコートをはじめ札幌キャンパス各所

24時間国際サステナ対話

主催：北海道大学／実施責任者：国際本部長 本堂武夫

サステナビリティ・ウィーク2012のオープニングイベントとして、「24時間国際サステナ対話」と題し、持続可能な社会づくりに取り組む本学の今を、インターネットを通じて英語で世界に発信しました。これは、学生がレポーターとなり、札幌キャンパス内外の様々な場所や人を訪ね、本学の歴史や持続可能な社会の実現に向けた研究、学生の生活などを中継し、動画共有サービス「YouTube」と「USTREAM」を通じてインターネット配信する企画です。

学生レポーターは10月6日（土）に開催された諸々の行事会場を訪れ、サステナビリティ・ウィークの公式ロゴをデザインした山口聡一氏を招いて行った授賞式、ホームカミングデー2012、サステナ・カフェの様子を中継しました。また、省エネ技術の研究に

取り組む外国人留学生と日本人学生を取材し、その研究の意義と可能性を紹介しました。サステナビリティ学教育研究センターが提供する授業を受講した留学生は、レポーターとして当センターを訪れ、担当教員への取材を通じて、センターが提供する教育プログラムの魅力をアピールしました。また、総合博物館を訪問し、普段見ることができない貴重な資料庫から中継し、資料の管理・保管の大切さとともに、本学の総合博物館が担っている重要な役割を伝えました。その他にも、ポプラ並木やモデルバーン、時計台など本学の歴史とアイデンティティが感じられる場所から中継を行うとともに、イチョウ並木や中央ローンなど美しいキャンパスを世界に映像発信しました。

これらの映像はYouTube上にアーカイブしており、誰でもいつでも視聴で

きることから、留学先を検討している世界中の学生が、本学の魅力を知るための絶好の媒体になると期待されます。

◆YouTubeチャンネル

<http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv>



公式ロゴをデザインした山口さん取材する2人の学生レポーター



持続可能な社会のインフラ基盤となり得る熱交換システムを研究する学生を取材する様子

学生レポーター

David Blanco（工学研究科）、Evdon Sicut（工学院）、John Kalenga（経済学研究科）、Kevin Earl Sherman（農学院）、Mariko Toda（農学部）、Mohammad Mamun（工学研究科）、Mohammad Shariful Islam（環境科学院）、Nzulu Chukwunonso Onyemaechi（獣医学研究科）、Omar R. Salinas Villafane（工学院）

10月6日（土）

GiFT2012 -Global Issues Forum for Tomorrow-

主催：北海道大学／実施責任者：国際本部長 本堂武夫

サステナビリティ・ウィークの5周年記念として2011年に誕生したインターネット・フォーラム「GiFT」は、4月にオープンしたばかりの附属図書館メディアコートから世界に向けて生放送を行いました。

GiFTとは、Global Issues Forum for Tomorrowの頭文字を取ったものです。これは、持続可能な社会の実現を阻んでいる世界規模の課題を解決しようと努む人が集う機会を提供するインター

ネット上のイベントです。特に、これから専門分野を決めて本格的に研究を開始しようとする学士課程や修士課程の学生に対し、最新の研究成果を紹介し、世界の課題解決のために研究を共にしようと呼びかける機会でもあります。

今年は、「安心した暮らし-A Future Society Offering Peace of Mind for All」をテーマに、本学の4人の若手研究者が、水、病気、食料、ジェンダー

の観点から、最新の研究成果とともに、課題解決の展望を各自15分間、英語で講演しました。

生中継は約100名が視聴し、GiFT終了後から閲覧可能となったアーカイブ動画は、日本はもちろん世界各地から11月末までに1,068回視聴され、多くの関心を集めています。

◆GiFTウェブサイト

<http://www.sustain.hokudai.ac.jp/gift/>

講演者と講演タイトル（意識）

山田 朋人（工学研究院）

“Along with Water”（水とともに生きる）

秋田 英万（薬学研究院）

“Have Drug, Will Travel: Using Nano Technology in Human Health Care”

（『くすり』よ届け。健康に寄与するナノテクノロジー）

菅野 優香（文学研究科）

“Queer Culture in Japan”（日本のクィア・カルチャー）

石村 学志（サステナビリティ学教育研究センター）

“There is nothing we can do for March 11.”（3.11、そして北大の役割－気仙沼漁業復興）

GiFT誕生の背景には2つの環境変化があります。ひとつに動画サイトの急速な普及、そして、サステナブル・キャンパス活動の本格化です。世界の若者に本学のサステナビリティ研究を伝えつつも、移動に伴う二酸化炭素排出量を最小限に抑える手法としてインターネットを活用したフォーラムが生まれました。



本堂武夫理事・副学長による冒頭挨拶



会場の様子（秋田准教授の講演）

10月6日（土） 会場：附属図書館メディアコート

サステナ学生フォーラム

主催：北海道大学／実施責任者：国際本部長 本堂武夫



自らの考えを発表する学生と耳を傾ける学生ら

世界の学生から持続可能な社会の実現への関心を高めることを目的に、サステナビリティの課題について熱く議論する「サステナ学生フォーラム」を開催しました。これは本学の学生が持続可能な社会の実現をはばむ課題について議論する様子をインターネットで公開することにより、世界の学生に考えるきっかけを提供するものです。このフォーラムの様子はライブ配信されるとともに、動画共有サービス

「YouTube」上にアーカイブして誰でもいつでも視聴できるようにしています。

フォーラムでは5つのテーマについて約20分ずつ自由に議論を行いました。

討論者として参加した7名の学生はそれぞれのテーマについて知識と経験を総動員し英語で議論しました。中国、バングラディッシュ、セルビア、エリトリアからの留学生4名と留学経験のある日本人学生による議論により、理



インターネット配信のため、討論の様子を撮影

想と現実の両面を踏まえた、多様な持続可能な社会のイメージや実現の手法が披露されました。

討論に参加した学生からは、「様々な文化や学問分野の人との議論は刺激的でよい学びの機会であった」、「対話により新しい見解を得ることができた」、「英語で議論をする勉強になった」という意見が寄せられました。

サステナビリティ・ウィーク事務局は、将来の社会を担う学生が自らの考えを発し、他の考えを受け止める機会をサステナビリティ・ウィークの中で確保していきたいと考えています。

◆YouTube チャンネル

<http://www.youtube.com/user/hokkaidouniv>

討論テーマ

- ① What is your opinion on feeding a growing population?
(増加する人口の養い方について、あなたの考えを聞かせてください。)
- ② How do you feel about nuclear energy?
(原子力エネルギーについて、あなたはどのように考えていますか。)
- ③ What are you doing to reduce waste?
(ごみ削減のために、あなたは何をしていますか。)
- ④ How can you make our campus more sustainable?
(サステイナブルなキャンパスを実現するために、あなたは何かができると思いますか。)
- ⑤ Do you think economic development and sustainability can co-exist?
(経済成長とサステナビリティは共存し得ると、あなたは思いますか。)

討論者

Afona chernet / アフォナ チェルネット (医学研究科)
 Biljana Novkovic / ノヴコヴィチ ビリャナ (環境科学院)
 Erii Sugawara / 菅原 絵梨衣 (経済学部)
 Hiroaki Odawara / 小俵 大明 (経済学部)
 Jumpei Haruta / 春田 淳平 (法学部)
 Nazrul Islam / ナズルル イスラム (農学院)
 Ye QIAN / イェ チェン (工学院)

10月7日（日）～9日（火） 会場：ホテル・ヒマラヤ（ネパール）

国際シンポジウム：かわりゆくアジアの山岳環境

主催：北海道大学、ネパール・トリブバン大学、全球陸域プロジェクト（GLP）札幌拠点オフィス／実施責任者：地球環境科学研究所 教授 渡邊悌二

10月7日（日）から9日（火）まで、本学、本学内に設置されている全球陸域プロジェクト（GLP）札幌拠点オフィス、大学間交流協定校であるネパール・トリブバン大学の3機関が共同でシンポジウムを実施しました。2000年に両校が実施した国際シンポジウムに続く2回目の国際シンポジウムです。本シンポジウムは、サステナビリティ・ウィークの行事を海外で実施する初の試みのひとつであり、「2002年国際山岳年プラス10」並びに国際的な研究推進の枠組みである「全球陸域プロジェクト（GLP）」に対する貢献の一環として企画されました。

シンポジウムでは、アジアの山岳地域に焦点を当て、（1）陸域システム

の脆弱性、回復力、持続可能性、（2）山地災害、氷河湖決壊洪水、気候変化と適応、観光と生業、生物多様性、自然環境保全など、山岳環境の変化について議論を行いました。

初日の7日（日）は、ネパール環境科学技術省のケシャブ・マン・サキヤ大臣、在ネパール日本国大使館の高橋邦夫大使らによる開会のスピーチで始まりました。全体では、トリブバン大学と本学の大学院生の発表（約20件）のほか、3件の基調講演、46件の口頭発表、21件のポスター発表がありました。ほとんどの講演が動画共有サービス「USTREAM」を使ってインターネット配信されました。



講演する柴田英昭教授
（北方生物圏フィールド科学センター）



出席者の集合写真

10月12日（金） 会場：学術交流会館小講堂

ESD国際シンポジウム：共生社会への教育の挑戦

主催：教育学研究院／共催：高麗大学校、ソウル大学校、北京師範大学／実施責任者：教育学研究院 教授 河口明人

本シンポジウムは昨年に引き続き、第2回ESD（Education for Sustainable Development）国際シンポジウムとして、現代が直面するグローバルな課題を取り上げ、人間社会とそれを取り巻く地球環境の健全な持続性のために、大学が果たすべき教育的役割について議論しました。教育学部が推進する双方向学生交換留学交流事業「ESDキャンパスアジアプロジェクト（学生のESD関連を主題とした学習と国際的人脈形成を支援する双方向性短期留学プログラム）」を共催する海外協定校（高麗大学校、ソウル大学校、北京師範大学）から教員を招へいし、それぞれの研究者の発表による情報交換と、それを土台にしたパネルディスカッションを行いました。

シンポジウムでは、現代社会の危機の克服には、教育（ESD）が第一義的な役割を持っており、それを率先して

推進する責任が大学にあることを確認しました。同時に、高度に専門化した現代世界の持続的生存環境の危機の原因が、まさに高度化する専門分化の過程そのものに潜在していること、よって、その初期形態としては近代の科学革命及び産業革命期に形成された社会的構造に潜在していることを指摘し、その克服のためには、大学教育における俯瞰的能力の涵養に向けて教育構造を再構築する必要性を指摘しました。また、経済的個人主義や政治的自由主義など、相互に関連する強固な思想的傾向と、それに基づく人間の行動体系に支えられて分裂していく現代世界の歴史的な経過を振り返りながら、共生社会を展望するための教育的方法論について、克服すべき課題や理論的背景を議論しました。

現代世界の危機を克服するには、社会生活様式の修正が必要であり、その

ためには個々人の行動変容が必要です。従って、その行動変容をもたらす原動力となるべき新たな道徳律が求められています。科学的世界を継承しつつも、西洋社会へのアンチテーゼとして、東アジアから発信する共生社会に向けた新たな価値観の形成とその教育について、今後とも共同で取り組むことを確認しました。



講演者の集合写真

10月13日（土）・14日（日） 会場：学術交流会館小講堂

先住民文化遺産とツーリズムー北海道の可能性

主催：アイヌ・先住民研究センター／共催：観光学高等研究センター／実施責任者：アイヌ・先住民研究センター 教授 加藤博文



パネルディスカッションの様子

先住民にかかわる文化遺産と、その活用手段として注目されているツーリズムをテーマとして、シンポジウムを開催しました。

1日目の基調講演では、市民と考古学の協働を目指すパブリック考古学研究の先駆者であるロンドン大学のT.シャドラホール先生、並びに先住民と考古学の関係について考える先住民考古学の開拓者であるオクラホマ大学のJ.ワトキンス先生に、それぞれ講演していただきました。その後、アイヌ民族のアーティストである結城幸司氏

にストーリーテリングを披露してもらいました。1日目の最後には、基調講演者、結城氏、シンポジウム企画者の計6名によるパネルディスカッションを行い、パブリック考古学と先住民考古学をめぐる課題や、北海道におけるアイヌの文化遺産をどのように保全するのかについて議論しました。

2日目は、日本で先住民文化遺産の保護・活用に取り組んでいる当事者に講演していただきました。そこでは、実際に文化遺産の保護やツーリズムに取り組んでいるアイヌ民族の立場から



講演者とスタッフの集合写真

の講演も行われました。最後に、実際にアイヌの文化遺産を活かしたツーリズムの現場で活躍されている講演者の方々と、観光学の研究者の計5名によるパネルディスカッションが行われました。

2日間のシンポジウムでは、本学の学生・教職員だけでなく、市町村の関係者、一般市民、そしてアイヌ民族の方など、合計160名の参加がありました。参加者からは、先住民政策、考古学、そしてツーリズムに関する様々な質問やコメントをいただきました。本シンポジウムは、これまで日本であまり馴染みのなかった、市民や先住民との協働を目指した文化遺産マネジメントについて、国内外の多くの事例を紹介できた貴重な機会であったと思います。

10月15日（月） 会場：学術交流会館第1会議室

日中共同シンポジウム 持続可能なサニテーションとリスク管理

主催：工学研究院／共催：独立行政法人科学技術振興機構（JST）／実施責任者：工学研究院 教授 船水尚行

独立行政法人科学技術振興機構（JST）による戦略的国際科学技術協力推進事業（日本と中国）の成果をもとに、世界の水・衛生問題解決について議論を行うことを目的に、日中共同シンポジウムを開催しました。共同研究先である中国の西安建築科技大学から王 曉昌教授と5名の学生が来日し、インターンシップ研修生として同

大学から本学工学研究院に滞在中の2名も合流しました。シンポジウムの参加者は主に本学の学生を中心に76名にのびりました。

シンポジウムは持続可能なサニテーションと環境・人間の健康に関するリスクの関係を議論することを目的としました。シンポジウムでは5つのセッション（尿の農業利用、病原微生物と



講演する王教授（西安建築科技大学）

毒性物質、雑排水再生、糞便の肥料化、システムのデザイン）を開催し、中国側から7件、日本側から9件の発表が英語で行われました。

本シンポジウムの特徴のひとつは、発表とシンポジウムの司会を全て大学院生が行うことにあります。英語で発表し、英語で質問に答えることは日本及び中国の学生にとって簡単なことではありません。英語によるコミュニケーション能力を高めてもらうことも、本シンポジウムの目的のひとつです。また、同じテーマで研究を行っている学生間の交流は、視野を広げ、かつ、自分自身の研究の位置付けを知る

良い機会ともなっています。

「水を媒体とする全ての病気は貧困によって悪化し、さらに貧困の原因となる」と言われています。世界保健機関（WHO）によると、毎年約170万人の死が汚染された水に起因するとされています。そして、開発途上国では汚染された水により毎年8,200万年分の健康寿命が失われていると推計されています。本シンポジウムで取り上げた持続可能なサニテーション、ヒトの健康リスクの問題は世界的な課題です。これからもこのようなシンポジウムを開催し、世界で活躍できる人材を育てていく考えです。



講演に聞き入る参加者

10月15日（月）・16日（火） 会場：15日 学術交流会館小講堂、16日 百年記念会館大会議室

国際シンポジウム：東アジアの子どもの健康とサステナビリティ

主催：環境健康科学研究教育センター／共催：医学研究科、教育学研究院、保健科学研究院／実施責任者：環境健康科学研究教育センター長 齋藤 健

10月15日（月）・16日（火）の2日間、世界各国で生活環境に起因する子どもの健康と安全の問題が顕在化している現状を受け、国際シンポジウム「東アジアの子どもの健康とサステナビリティ」を開催しました。

第1日目には、医学研究科 玉城英彦教授、保健科学研究院 山内太郎准教授の司会で、講演と会場からの質問も交えたパネルディスカッションを行いました。

韓国のうつや日本の貧困と虐待の問題は相互の共通点が多く、互いの行政の取り組みの課題について活発な意見交換が行われました。また、グローバルな経済発展により直面するであろう東アジア地域の子どもたちを取り巻く生活環境と健康に関する課題解決のための方策を話し合いました。

第2日目の第1部では具体的な環境要因とその対策について、日本・中国・韓国での最近の調査研究から報告がありました。

第2部では「健康で安心な社会構築への挑戦」と題し、教育学研究院 河口明人教授の司会で、これまでにアジア各国で展開されてきたヘルスプロモーションなどの医療協力や疫学研究についての紹介がありました。

講演後のパネルディスカッションにおいては、行政やJICAなどの実践的な異なる視点での国際的な活動を含めて、日中韓の3国の連携を深めることの重要性を再確認し、環境健康科学研究教育センターが今後どのような役割を担うべきかを議論しました。

予定していたWHO西太平洋オフィス Hassan博士の来日キャンセルにより、WHOの取り組みに関する講演は残念ながら中止となりましたが、本シンポジウムには大学院生、留学生や一般の方など、延べ120人が参加しました。アンケートでは、年々規模が大きくなる当センター主催の国際シンポジウムへの期待が多く寄せられ、講演者・参加者ともに実りあるシンポジウ

ムであったことがうかがえます。環境健康科学研究教育センターは、各機関と連携しながら、今後も子どもたちを取り巻く環境や健康に関する課題に取り組んでいきます。



講演する岸 玲子特任教授
（環境健康科学研究教育センター）



会場の様子

10月17日（水） 会場：学术交流会館講堂

産学官セミナー 地理空間情報が拓く未来Ⅳー防災GISとハザードマップー

主催：文学研究科／共催：地理情報システム学会北海道支部、北海道GIS・GPS研究会、Digital北海道研究会／実施責任者：文学研究科 教授 橋本雄一

主に北海道の津波防災に焦点を当て、地理空間情報の活用に関する最新の動向について、産学官民の立場から解説すべく講演を行いました。地理空間情報とは、持続可能な社会を構築するための道具として期待が高まっている社会的な情報基盤であり、これをGIS（地理情報システム）や衛星測位の技術とともに活用することで、効果的な防災を行うことが可能となります。

まず、特別講演として高見芳彦氏（北海道総務部危機対策局）が北海道の防災対策をテーマに、北海道太平洋沿岸で津波が起こった際の津波浸水想定域について、最新の情報を用いて解説しました。続いて、永山 透氏（国土地理院北海道地方測量部）から、地域防災の取り組みを支援するために国土地理院がどのような情報を提供しているかについて、志村一夫氏（株式会社シン

技術コンサル）から、ハザードマップ作成に関する自治体の事例について講演いただきました。さらに、小川富之氏（札幌市幌北第3町内会）から、地理空間情報を用いた町内会の防災活動について解説していただきました。

これらの発表を受けて、大学の立場から深田秀実氏（小樽商科大学社会情報学科）が、自治体職員がハザードマップを自ら作成するためのプロジェクトマネジメント手法を紹介し、最後に企画責任者である文学研究科 橋本雄一教授が企画の内容をまとめた上で、太平洋沿岸で津波が起こった際の浸水想定域を分析した最新の結果を解説しました。また、防災にGISを活用してハザードマップを作成することの成果と課題について解説しました。

当日は研究者、自治体職員、学生など180名以上の参加があり、またセミ

ナーの内容が新聞2紙で記事として掲載されるなど、防災にGISを活用することへの関心の高さがうかがえました。



多くの参加者で埋まった会場



展示の様子

10月17日（水） 会場：附属図書館本館メディアコート

STAND UP TAKE ACTION in Hokudai

主催：附属図書館（国連寄託図書館）／実施責任者：附属図書館 利用支援課長 鈴木宏子

10月17日（水）午後6時30分から、「STAND UP TAKE ACTION in Hokudai」を開催しました。附属図書館は、国連寄託図書館に指定されており、国連資料の所蔵・提供だけでなく、国連の広報活動にも協力しています。当イベントは、「サステナビリティ・ウィーク2012」の一行事であるとともに、世界の貧困解決と国連の“ミレニアム開発目標”達成を訴えて“立ち上がる”世界的なキャンペーン「STAND UP TAKE ACTION」への参加企画でもあります。

当日は雨の降るなか、学生、教職員、市民の方を合わせて85名の参加がありました。最初に附属図書館より国連資料の利用ガイダンスを行った後、工学研究院の佐野大輔准教授が「世界の貧困問題解決のために、あなたは何をイ

メージしますか」という題でミニ講演を行いました。続いて、学生による国際協力活動の事例報告を行いました。まず、個人で活動した事例として、小林隆英さん（農学部4年）から「孤軍奮闘！フィリピン カミギン島におけるインターン」という題で報告がありました。次にグループで活動している事例として、国際協力学生団体「結〜yui」の吉川祐作さん（総合教育部1年）と岡泉佑奈さん（総合教育部1年）から「なにができるか、なにをするのか」という題で報告がありました。最後に新田孝彦附属図書館長の「スタンド・アップ！」の掛け声のもと、参加者全員で一斉に立ち上がり、世界から貧困をなくしたいという意志を示しました。

アンケートの回答では「自分も何か行動を起こそうと思った」、「国際協力

活動をしているが、刺激になった」といった感想が寄せられました。このイベントをきっかけに、世界の貧困解決に向けて、行動を起こしていただければ幸いです。そして、行動を起こすにあたり、ぜひ図書館にある関連資料をご活用ください。本学教員によるおすすめの本をブックログ (<http://booklog.jp/users/hokudai>)で紹介しています。また、国連資料も世界の動きを知るうえで役立つはずです。



「スタンド・アップ！」

10月18日（木） 会場：国際本部大会議室

北大×JICA連携企画 持続可能な社会をつくる日本の海外ボランティア

主催：JICA北海道／共催：国際本部／実施責任者：国際本部 国際協力マネージャー 松永龍児、シニアコーディネーター 正木幹生

国際協力とは何か、持続可能な社会の実現のために私たちに何ができるか等について、青年海外協力隊の活動を通して考える機会を提供すべく、JICAと本学が連携し、当企画を実施しました。

ネパールに派遣された青年海外協力隊員から現地での活動について、ニジュールに同じく派遣されていた方には国際協力全般について講演していただきました。

参加者は、本学の学部1年生から修士課程の学生に至る24名と他7名の合計31名でした。イベント終了後のアン

ケートでは、「国際協力に興味があるため」参加した方が多く（20名）、他にもJICAボランティアを含むボランティア全般に興味があるため参加した方も多かったようです。セミナーについては、アンケートに回答した全ての方から「大変良かった（8名）」あるいは「良かった（19名）」と好評でした。その理由としては、「JICAの仕組みや協力隊の制度を知ることができた」、「実際に活動していた現場体験を聞くことができた」、「理系の人でもボランティアできることを知れた」ことが挙げられました。

国際本部は、これからもJICAと連携して、持続可能な社会を考慮した国際協力とは何か、また学生がそれによりに関わるができるのか、これらを考える機会を提供し、具体的な行動につなげるよう推進していきます。



セミナーの様子

10月19日（金） 会場：学術交流会館講堂

環境政策セミナー：持続可能な北海道・日本・世界へ ～再生可能エネルギーとグリーンエコノミー～

主催：北海道大学「持続可能な低炭素社会」づくりプロジェクトチーム／共催：環境省北海道地方環境事務所／実施責任者：地球環境科学研究所 特任教授 荒井眞一

10月19日（金）、「環境政策セミナー」を開催し、学内外から約140名が参加しました。

最初に、経済学研究科 吉田文和教授が「固定価格買取制度の完全実施と北海道における再生可能エネルギー」と題し、7月から実施されている再生可能エネルギーの固定価格買取制度の概要や、風力、太陽光、バイオガス等道内の事業概要等について報告しました。吉田教授は、継続的な経営の困難さ、地元との連携・利益還元が不十分、買取枠・送電線の不足等の問題点があり、その解決と省エネ等によって民間投資を基礎に新しい産業と雇用を創出し、グリーン・エコノミーを推進することが重要であると強調しました。

次に、日本政策投資銀行環境・CSR部 竹ヶ原啓介部長が「再生可能エネルギーのファイナンスと地域展開の可能性」と題し、再生可能エネルギー事業におけるファイナンスの基本的な考え方と「地域での展開」について報告しました。竹ヶ原部長は、より多様な主体が参画し、それぞれがリスク・コストを分散する仕組みを迫るべきで

あり、地域金融機関の積極的な参画、標準化・モジュール化による文書化や法的な検討のためのコスト（リーガルコスト）低減等が重要であると指摘しました。

NPO法人北海道グリーンファンド 鈴木 亨理事長は「北海道における市民風車の取組」と題し、これまでの取組や再生可能エネルギー促進に向けた「北海道エネルギーチェンジ100ロードマップ」等について紹介しました。また、今後の道内での普及に向けて、送電網等の強化、地域金融機関の参画、バードストライクや騒音・低周波音等の問題の解決と社会合意等が重要と指摘しました。

最後に、環境省地球環境局国際連携課 柴田泰邦課長補佐が「リオ+20の成果と日本が目指す方向性について」と題し、6月にリオデジャネイロ（ブラジル）で開催された国連持続可能な開発会議（リオ+20）について、特に本セミナーの主要テーマである「グリーン・エコノミー」に関する議論や日本の国際社会への貢献等について報告しました。

パネルディスカッションでは、再生可能エネルギーの導入目標の設定や送電網の強化等インフラ整備の重要性、また、ファイナンスを含め、いかに地域に利益を還元・循環させるかについて、一層の工夫が必要であることが議論されました。参加者からは、再生可能エネルギー促進に向けてファイナンスと地域活性化の重要性が参考になったという感想が寄せられました。



講演する日本政策投資銀行 竹ヶ原部長



パネルディスカッションの様子

10月20日（土） 会場：学术交流会館大講堂

国際シンポジウム：異性装とパロディ自己と文化の多様性

主催：文学研究科応用倫理研究教育センター／実施責任者：文学研究科 准教授 瀬名波栄潤

文学研究科の部局間交流協定2校の教員と国内から2名の講師を招き、ESD*のひとつのテーマである「持続可能な文化多様性」を論じる国際シンポジウム「異性装とパロディ」を開催しました。

今年で6回目を迎える本シンポジウムは、本学第1期中期目標・中期計画「ジェンダーに関する研究教育体制を構築する」を受けて開講した大学院生のための共通授業科目「性差研究入門」のフィナーレを飾る催しとして、一般の方にも公開して行われたのが始まりです。2年前からは、ジェンダーに関する研究教育体制が文学研究科の応用倫理研究教育センターをプラットフォームに行われることになり、昨年度からはサステナビリティ・ウィークの支援を受け、国際シンポジウムとして発展継続しています。

今回のシンポジウムは、現代日本のサブカルチャーを対象に企画しました。海外でも注目を浴びる日本の「異性装文化」を軸に、文化表象及び文化受容の特質や歴史性、あるいは政治性

を、ジェンダー・セクシュアリティの観点から批評的に捉え直す試みです。本企画の実現にあたっては、本学以外にも、札幌市とクィア学会から後援をいただきました。

当日のシンポジウムは、弐 和順文学研究科長による挨拶で始まりました。

前半の講演で、シンガポール国立大学のデボラ・シャムーンさんは「『ベルサイユのばら』と1970年代における少女漫画の発展」、英国マンチェスター大学のシャロン・キンセラさんは「コスプレ、女装子、女の子らしさに対するパロディ：若年男性の間で競い合う女装という最新流行ファッションの変遷の探求」、札幌在住の漫画家である島本和彦さんは「男性読者の妄想と女性読者の妄想が出会うとき：少年・少女漫画における異性表現」と題して講演しました。

後半の全体ディスカッションでは、文学研究科 押野武志教授による概観の後、日本における異性装文化の担い手であり研究者でもある三橋順子さんがコメンテーターとして登場しまし

た。会場からの質疑の後、講演者らから異性装を通しての性の多様性や表現の自由などが提言されました。

最後は、新田孝彦理事・副学長が本学での男女共同参画事業について説明した後に、本シンポジウムはアカデミアにおける知の追求に重要な役割を果たすものであると表明して全プログラムを完了しました。

*ESD（Education for Sustainable Development）

「持続可能な開発のための教育」の意。1992年のリオ地球サミットで教育の重要性が盛り込まれ、以来定着した。2005年から2014年までの10年間は、「国連持続可能な開発のための教育の10年（UNDESD）」として8つの行動目標が掲げられ、「文化多様性」はそのひとつである。



講演の様子

10月21日（日） 会場：学术交流会館小講堂

第3回サステナブル・キャンパス・コンテスト

主催：SCSD（The Students Council for Sustainable Development in Hokkaido University）／共催：サステナブルキャンパス推進本部／実施責任者：公共政策大学院2年 諏訪部力

私たちSCSDは、今年で3回目となるサステナブル・キャンパス・コンテストを実施しました。本コンテストでは、学生が大学キャンパスを持続可能にしていくアイデアをプレゼンテーションし、北大の教職員・学生によって経済的・技術的実行性やオリジナリティなどの観点から審査されました。今年度は、エコカーを使用した新たな大学内の移動手段の提案、TFT*によって食事という自然な形で途上国へ募金をしていく活動、構内にコミュニティカフェを建設し交流拠点を作るという3つの案が発表されました。また、

昨年に引き続き、札幌藻岩高等学校の生徒、さらには特別枠として中京大学の学生や社会人の方にもご参加いただきました。多岐にわたるサステナビリティに関する活動、アイデアを一堂に



プレゼンテーションの様子

集め、様々な分野や年代の方に発表していただいたことは、参加者はもちろん私たちの運営側も非常に刺激になりました。

まだまだ小さいコンテストではあり



藻岩高校の生徒と記念撮影

ますが、今後はより多くの学生に参加してもらい、少しでも多くの人にサステナビリティについて興味を持っていただくとともに、すでにサステナビリ

ティに関心を抱いている人が自由に意見を発表し、互いに高め合えるような場にしていきたいと考えています。

*TFT (TABLE FOR TWO)

対象となる定食や食品を購入すると、1食につき20円の寄付金がTFTを通じて開発途上国の子どもの給食のために使われる募金プログラム。

10月13日(土)～10月21日(日) 会場：学術交流会館ホール

第4回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト

主催：北海道大学／実施責任者：国際本部長 本堂武夫

サステナビリティ・ウィークの全学行事として定着しつつある「北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト」を開催しました。

本コンテストは、学生が今取り組んでいる研究を「持続可能な社会づくり」という観点から捉え直し、研究分野の異なる人にわかりやすく伝えるよう推奨するものです。「持続可能な社会づくり」という壮大な人類のミッションとも言えるテーマと、自らの研究がどのようにリンクをしているのか、今一度考えてみよう、今年は73チーム(90名)の学生が参加しました。

各自の研究と学びがどの観点から「持続可能性」に貢献しうるかによって学生は4つの課題「新たな社会の仕組み」「健やかに人間らしく生きる」「環境変化の緩和と適応」「資源の適切な

利用」に分けられました。

10月16日(火)のコンテスト日には、発表者がポスターの脇に立ち、口頭説明を行いました。本コンテストの特徴は異分野の研究者・学生による審査です。異分野の研究者・学生に自らの研究の特徴・立ち位置・意義をいかにわかりやすく説明できたかが審査されます。1枚のポスター発表につき、教員3名、学生3名の計6名が審査し、総得点378点でスコアを争いました。審査員は、全学から集まった86名の教員とポスター発表者ら87名の学生です。学会での発表とは異なり専門用語が使えず、基礎知識が異なる6名の審査員にいかに説明をするかということは、発表者にとって大きな挑戦となりました。

厳正なる審査により最優秀賞、優秀賞、特別賞が決定しました。10月22日

(月)には、学術交流会館第1会議室にて授賞式を執り行い、佐伯 浩総長より4チームに最優秀賞が授与され、本堂武夫理事・副学長より5チームに優秀賞、そして3チームに特別賞が授与されました。

アンケートには全学行事として定着し、さらに発展していくことへの期待と激励の声が寄せられました。

「異分野の研究者による協働を促す機会」に加え、「世界に開かれた交流プラットフォーム」としての役割も担うコンテストとして、さらに発展していくことが期待されることから、今後は、国際交流協定校を中心に海外の学生の参加が可能となるような仕組みを作っていきたいと思います。

所属部局別参加者数

環境科学院42名、保健科学院12名、農学院10名、国際広報メディア・観光学院4名、総合化学院4名、工学院3名、文学研究科1名、経済学研究科1名、医学研究科1名、水産科学院1名、経済学部11名

受賞者・チーム一覧

最優秀賞

「健やかに人間らしく生きる」分野	保健科学院(個人)	満永有美(M1)
「環境変化の緩和と適応」分野	農学院(個人)	藪原佑樹(D1)
「資源の適切な利用」分野	農学院(チーム)	若槻由加(M1),
	菊池裕介(D1),	荒川竜太(D1)
「資源の適切な利用」分野	農学院(個人)	前島恵理子(M1)

優秀賞

「新たな社会の仕組み」分野	文学研究科(個人)	小西信義(D3)
「健やかに人間らしく生きる」分野	保健科学院(個人)	齋藤彩乃(M2)
「健やかに人間らしく生きる」分野	総合化学院(個人)	植松遼平(D1)
「環境変化の緩和と適応」分野	農学院(個人)	山中 聡(D1)
「環境変化の緩和と適応」分野	環境科学院(個人)	山木邦亮(D2)

特別賞

「新たな社会の仕組み」分野	経済学部(チーム)	木谷祐希(B4), 三木麻理子(B3), 安藤裕樹(B4), 高橋陽介(B4), 福島良子(B4)
「資源の適切な利用」分野	経済学部(チーム)	岡山愛子(B3), 渡部雄大(B4), 勝田暁奮(B3)
「資源の適切な利用」分野	環境科学院(個人)	三浦裕紀(D3)



審査の様子

10月24日（水）～10月28日（日） 会場：クラーク会館講堂

CLARK THEATER 2012

主催：北大映画館プロジェクト／実施責任者：理学部3年 岩本佳保里



スタッフで記念撮影



多くの観客で埋まった会場

CLARK THEATER 2012では「Routes」というテーマを設定しました。このテーマには原点を意味する「root」と道程を意味する「route」の2つの意味を持たせました。7年目を迎えた今年、CLARK THEATERを始めた当時のメンバーの想いや目的を見つめ直し、原点から未来へと繋げていきたいという想いを込めました。また、北大に映画館がある意義、学生運営である意義を再確認し、映画館としての在り方を探っていきました。

もちろんこのテーマは私達だけに向けたものではありません。CLARK THEATERを通じて皆様の「Routes」を探っていただきたいとの想いから、作品・企画を選定しました。人それぞれ歩んできた道は違っても、映画には皆様が共感できるような描写があると

思います。映画を通して、皆様それぞれが持っている原点から何かを得る一助、そして未来へと繋がる想いとなっていれば幸いです。

オープニングでは、学生や大人だけでなく、子供も楽しめるアニメーション作品「ヒックとドラゴン」の上映を行いました。また、北海道を舞台とした映画「しあわせのパン」の上映及び三島有紀子監督トークショーを行い、監督と北海道民との交流を図るなど、映画ファンにはまたとない機会を創出することができました。

さらに東日本大震災を題材とした映画の上映を行い、被災地で復興支援活動をしている平 了さんと環境省北海道環境パートナーシップオフィスにて震災支援活動を行っている有坂美紀さんによる対談が行われ、参加者にとっ

て生きる意味や生き方について考えるきっかけとなりました。

他にも、梶野竜太郎監督と声優であり女優である初原千絵さんをお呼びしての「茹田蟹幸ライジング」上映とトークショーなど、開催期間の5日間で、長編・短編作品から企画などを合わせ計34作品・20プログラムを上映しました。

今後も私達、映画館プロジェクトは映像文化を今以上に発展させるべく、北大に常設映画館の創設に向けて活動を続けていきます。その中で現代社会が内包する問題を様々な切り口で訴えていき、また教育機関である大学に常設映画館が存在することにより広がる可能性を、訴えていければと思います。

10月25日（木） 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W102

国際協力プロジェクトをいかに実現するかー開発コンサルタントが語る途上国現場と仕事

主催：経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター／共催：経済学研究科／実施責任者：経済学研究科 准教授 高井哲彦

国際協力的手段と職業キャリアの選択肢として、開発コンサルタントの仕事を紹介するセミナーを開講しました。国際協力は、国際連合・世界銀行や国際協力機構（JICA）・国際協力銀行（JBIC）による開発行政ではありません。開発コンサルタントは、開発プロジェクトの企画・調査から実現まで、国際協力の最前線で途上国政府や開発行政を支える技術者・専門家集団です。

開会挨拶は、地域経済経営ネットワーク研究センター 町野和夫センター長が行い、司会進行は、経済学研究科 高井哲彦准教授が務めました。

第1講演は、海外コンサルティング企業協会（ECFA）専務理事 高梨寿氏による「グローバルに活躍する開発コンサルタントの世界」でした。開発コンサルタントのキャリアパスや仕事内容、途上国での仕事環境、当事者の声などが紹介されました。現場ビデオ

は臨場感とユーモアに溢れ、会場から笑いが出ました。第2講演は、株式会社コーエイ総合研究所コンサルティング第1部部长 岡田卓也氏（工学部・昭和63年卒）による「インドネシア産業活性化を仕掛ける北大工学部卒業生」でした。岡田氏がご自身のキャリアパスを紹介した上で、インドネシア産業活性化をいかに実現したか、具体的に仕事内容とキャリアの進化を説明されました。

講演終了後、講師の高梨氏、岡田氏、株式会社コーエイ総合研究所取締役川村典章氏、本学国際本部国際協力マネージャー 松永龍児氏がブースを作り、国際協力キャリア形成・学習について個別相談を行いました。各ブースに10名以上の行列ができ、1時間以上活発な質疑応答が行われました。

アンケートの満足度は非常に高いものでした。特に卒業生の招聘講演は、本学生に効果的だと思いました。本セ

ンターは、今後も産学官連携を強めていきたいと考えています。



開発コンサルタントの仕事について、熱心に聞き入る参加者



個別相談の様子

10月26日（金） 会場：国際本部大講義室

留学希望者向けセミナー SD on Campus : Invitation to Study Abroad Program

主催：国際本部／実施責任者：国際本部国際支援課 係長 河野公美

国際本部は、昨年に引き続き、留学希望者向けセミナーを実施しました。参加大学は、アメリカ・ポートランド州立大学、カナダ・アルバータ大学、イタリア・トリノ工科大学、ナイジェリア・ナイジェリア大学、同・エボニ州立大学の5大学でした。本年から、学生の目線での情報提供を目的に、発表者を主に北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）で本学に交換留学している外国人留学生に依頼しました。

イベントでは、各大学がサステイナブル・ディベロプメント（SD）についてどのような教育を行い、学生が授業や授業外でSDにどのように関わっているかを発表してもらい、それぞれの特徴的な取り組みが紹介されまし

た。また、イベント後半ではナイジェリアの伝統的なダンスが披露されました。

本イベントは本年度で4度目の開催ですが、参加した学生達に実施したアンケートでも「SDについて興味を持った」「留学への意欲が高まった」との回答が多くみられました。また、発表した留学生も自らの大学を直接アピールできる貴重な機会と捉えて十分な準備を重ね、当日も満足感を抱いていたようでした。参加学生のアンケートでは、来年度に招聘してほしい大学の希望についても聴取することができたので、可能な限り希望を取り入れていきたいと考えています。



発表の様子



発表を聞く参加者

10月27日(土) 会場：学术交流会館第4会議室

やさしい情報科学とライフイノベーション公開講座一体験しながら学ぶ理科・科学入門教室

主催：情報科学研究科／実施責任者：情報科学研究科 教授 館野 高

我々の社会の持続可能な発展 (Sustainable Development, 以下SD) に資する教育に貢献するため、情報科学研究科の教員3名(平田 拓教授, 近野 敦教授, 館野 高教授)が「やさしい情報科学とライフイノベーション公開講座一体験しながら学ぶ理科・科学入門教室」を開催しました。

本行事は、情報科学研究科において初めての試みであり、現在、最先端・次世代研究開発支援プログラムの支援を受けている教員が自主的に開催を提案して実施した催しです。情報科学 (Information science, IT) は生活の質の向上と維持に欠かせない科学・技術として、社会の中で私達の目に直接に触れないところでも活用されています。そこで、私達の暮らしの中で将来利用されることになる革新的技術 (イノベーション) に関わる最先端研究について、科学・技術を専門にしていな一般の人にも理解できるように、やさしく説明しました。特に、次の3つの具体的なタイトル (1) キラル分子

の追跡, (2) 脳外科手術シミュレータ, (3) 耳の不思議と代替機械, を掲げて各1時間程度の講演を行いました。

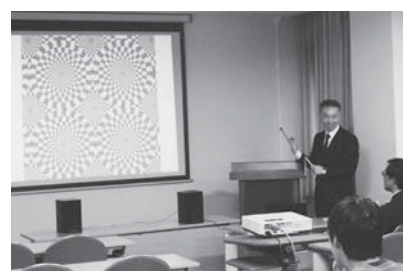
参加者は、本学のスタッフ5名(教員3名を含む), 学内4名, 学外11名の合計20名でした。各講演後には質問がいくつか寄せられ、参加者の興味の大きさを物語っていました。また、アンケートでは、「生命科学と情報科学を組み合わせた興味深い研究の話をとてわかりやすく聞けて良かった」、「情報とライフサイエンス・医学等をつなげる分野の広さを知ることができ興味深い話ばかりでした」など、参加者の声が多く寄せられました。参加者の声から察すると、SDの基盤として、生命科学とITの境界分野への関心の高さがうかがえます。公開講座開催の広報が十分でなかったため、参加者は予想を下回りました。今後は、広報活動や内容をさらに工夫して、より多くの方に情報科学研究科の公開講座に足を運んでいただければと考えています。



講演する平田教授



講演する近野教授



講演する館野教授

10月27日(土) 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W103, W102, W101, W203

第9回プレゼン・ディベート大会 原発は是か非か!? ―エネルギー政策と北海道経済―

主催：経済学部／実施責任者：経済学研究科 教授 鈴木輝久

10月27日(土),「原発は是か非か!? ―エネルギー政策と北海道経済―」をテーマにプレゼン・ディベート大会を開催しました。本大会は今年で第9回目を迎え、経済学部の主催です。

今回は初めて、参加学生を学部生のみに限定し、13チームが参戦しました。初参加のゼミチームや文学部・農学部からの参加もあり、各チームは知力を尽くして様々な提言案を示しました。地域の特性を活かしたバイオガス、イモ発電などの代価エネルギーを提言したチーム、原発の是非をリスクの比較をベースに持論を展開したチームな

ど、それぞれの切り口で独創的な案を提示し、ディベートに臨みました。

ホットなテーマを取り上げたことで一般からの参加者も多く、場が盛り上がりしました。

また、もう一度戦いたい!という参加者の声を受け、今回初めて敗者復活戦を試み、4チームが参加しました。7時間以上にわたり数々の熱戦が繰り広げられ、今大会を制したのは以下のチームです。

優勝チーム「4人と1匹」は手堅く論をまとめ、すきのない試合展開で他のチームを圧倒しました。また、ボス

ターコンテストでも他を大きく引き離し優勝し、大会初のダブル優勝を果たしました。準優勝はプレゼンテーションと独創性に優れた「ダークホース」チーム、3位は2年生チームながら鋭い試合運びで入賞を果たした「僕と契約してディベーターになってよ」チームでした。

今回も多くの学生が参加し、多くの方々に聴講していただきました。参加者は100名を超え、盛況のうちに大会を終了しました。

優勝

4人と1匹（経済学部 高井ゼミ）

準優勝

ダークホース（経済学部 橋本ゼミ）

3位

僕と契約してディベーターになってよ（経済学部・農学部合同チーム）

3位（敗者復活戦勝者）

- 3%（経済学部 高井ゼミ）

ポスターコンテスト優勝

4人と1匹（経済学部 高井ゼミ）



ディベートの様子



決勝戦のプレゼンテーション

10月29日（月） 会場：学術交流会館講堂

大学改革シンポジウム サステナブルキャンパス国際シンポジウム2012

主催：サステナブルキャンパス推進本部、施設部／共催：一般社団法人国立大学協会／実施責任者：サステナブルキャンパス推進本部長 三上 隆

10月29日（月）、「サステナブルキャンパス国際シンポジウム2012」を開催しました。本シンポジウムは、一般社団法人国立大学協会との共催による大学改革シンポジウムの一環として開催され、会場には、国立大学法人関係者や自治体・企業関係者、学生など、およそ90名が訪れました。

最初に、本学とサステナブルキャンパスに関する国際交流プロジェクトを協働している欧州3大学（トリノ工科大学、ケンブリッジ大学、アムステルダム自由大学）から、サステナブルキャンパス構築に向けた行動計画や地域連携及びその評価項目や評価手法について発表いただきました。

その後、文部科学省整備計画室や札幌市から、これからの大学における施設整備とサステナビリティとの関連性や行政側からみた大学の位置づけ、将来の地域連携について講演いただきました。本学からは、これまでのサステナブルキャンパス構築に関する活動と「STARS*国際パイロット事業」に関して報告しました。

最後に、欧州と日本における地域連携や行動計画などをテーマに、文部科学省、札幌市、欧州3大学及び本学をメンバーとしたパネルディスカッションが行われました。

また、会場ホワイエでは民間企業の協力により、環境配慮型商品の展示やデモンストレーションが行われ、多くの方が見学し盛況でした。

さらに、今回初めての試みとして、動画共有サービス「USTREAM」によるインターネットライブ中継を行いました。このUSTREAMに関して、国内外の多くの方々から反響があり、ライブで延べ50名、録画で延べ142名（12月13日現在）の視聴がありました。

会場からは「机上の空論ではない生のサステナブルキャンパスの様々な計画について知ることができた」「文部科学省、札幌市、北大の取組を一度に聞ける貴重な機会」「北大のサステナビリティへの取組は先進的で大変参考になった」という感想があり、大変有意義なシンポジウムとなりました。

今後、このシンポジウムの成果を

キャンパス総合環境性能評価システムの策定に活用していく予定です。

*STARS

北米の高等教育機関を対象としたサステナビリティ調査・評価システムのことで、現在STARSを利用して世界中の高等教育機関を対象にサステナビリティ調査・評価を行う国際パイロット事業が実施されている。



パネルディスカッションの様子



講演者・関係者の集合写真

10月30日（火） 会場：札幌市時計台2階ホール

時計台サロン：農学部に聞いてみようー自然と食の巡り逢い

主催：農学研究院／共催：北海道新聞社／実施責任者：農学研究院 教授 貴島祐治

「時計台サロン 農学部に聞いてみよう」は本年4月から毎月1回、札幌市時計台2階ホールで開催している市民向けの公開講座です。

10月30日（火）の本サロンは、サステナビリティに深く関わる農学的な話題について、「自然と食の巡り逢い」と題し、本研究院の中村太士教授（森林生態系管理学）と北方生物圏フィールド科学センターの近藤誠司教授（畜牧体系学）が講演しました。

中村教授の演題は「森川里海ーつながりの科学」です。自然の営みの中で保たれてきた様々な生態系のバランス

が、人為的な手が増えられることにより崩壊していく事例を紹介しました。良好で持続可能な環境を維持する上で、自然と人間生活の調和をいかに形成するか、科学的な裏付けのある情報を実際の現場に与えることの重要性を話しました。

近藤教授は「安心・安全な草食動物の生産」と題して講演しました。本学の農場で実施されている牧草を中心とした乳牛や肉牛の飼育が、負荷の少ない持続可能な循環型の農法として優れていることについて、具体的研究成果により紹介しました。また、話題は本

学で取り組んでいるどさんこ（北海道在来馬）の系統維持やエゾ鹿対策についての意義、苦勞する点などにも及びました。

参加者は一般の方が50名、本学関係者が30名でした。それぞれの講演に対して来場者から多くの質問があり、約20分に及ぶ討論となりました。アンケートでは興味深い講演会であったとの回答が大半でした。

今後も一般の方々に理解されやすい、農学に関連のある話題を提供していこうと考えています。

11月2日（金）・3日（土） 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W203

「生きづらさ」を超えて

主催：教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター／実施責任者：教育学研究院附属子ども発達臨床研究センター 教授 宮崎隆志

11月2日（金）、立教大学名誉教授の栗原 彬氏が「『生きづらさ』を超えて」と題して基調講演を行いました。それを受け、翌3日（土）午前には、「『生きづらさ』を超える学び～教育と福祉が出会うとき」と題したシンポジウム（登壇者：NPO法人文化学習ネットワーク代表 佐藤洋作氏、中核地域生活支援センター「がじゅまる」センター長 朝比奈ミカ氏、國學院大学名誉教授 竹内常一氏）を、午後には「学校の場の再定義～学校と仕事が出会うとき」と題したシンポジウム（登

壇者：大阪府立堺東高等学校教諭 井沼淳一郎氏、東京都立大学名誉教授 大串隆吉氏）を開催しました。

2日間の参加者の延べ人数は222名に上り、まずまずの集客数となりました。参加者の学内関係者と学外者の比率は約1：1でしたが、留学生の参加も数名ありました。参加者の多くからは、おおむね肯定的な感想が寄せられました。また、登壇者・参加研究者からは、教育・福祉・労働の関連を問う今回の企画は、現代社会の改革への問題提起の場となったとの意見を頂戴

し、今後の研究における示唆を得る機会となりました。

今回の主題である「『生きづらさ』を超えて」は、「生きづらさ」という事実のなかにこそ、人間の尊厳が保障される新しい社会への扉が開かれているのではないかという私たちの研究関心を表しています。登壇者の発表内容は、いずれもこの関心に真正面から応えるものでした。今後は、成果のとりまとめと刊行を予定しています。



講演の様子



シンポジウムの様子

11月3日（土） 会場：保健科学研究院3-1講義室

公開講座：ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ

主催：保健科学研究院／実施責任者：保健科学研究院 教授 傳田健三

11月3日（土）、「ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ」をテーマに保健科学研究院の公開講座を行い、本研究院の講師陣3名が専門分野の紹介を行いました。

第1限目は「アレルギーの不思議」と題して、小林清一教授が国民の50%が症状を持つといわれるアレルギーについて、その基本的事項と社会的に最もよく認識されているI型アレルギーを解説しました。第2限目は「あなたの健康を支える看護師活用術」と題して、良村貞子教授が保健医療福祉の現場で活躍している看護職者の業務内容を紹介し、いつ、どのように看護職者に相談したらよいかを説明しました。第3限目は「今こそ考えるとき、高齢

者の延命治療－我が国と諸外国との比較から－」と題して、宮本顯二教授がいわゆる「寝たきり老人」がいなくなる言われる諸外国の高齢者の終末期医療を紹介し、我が国の現状の問題点と今後の展望を解説しました。

各講演者はサステナビリティ・ウィーク2012のテーマである「安心して暮らせる社会作り」をキーワードとして、保健科学の視点から詳しくかつわかりやすく解説しました。参加者からは概ね好評を博し、様々な質問が出ました。それに対して、3名の講師はわかりやすく丁寧に解説を行いました。

今後も毎年、その時の時代を反映するようなテーマを設定し、同じ時期に公開講演会を開催していく予定です。



講演する小林教授



満員の聴講席

11月17日（土） 会場：クラーク会館大集会室

第3回 3.11札幌若もの会議 ～持続可能な社会と被災地の復興～

主催：Sapporo Youth Conference for 3.11 (SYC) 実行委員会／共催：サステナブルキャンパス推進本部／実施責任者：農学部2年 河東政道

平成23年3月11日に発生した東日本大震災を受け、札幌を拠点に熱心に復興支援活動を行っている学生たちが本イベントの企画・運営を行いました。今回で3回目となる本イベントは2部形式で実施し、復興支援をめぐる現在の状況や、札幌の学生の活動について紹介した上で、「持続可能な復興支援」のあり方について参加者同士で語り合う時間を持ちました。

大震災から1年8カ月以上が経過し、被災地内外では様々な団体による復興支援が行われています。その中から、現在も大規模な支援活動に携わっている2名のゲストをお招きし、これまでの活動や現在の活動について伺い、その後、参加者との語り合いに参加していただきました。

第1部では、東京を拠点にして現地のリサーチなどを行っている藤沢 烈様（RCF復興支援チーム代表）と東

北への学生派遣を行っている島田悠司様（Youth for 3.11代表）の講演を実施しました。その中で、普段札幌にいただけでは忘れがちである3.11が残した爪痕や支援活動での体験談に触れ、札幌の学生へ向けたアドバイス等をいただくことができました。

第2部では、ブース形式のグループワークを行いました。直接支援、間接支援、受け入れ型、自分ごと、団体設立、ツアー、ゲスト、Love for TOHOKUといったブースを設け、参加者の方々の興味関心に合ったグループでの議論に加わっていただきました。参加者は中学生から社会人まで約90名ののぼり、アンケートでは、「ゲストの方のお話が興味深かった、とても勉強になった」「学生主体の“考える場”があることはとても良い、刺激になった」という回答が多く寄せられました。

SYC実行委員会は、今後も定期的に

イベントを行い、継続的な・持続可能な復興支援について考える機会を作っていく予定です。



講演の様子



グループワークでの活発な議論の様子

11月22日（木） 会場：学術交流会館小講堂

市民公開シンポジウム 自然エネルギーを1次産業に活用した地域振興

主催：北方生物圏フィールド科学センター／共催：日本農作業学会／実施責任者：北方生物圏フィールド科学センター 教授 荒木 肇

本シンポジウムでは、化石エネルギーの将来枯渇や原発災害の体験から、安全な自然エネルギー（再生可能エネルギー）への関心が高くなる中、1次産業における自然エネルギーの利活用とそれによる地域活性化について議論しました。

北海道立総合研究機構農業研究本部中央農業試験場 竹中秀行氏は、北海道の1次産業は他府県に比べ、石油依存度が高い実態を報告し、一方、多様なエネルギー資源の複合活用と地域毎の主体的取り組みが肝要であると問題提起しました。茨城大学農学部 小林久氏は、農山村にある未利用エネルギー資源に目を向け、小規模・分散型活用を提案しました。下川町議会 谷一之氏は、下川町の面積の90%以上が森林であり、町内施設や温泉で木質バイオマスを燃料資源として活用していると報告しました。また、カーボンオフセット事業の展開やヤナギ等のエネルギー作物生産の研究も展開されているとのことでした。本学工学研究

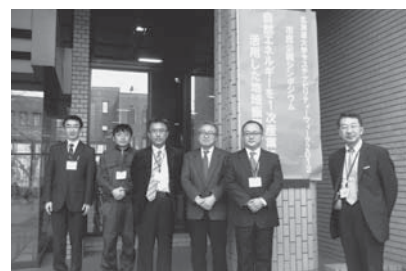
院 濱田靖弘氏からは、弟子屈町でのヒアリング調査から氷需要を把握し、自然環境での製氷実証を行い、また温泉排湯を活用したメロンやイチゴ栽培の話題が報告されました。北海道立総合研究機構建築研究本部 総合建築研究所 立松宏一氏は、自然エネルギーを活用するには、利用場面の建築的な工夫が必要であることや農業施設のエネルギー消費要因を解析した上での省エネや自然エネルギー導入が必要であると指摘しました。

総合討論では、多様な地域資源に気づくこと、その活用を住民自身が考えることが地域活性化のカギとの指摘がありました。下川町ではエコポイントアクションとして地域内商品券事業が展開され、石油販売会社も木質資源活用の協同組合に参画して配送事業をしていることや、容積の大きいバイオマスを扱う際は土建業が参画している等、地域ぐるみでの取り組みが盛んなことが紹介されました。また、人口低減の中で、「下川の資源は木質で、こ

の資源活用に町の将来を託す」という議論が新エネルギー活用のきっかけであったと報告され、短時間でしたが、地域住民が主人公となった取り組みの重要性が確認されました。



下川町議会 谷氏の講演の様子



講演者の集合写真

11月22日（木） 会場：人文・社会科学総合教育研究棟W103

地域経済経営ネットワーク研究センターシンポジウム 地域の多面的『豊かさ』を目指してー農業の視点からー

主催：経済学研究科 地域経済経営ネットワーク研究センター／実施責任者：経済学研究科 教授 町野和夫

農産物流通コンサルタントで株式会社グッドテーブルズ代表取締役社長の山本謙治氏と、フードバレーとから推進協議会事務局長の中尾啓伸氏を招いて、当研究センターシンポジウム「地域の多面的『豊かさ』を目指してー農業の視点からー」を開催しました。本行事は昨年度設立された当研究センターが、地域経済に関するテーマを一つ決めて年1回開催するシンポジウムで、今回で第2回目の開催となります。

今年度は上述の統一テーマに沿って、山本氏には「北海道の食は安すぎるー産地がマーケティングに取り組む時代ー」、中尾氏には「“フードバレーとから”から生まれる『豊かさ』とは」と題した講演をそれぞれ50分ずつ行っていただきました。休憩後のセッションでは参加者からの質問への回答を中心に、補足説明や講演者同士の議論などを行いました。

山本氏からは、まず、食生活の多様



講演する「やまけん」こと
（株）グッドテーブルズ代表取締役社長 山本氏

化や食慣習の劣化の実態と、それが良質の農産物への需要を減少させていることについての説明がありました。また、そのことに対して産地・生産者としては、食育やマーケティングなど様々なチャネルを通じて消費者に環境、健康、倫理の観点から望ましい食の在り方を訴えていくべきだと提言されました。そして、中尾氏からは、北海道の農業の弱点である付加価値の低さ（加工段階以降は道外で行われることが多い）に対する、十勝地方での高付加価値化への取り組み（フードバレー十勝）について紹介いただきました。

参加者は、学内44名、学外42名の計86名でした。回収したアンケートからは、ほとんどの方から高い評価が得られました。特に「食」の観点からの分析が好評で、農業に関心のある社会人からも参考になったとの感想を多く得ました。

当センターは、自律分散型ネットワークとしての地域経済の実現を目標として掲げていますが、今回のシンポジウムもそのための方法を考える有意

義な議論の場となりました。農業については北海道の重要な産業でもあり、他の1次産業も含めて今後も引き続き取り組んでいきたい分野です。



講演に熱心に耳を傾ける参加者

11月30日（金） 会場：農学研究院講義室N11

ジュリアン・ブラン講演会 フランス各地域における農業の再生を目指して

共催：札幌日仏協会/アリアンス・フランセーズ札幌、アンスティチュ・フランセ日本、農学研究院、工学研究院、国際本部
／実施責任者：農学研究院 教授 近藤哲也

日本の農業をけん引し、200万人都市・札幌の中心にあって農学を追求している本学は、日仏の農業事情を比較するとともに、両国間の交流を進展させるために、社会人類学者であるジュリアン・ブラン氏（国立自然史博物館博士、フランス国立科学研究センター研究員）を招き、「フランス各地域における農業の再生を目指して」と題する講演会を行いました。講演会は、在日・在札幌の仏協会と協力し、農学研究院・工学研究院・国際本部の共催で開催されました。

環境及び社会と自然との関係を研究するブラン氏から、フランスにおける農業の再生をテーマに都市農業を推進する原動力、現状、並びに都市デザインや建築について講演いただきました。会場は農学院・工学院の学生のみならず、農業経済、園芸、造園、都市

計画、建築などの専門家や、札幌でフランス語を学んでいる方々などが駆けつけ、満席となりました。

講演後は、近藤哲也教授（農学研究院）の進行の下、フランスでの都市農業に関わる具体的な活動内容、地方農業との関係、生産性、法整備、建築など多方面に及ぶ活発な質疑応答が行われました。

本講演会は、札幌日仏協会/アリアンス・フランセーズ札幌からの提案で、本学と同機関が提携する初の試みでした。同機関からは、来年以降も本学と連携し、サステナビリティ・ウィークに参加したいという意向をいただいています。札幌日仏協会/アリアンス・フランセーズ札幌との連携により、本学で新たな知の創造の場を創出できるよう考えていきたいと思っています。



ブラン氏による講演の様子



農学研究院 近藤教授の進行による質疑応答

第20回全国共同利用情報基盤センター長会議を開催

11月9日(金)、市内ホテルにおいて、情報基盤センターが当番校となり「第20回全国共同利用情報基盤センター長会議」を開催しました。

本会議は、本学を含む国立7大学と国立情報学研究所を構成機関として、全国共同利用機関として相互の連携を図るため、年2回開催されるものです。

会議には文部科学省研究振興局から下間康行情報課長、村松哲行情報課計算科学技術推進室室長補佐、岩本典子同科学技術・学術行政調査員を迎え、下間情報課長から「学術情報基盤等に関する最近の動向等について」の説明が行われました。中でもスーパーコンピュータ「京」を始めとするHPCI（ハ

イパフォーマンス・コンピューティング・インフラ）の構築やHPC技術の高度化に向けた文部科学省の取り組み、世界の多くの分野で活用が重要視されているビッグデータの利活用のための研究開発の重要性について、詳しい解説が行われました。

また、今回の会議では、本会議と大学ICT推進協議会との連携、ビッグデータの活用、クラウドコンピューティング研究会の発足等について協議され、今後のより強固な構成機関の連携について確認が行われました。

（情報環境推進本部情報推進課）



協議するメンバー



説明を行う文部科学省 下間情報課長

平成24年度北海道大学情報セキュリティセミナーを開催

11月28日（水）午後3時から、工学部B11教室において、情報環境推進本部主催「平成24年度北海道大学情報セキュリティセミナー」を開催しました。

高井昌彰情報基盤センター長による挨拶の後、マカフィー株式会社 サイバー戦略室シニアセキュリティアドバイザーの佐々木伸彦氏より「遠隔操作ウイルスによる誤認逮捕はなぜ起きたのか？」と題して講演が行われました。

セミナーに参加した約30名の教職員及び学生は、ごく最近ニュースになった遠隔操作ウイルスによる誤認逮捕やマルウェアの脅威などを事例にした、

今、本当に必要なセキュリティ対策のポイントについての講演に真剣に耳を傾けていました。また、講演後には、インターネット利用上のセキュリティ対策に関する熱心な質疑応答がなされ、評価ツールの有用性についてもアドバイスがありました。

情報環境推進本部では、今後も情報セキュリティに関するセミナーを開催し、本学の教職員及び学生の情報セキュリティに関する認識を高めていきたいと考えています。

（情報環境推進本部情報推進課）



高井情報基盤センター長の挨拶



マカフィー株式会社 佐々木氏による講演

ウイルス感染から身を守る「セキュリティ対策五箇条」

- 一. OSやソフトウェアは常に最新パッチを適用すべし！
- 一. ウイルス対策ソフトを導入しただけで安心するべからず！
- 一. 身に覚えのないメールは開くべからず！
- 一. 怪しいWEBサイトは閲覧するべからず！
- 一. 拾い食いはするべからず！

「ちょっと待て クリックその前 深呼吸」

（マカフィー株式会社の当日配付資料より抜粋）

日独交流150周年記念植樹

11月7日（水）、国際本部正面玄関前で日独交流150周年記念植樹式を行いました。

当日は、雨の降る中、北海道日独協会の鈴木重統会長、小山富康副会長、本堂武夫理事・副学長をはじめ、学内関係者が参加しました。

植樹式では、本堂理事・副学長、鈴木会長からの挨拶の後、鈴木会長、小山副会長、本堂理事・副学長により植樹が行われました。

寄贈された菩提樹は、昨年、日独交流150周年を記念して、全国の日独協会を通じてドイツ大使館から全国各地に贈られたもののうちの1本で、高さ1.3メートルのヨーロッパ産冬型菩提樹の苗木です。

今後、ドイツの教育研究機関等と本学がさらに友好関係を深め、交流促進につながることを期待します。

（国際本部国際連携課）



挨拶する北海道日独協会 鈴木会長（左）



植樹の様子

北大インターナショナルハウスで消防避難訓練を実施

国際本部では、10月27日（土）、北大インターナショナルハウス北8条東及び北大インターナショナルハウス北23条1号棟・2号棟において、消防避難訓練を実施しました。

訓練は午前と午後に分けて行い、北大インターナショナルハウス北8条東では、入居者224名のうち約60名が参加し、北23条1号棟・2号棟では入居

者総勢200名のうち約40名が参加しました。

それぞれ屋外への避難後は、消防設備業者の指導の下、水消火器を使い消火器の操作方法を学びました。外国人留学生の入居するインターナショナルハウスでの消防避難訓練は今回初めて企画されたもので、日本式の避難訓練に戸惑う学生も見受けられましたが、

英語、中国語による避難の呼びかけや、札幌市北消防署員の訓話の同時通訳により、日常における防災意識の重要性について再認識し、一連の訓練を終了しました。

（国際本部国際支援課）



屋外へ避難する様子



消火器の操作訓練

■ 部局ニュース

グローバルCOEプログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」主催 国際サマースクール2012フォローアッププログラムを開催



お祭り会場で町民へのアンケート調査を行う大学院生

国際サマースクール2012「自然－社会のつながりと持続可能性」のフォローアッププログラムを10月23日（火）から11月9日（金）の日程で開催しました。国際サマースクールの参加者から研究計画を募集し、審査によって選抜された3名の大学院生が様似町に滞在して「持続可能性」に関する調査を行いました。本学でも「サステナビリティ・ウィーク」などで取り組んでいるように、持続可能な社会の構築はグローバルな環境問題を解決するために人類が取り組むべき重要な課題です。また、その解決のためには、自然科学だけでなく社会・経済など人間の側面も含めた統合的な取り組みが不可欠です。さらにグローバルな課題であると同時に地域の課題でもあります。本プログラムでは、自然が豊富な様似町を対象とし、参加大学院生が自ら立案した計画に沿って調査を行いました。

調査では様似町に全面的にご協力いただき、農業（いちご、軽種馬、稲作、畑作）、水産業、鉱工業、観光業、商業、行政など幅広い職種の方々にインタ

ビューを行い、将来に向けての社会・環境の課題について町民の意識を調べました。また高校を訪問して高校生に意識調査したほか、地場産フェアというお祭り会場で多くの町民の方にアンケートにご回答いただきました。

これらの調査から、人口減少、経営面での不安など、将来に向けての課題が浮かび上がりました。これらは大都市から離れた地域特有の課題と言えます。また、温暖化が水産物の生産やアポイ岳の高山植物に及ぼす影響など、地球規模の環境変化の影響も課題として認識されていました。一方、解決策として、農業において農薬や化学肥料の使用を抑え、地域の環境への負荷を低減するとともに商品の付加価値をつける試みを推進することや、子供たちや訪れた観光客が地域の自然や文化などに触れる機会を増やし、地域を愛する心を育てる教育の重要性が認識されていました。いずれも自然と社会のつながりに関係する内容であり、自然と社会は持続可能な社会を構築するための両輪であることを示唆するものでし

た。

そして町民を対象にタウンホールミーティングを開催し、インタビューやアンケートの結果を報告するとともに、将来に向けての課題についてグループ討論する場を設けました。ここでは、参加町民の中で関心が高かった「産業振興」、「自然の保全」、「地域の自立」についてグループに分かれ、それぞれ課題や対策について議論しました。新しいアイデアが寄せられるなど、活発な議論が展開されました。このような機会は住民参加型の街づくりにもつながると考えられます。

このプログラムの成果については、様似町役場と本学環境科学院にて「様似町の持続可能な未来：将来的に町はどうなるのだろうか？」と題して報告会を開催しました。この成果が持続性科学の発展及び持続可能な地域社会構築の一助となることが期待されます。

（環境科学院・地球環境科学研究院）

スラブ研究センターがBRIT XII (Border Regions in Transition : 移行期の境界地域) 研究大会を東アジアで初開催



財部対馬市長（前列左から6番目）と巡検参加者



佐伯総長による開会の辞

スラブ研究センターでは、11月13日（火）から16日（金）まで、BRIT XII福岡・釜山大会を開催しました。1994年にドイツ・ポーランド大会で結成された、境界・国境地域に関わる研究者が集うネットワークBRITですが、その後、ヨーロッパを中心に大会が組織され、近年は北米・南米へと拡大していました。本学を中心としたチームが、昨年9月にスイス・フランスで開催された第11回大会に参加し、この第12回大会を誘致しました。

BRITの特徴は、通常の学会組織と違い、恒常的な事務局をもたない自発的な研究ネットワークであることです。そのため大会を誘致・主催する組織者がプログラムやスケジュールを自由に組むことになります。ただし、いくつかのルールがあり、国境に面した2つの異なる国の都市で開催すること、会議の間に国境を越える巡検（フィールドトリップ）を入れることが必須とされています。

このような巡検をスムーズにできる地域、そして何より隣国とペアの関係でその発展を考えている都市は、日本

でただひとつ、福岡市しか見当たりません。そこで3年かけて福岡市と協議するとともに、韓国・釜山にもたびたび足を運び、九州大学と東西大学校（釜山）を共催組織に加えることで、BRIT XIIの実施体制を組みました。

大会初日、佐伯 浩総長による開会の辞に続き、主催者を代表してスラブ研究センター 岩下明裕教授（GCOE拠点リーダー）が、“BRIT XII : Challenges and Perspectives”と題するスピーチを行い、その中で、ユーラシア・東アジアにおいて境界研究の拠点が不在であると述べ、BRIT初の東アジアでの開催意義が強調されました。

会場の福岡国際会議場では、福岡市主催による九州大学・東西大学校の学生による討論会や、姜 尚中氏（東京大学）の講演会も開かれました。境界地域研究ネットワークJAPAN (JIBSN) の組織からは、稚内、与那国、竹富、五島など国境自治体の実務者も参加し、日本の境界研究の存在感を示しました。福岡で2日間研究大会を行った後、参加者一同はJR九州からチャーターしたビートル号（水中翼船）で博

多港から対馬厳原港に渡り、「国境の島」対馬を縦断し、財部能成氏（対馬市長）の講演を経て、比田勝港から出港し、韓国釜山港へ入国しました。今回の船による国境越えは多くの境界研究者の関心を引いたようです。

釜山では、東西大学校の真新しいセントラム・キャンパスで大会が続けられました。最終日、張 濟國氏（東西大学校総長）は、昨今の日韓間の対立を念頭に置きつつ、境界間の交流を続け、境界研究を推し進めることが両国間の政治的対立、さらには東南アジアにおける対立の解決につながるとの期待を表明し、4日間にわたる大会が成功裏に閉幕しました。40カ国200名を越える参加者のスケールはBRIT史上最大となり、アジア・ユーラシア地域の研究者、特に日本、シベリア・極東ロシア、中国、シンガポール、タイ、インドの研究者群の存在感は、これまでBRITを牽引してきた欧米の研究者に多大なインパクトを与えました。

（スラブ研究センター）

教育学研究院が北海道学習障害児・者親の会と連携協定を締結



協定書を手に記念撮影（左から：姉崎研究院長、永瀬理事長）

教育学研究院は、11月6日（火）にNPO法人北海道学習障害児・者親の会クローバーと連携協定を締結しました。これは、親の会クローバーが取り組んでいる青年の就労支援事業等に関して、本研究院が取り組んできた現代日本における若者の諸問題に関する分析・検討の成果を提供するとともに、親の会クローバーの先進的な取り組みについて実践の見地から調査し、その成果を若者支援の方法開発に資するため、連携協定を締結するものです。

親の会クローバーは、1987年に学習障害のある子どもの親たちにより結成され、教育・医療・福祉・労働等多方面にわたる問題に取り組んできました。2010年にはトヨタ財団の地域社会プログラムに「2020年を発達障害者の飛躍元年とするプロジェクト」と題して応募し、採択されています。他方、教育学研究院では従来から、現代日本における若者の諸問題、例えば早期離学、就労困難といった問題について様々な視点から調査を行い、分析・検討してきました。親の会クローバーが取り組んでいる先進的なプロジェクトは、教育学研究院にとっても実践的研

究の場となるものであり、密接な連携のもとに協力し合うため協定を締結するに至ったものです。

調印式は人文・社会科学総合教育研究棟で行われ、姉崎洋一教育学研究院長と親の会クローバー 永瀬次郎理事長が出席しました。そして引き続き、「障害のある子どもの親と手を結ぶ一

教育学が親のサポートに向かうとき」をテーマとして、協定締結記念ワークショップが開催され、本研究院の教員と親の会クローバーの関係者が、現状と今後の課題について熱心に語り合いました。

（教育学院・教育学研究院・教育学部）



ワークショップの様子

平成24年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙行

11月16日（金）、薬学部会議室において、平成24年度北海道大学薬学部成績優秀賞授与式を行いました。

この賞は、「GPA制度の導入に伴い、学業が優秀な学生を顕彰し、学生の向学心を喚起する」ことを目的として、平成17年度以降に入学した学部3年次生を対象として設けられたもので、今

回で6回目の授与式となります。

今年度は、学部専門科目の成績が特に優秀な4名が受賞者に選ばれました。

授与式では、29名の薬学部教員が見守るなか、松田 彰薬学部長から表彰状と記念品が1名ずつに授与されました。

成績優秀賞受賞者は薬学部・薬学研究院のホームページに掲載する予定です。

今後この賞が本学部学生の向学心をより一層喚起するものとなることを期待しています。

（薬学研究院・薬学部）



松田学部長（左）から表彰状を授与される成績優秀者



歯学研究科で市民公開特別講座「インプラントって何？」を開催

歯学研究科では、11月11日（日）、学术交流会館において、市民公開特別講座「インプラントって何？」を開催し、一般市民・医療関係者等の114名が聴講しました。

この講座では、午後1時から同4時まで途中15分ほどの休憩をはさみ、歯学研究科 佐野英彦教授が司会を務め、歯学研究科及び病院歯科診療センターの歯科医師・歯科衛生士4名が講義を行いました。

最初に、石川 誠准教授による「インプラントは両刃の剣」の講義が行われ、治療を始めるに当たっての注意点について説明がありました。次の横山 敦郎教授による「インプラントって何？—上部構造から考える—」の講義では、インプラントの3つの要素のうち、かみ合わせや外観の回復を含めた上部構造について説明があり、宮治裕史講師による「インプラントの予後—インプラントを長く持たせるための歯

周病細菌コントロール—」の講義では、インプラントを長持ちさせるために必要な歯周病細菌コントロールの概念についての説明が行われました。最後の今村理子歯科衛生士による「インプラント治療におけるお口の清潔の重要性について」の講義では、インプラントの構造を理解し清潔に保つための清掃道具の紹介やその使用法について具体的な説明がありました。

また、各講義終了後と全体の講義終了後には質疑応答の時間を設け、受講者からの様々な質問に対して各講師から回答がなされました。

本研究科では、今後も研究成果の地域社会への還元の一環として、道民カレッジや国立大学フェスタに参加し、市民公開特別講座を企画・実施する予定です。

（歯学研究科・歯学部）



講義する宮治講師



会場の様子

薬学研究院でアインファーマシーズ寄附分野シンポジウム 「医療安全における薬剤師の果たすべき役割」を開催



会場の様子

11月16日（金）、薬学部臨床薬学講義室において、薬学研究院医薬品リスク管理学（アインファーマシーズ）分野が主催し、薬学研究院の共催により、アインファーマシーズ寄附分野シンポジウム「医療安全における薬剤師の果たすべき役割」を開催しました。医薬品リスク管理学（アインファーマシーズ）分野は、平成18年12月に薬学研究院医療薬学部門に3年間の期限付き寄附分野として開設され、その後さらに3年間の期限が延長されました。その間に調剤過誤管理システム（PREM-S）を開発し、調剤過誤の発生要因の解明に関する研究と薬学部及び卒後薬剤師の教育に従事してきました。

本シンポジウムは、11月の寄附分野終了を迎えるに当たって企画されたもので、調剤過誤をはじめとする医薬品

情報の研究分野で活躍する著明な研究者2名を学外からお招きし、リスク管理学（アインファーマシーズ）分野の教員による研究報告を交えて行われました。プログラムの構成は、薬剤師による医薬品の適正使用に関わる幅広い研究内容を含み、分野外の研究者や学生にも興味深い内容になっていました。

シンポジウムでは、初めに上田一郎理事・副学長が総長に代わって挨拶し、株式会社アインファーマシーズへの感謝状贈呈に続いて、薬学研究院医薬品リスク管理学（アインファーマシーズ）分野の吉田和幸特任助教が「薬局における調剤過誤発生に関わる人的要因」として報告を行いました。続いて、名城大学薬学部の後藤伸之教授が、「薬剤師を抜きにしては進まない医薬品安全管理」についての講演を行い、



上田理事・副学長による挨拶



上田理事・副学長から、（株）アインファーマシーズ代表取締役副社長 加藤博美氏へ感謝状贈呈

最後に、東京大学大学院薬学系研究科の澤田康文教授から「医薬品ライフタイムマネージャーとしての薬剤師」の講演が行われました。

シンポジウムには学内の教員や学生だけでなく学外からも多くの方が参加され、参加者は約140人と会場はほぼ満席状態でした。各講演後には活発な質疑応答が行われ、終了予定時刻を延長し盛会の内に終了しました。

（薬学研究院・薬学部）



薬学研究院 吉田特任助教



名城大学 後藤教授



東京大学 澤田教授

生命科学院でノーベル化学賞受賞者 (Johann Deisenhofer博士) による講義を実施



講義後にDeisenhofer博士を囲んで記念撮影

生命科学院では、10月31日（水）、11月1日（木）の2日間にわたり、1988年のノーベル化学賞受賞者であるJohann Deisenhofer博士による、生命情報分子科学特論「蛋白質結晶学」の講義を実施しました。（担当：先端生命科学研究院特任教授 田中 勲，教授 姚 閔，准教授 田中良和）

Deisenhofer博士は、1984年に膜蛋白質として世界初の構造解析例となる光合成細菌の持つ蛋白質複合体（光反応中心）の3次元構造解析を成功させ、その業績によりHartmut Michel博士、Robert Huber博士とともに、ノーベル化学賞を受賞されました。博士のご来日は、平成23年度日本学術振興会外

国人著名研究者招へい事業（受入機関：京都大学，代表 三木邦夫教授）によるもので、ご来学は、昨年度に続き2度目になります。昨年度は、「ノーベル化学賞受賞者特別講演会」と称して、全学の教職員、学生を対象とした講演をお願いしましたが、今年度は、生命科学院の一般的な講義のひとつにご参加いただき、大学院生に対して、より緊密なお話をさせていただきました。

生命科学院生命融合科学コースの特論は、4回の授業で構成されていますが、Deisenhofer博士には、そのうちの2つの講義をお願いしました。1つ目の講義では、“Macromolecular crystallography : Past, present, and

future”（生体高分子結晶学：過去、現在、未来）と題して、この半世紀の蛋白質結晶学の目覚ましい発展についてお話になり、2つ目の講義では、

“Protein structure refinement”（蛋白質構造の精密化）と題して、蛋白質構造解析の黎明期の精密化法の発展について、ご自身の研究に基づいたお話をされました。講演後に設けた質問時間には、学生から「十年後にはどんな大きな発見や進歩が成し遂げられていると思うか」など、自由奔放な質問が飛び出しましたが、Deisenhofer博士は、学生と一緒に真摯に考えながらお答えになりました。

講義後に寄せられた学生のレポートには、多くの感想が寄せられました。たった2度の講義でしたが、ノーベル賞受賞者から直接の講義を受けて、この分野の学問の重要性を認識し、英語の必要性を再認識し、そして、自分の将来に夢をはせることのできた素晴らしい時間になったようです。

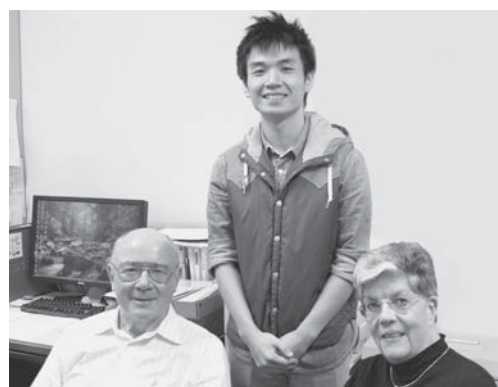
（生命科学院・先端生命科学研究院）

学生のレポートより

- ・新しい時代がやってくるのを待つだけでなく、それを作り出す一員になりたいと思いました。大胆に想像し、謙虚に学び、この先も学問に励んでいきたいと思えます。
- ・言語の点で理解できないところもあったが、非常に貴重な経験でした。
- ・英語力の低さを体感した。2割程度しか理解できなかった。
- ・X線自由レーザー（XFEL）による構造解析について初めて知った。将来の発展に注目したい。
- ・タンパク質を液体ジェット噴射して、それにX線を当てて構造解析をすることができるようになるのを期待したい。



講義の様子



理学部4年 陳 明皓さんとDeisenhoferご夫妻

経済学部で特別講演会「北海道の資源を活かす経営」を開催



熱心に聴講する学生



講演するセイコーマート社長 丸谷氏

経済学部では、11月22日（木）午前10時30分から、人文・社会科学総合教育研究棟W103教室において、株式会社セイコーマート代表取締役社長の丸谷智保氏による特別講演会「北海道の資源を活かす経営」を開催しました。同講演会は、経済学部専門講義「企業論Ⅰ」（担当：経済学研究科准教授阿部智和）の講義の一環として実施されました。

講演者である丸谷氏は北海道拓殖銀行、シティバンクを経て、平成19年にセイコーマートに入社され、平成21年より同社社長を務められています。また、同社は、42年間の長期にわたり北海道内でシェア1位のコンビニエンス・チェーンであり、過去2年においてはサービス産業生産性協議会の顧客満足度調査において、コンビニエンスストア部門において2年連続で1位を獲得している北海道を代表する企業です。

講演では、同社の競争優位の源泉で

ある、物流や製造、調達の特徴について事例に基づいた説明をいただきました。物流については効率を高める試みを続けている結果として、他のコンビニエンス・チェーンでは出店が難しい離島や人口が少ない地域にも出店をしている等の事例が説明されました。

また、同社の惣菜や乳製品等を事例に北海道の農水産物を積極的に活用していること、農業法人の経営を行い原材料調達の内部化を進めていること、農作物のロス削減を試みていることなどの説明も行われました。また、同社の人気商品のひとつであるワインの調達事例では、社長自らが海外のワイナリーまで出向き、調達活動を行うことによって、品質を維持しながらコスト削減を進めている試みが紹介されました。

最後に、高齢化や人口減少など今後の市場縮小が見込まれる今後の北海道の市場の可能性について、非常に示唆に富む発言をいただきました。丸谷氏

によりますと、同社の来店客数を道民の人口で割ると一人当たり年に42回来店していることになるそうです。丸谷氏は一人当たりの来店数を増やす余地はまだ十分に残されていると考えておられ、北海道の市場は今後も成長の見込める市場であると述べられました。こうした発言は、北海道の未来を担う学生たちにとっても、新たな発見であり、非常に勇気付けられるお話であったと思います。

講演会には約250名もの多くの出席者があり、「企業論Ⅰ」を履修中の学部生に加え、大学院生や他学部の学生の参加もありました。講義後に提出されたレポートでは、企業の活動が日頃は眼にすることが少ない様々な活動によって支えられていることが深く理解できた、などの感想が数多く出され、普段の講義とは異なる刺激を学生たちが受けたことがうかがわれました。

（経済学研究科・経済学部）

「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催

11月10日（土）から11日（日）にかけて、脳科学研究教育センターの合宿研修を大滝セミナーハウスで行いました。

研修には、吉岡充弘脳科学研究教育センター長をはじめ、センター基幹教員5名、文学・医学・保健科学・生命科学の各研究科・研究院に属する7名の大学院生、そして2名の事務職員が参加しました。2日間の研修では、口頭による大学院生研究発表（研修Ⅰ）、センター長講話（研修Ⅱ）、大学院生ポスター発表（研修Ⅲ）、基幹教員講演（研修Ⅳ）を行いました。大学院生の発表では、ようやく研究が本格化し始めたばかりの修士課程1年次の履修生だけでなく、昨年も合宿に参加した修士課程2年次や博士課程の履修生の研究成果を見聞することができ、昨年に比べて研究内容が深化していく様子を感じ取ることができました。発表会では大変活発な質疑応答があり、夕食の時間まで予定時間を大幅に超えて議

論が続きました。また、今年度からセンター長に就任された吉岡先生からは、「科学者をめざす君たちへー科学者の責任ある行動とは」というタイトルの講話があり、昨今問題になっている科学者のモラルや責務をはじめ、研究成果の配分や特許に至るまで、研究者として知っておくべき様々な事項について話がありました。これらの研修を通して、脳科学研究への理解を深めると同時に、深夜に及ぶ懇親会も含め、部局を越えた学生と教員間の実質的な交流を行いました。

この合宿研修は、とかく所属研究室の研究テーマや研究手法に偏りがちな大学院教育を、その垣根を越えて融合させることを目指す本センターの最も重要な活動のひとつです。来年度はより多くの関係者が参加しやすい札幌近郊での開催を検討しています。

（脳科学研究教育センター）



ポスターの前で談笑する履修生と基幹教員



14名の参加者の集合写真

総合博物館がキャンパス紹介映像を制作

この度、総合博物館がキャンパス紹介映像「「エルムの森」のキャンパスへ！」を制作しました。この映像作品は、10月6日（土）に開催された「ホームカミングデー2012」において、同窓生の皆様に現在のキャンパスの様子を紹介するため、総合博物館で博物館映像学を研究する藤田良治助教が2年間撮りためた映像を編集したものです。

ポプラ並木やイチョウ並木、中央

ローンで憩う人々、ノーベル化学賞受賞に関連した全学的イベントやキャンパスでのびのびと楽しく過ごす学生たちの様子などが収められ、ゆったりとした時間の流れの中にある、本学の美しく生き生きとしたキャンパスを感じることのできる15分の映像となっています。

つきましては、本作品の貸出を行いますので、ぜひご活用ください。ご覧

になりたい方、キャンパス紹介映像として活用を希望される教職員の皆様は、以下の連絡先までお問い合わせをお願いします。

◆連絡先）助教 藤田良治

内線：4732

E-mail：fujita@museum.hokudai.ac.jp

（総合博物館）



映像作品「「エルムの森」のキャンパスへ！」から博物館外観のワンシーン



鈴木 章名誉教授
ノーベル化学賞受賞祝賀会のワンシーン



工学部での冬の綱引きのワンシーン

法学研究科・法学部・公共政策大学院で留学生パーティを開催



参加者の集合写真



交流する参加学生

法学研究科・法学部・公共政策大学院では、11月1日(木)午後6時から、中央食堂において、外国人留学生とサポーター・チューター学生や交換留学経験者、及び関係教職員を対象として「留学生パーティ」を開催しました。

全学的にも外国人留学生の入学者は年々増加していますが、現在、法学研究科・法学部では、公共政策大学院を

含め99名の外国人留学生が在籍しています。本パーティは、今年度新たに入學した留学生に早く大学生活に慣れてもらうこと、苦勞を抱えながら勉學に励んでいる在學生の状況を知ってもらうこと、及び學生間の交流を広げってもらうことを目的として開催しました。

当日は、外国人留学生、日本人学生及び関係教職員ら約70名が出席し、留

學生と留学経験のある日本人學生が司會を務めました。松久三四彦法学研究科長のビデオレターで會が始まり、ユニークな自己紹介、ビンゴゲームなどで大いに楽しみ、参加者同士で親交を深めました。

(法学研究科・法学部)

経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催

経済学研究科・経済学部では11月8日(木)午後6時から、研究棟3階会議室において、平成24年度外国人留学生懇親会を開催しました。

本研究科・学部では、外国人留学生が年々増加しており、特に大学院修士課程(現代経済経営専攻)においては、在籍する學生の約6割を占めています。このような状況の下、留学生、日本人學生、教職員が相互に理解と親睦を深め、交流を通して生まれた絆が留學生の本學における順調な學生生活に資することを目的とし、本懇親会を開催しています。

5回目の開催となる今回は、司會進行とゲームの企画を博士後期課程1年のコンゴ共和国からの留學生、修士課程1年の中国からの留學生、学部4年の日本人學生の計3名が務め、本研究科・学部等に在籍する留學生や、そのチューター・サポーター、そして国際

交流に関心のある日本人學生と関係教職員など約70名が参加しました。参加者は軽食を取りながら、歓談やゲームへの参加を通して互いに親交を深め、盛況のうちに閉会しました。

(経済学研究科・経済学部)



吉見 宏経済学研究科長からの挨拶



参加者の集合写真

附属図書館が「附属図書館講演会」及び「国立大学図書館協会地区協会助成事業北海道地区ワーキンググループ実施報告会」を開催

11月16日（金）、文系共同講義棟において、附属図書館と国立大学図書館協会北海道地区協会の主催による「附属図書館講演会」及び「国立大学図書館協会地区協会助成事業北海道地区ワーキンググループ実施報告会」を開催し、学内外から70名の参加がありました。

前半の講演会は、「大学図書館における学習支援の可能性」と題し、講師に苫小牧工業高等専門学校非常勤講師の斉藤 準先生をお招きしました。斉藤先生は本年9月まで本学高等教育推進機構教育支援部アカデミック・サポートセンターの特定専門職員として、学生への学習支援に尽力されてきました。講演はこの経験をもとに、①全学的視点から図書館を学生にとって便利な場所と位置付け、図書館が学習支援を行う必然性について、②これからの図書館学習支援には、学生が勉強しやすい学習環境の整備が必要であり、館内での学生や専門職員による人的支援と、そのために学生や教職員、他部署との連携・協働が必要なことについて、他大学の事例を交え話されました。また、最後に図書館とアカデミック・サポートセンターの協働による共

催セミナーの試行を紹介され、短い準備期間で単独で行うよりも充実した内容を学生に提供できたことは、お互いの得意分野の補完によるもので、学内協働は有効で今後ますます重要になると話されました。

休憩をはさみ、後半は報告会を行いました。国立大学図書館協会の地区協会助成事業として、北海道地区協会が採択された「学生協働活性化のためのシーズ開発」事業の実施報告です。事業の実施にあたり、北海道地区の7大学（本学、北海道教育大学、室蘭工業大学、小樽商科大学、帯広畜産大学、旭川医科大学、北見工業大学）は独自

の学生協働企画を立案し、各大学の若手・中堅職員によるワーキンググループを立ち上げ、本年5月に着手報告会を本学で行いました。今回は各企画を実施した結果をもとに、実施概要及び期待しうる効果や今後の課題をメンバーが報告しました。

参加者からは、「多くの協働事例やその効果を知り、今後の参考にしたい」、「刺激を受けた」との声が多く寄せられ、これから図書館が学内協働による「学習支援」を検討する上で、非常に有意義な会となりました。

（附属図書館）



講演会で講演する斉藤先生



報告会で発表する7大学のワーキンググループメンバー

附属図書館で「UMass-Hokudai Library Workshop」を開催



参加者による記念写真

附属図書館では、11月13日（火）、本館大会議室において、大学間交流協定校であるマサチューセッツ大学（UMass）アマースト校理工学図書館のマキシ・シュミットさんをお迎えして「UMass-Hokudai Library Workshop」を開催しました。このワークショップでは、図書館職員が本学及び本学図書館の紹介と、図書館の情報リテラシー教育支援についての発表を英語で行いました。シュミットさんからは、マサチューセッツ大学アマースト校図書館のサービスの紹介、特に留学生へのサービスに視点を置いた発表がありました。

途中休憩をはさみ、本学所蔵の北方資料「東西蝦夷山川地理取調図」（1859年）などを紹介し、後半は先の発表を元にディスカッションを行いました。ここでは、マサチューセッツ大学図書館の活動や日米の図書館サービスの違い、留学生へのサービスなどについて話し合いました。マサチューセッツ大学におけるアジア系の留学生は図書館

を使ってよく勉強するが、図書館員に質問することが少ないので、どのように彼らとコミュニケーションをとるか、それが課題であるとのことでした。

このワークショップには、全学の図書館職員18名のほか、国際本部から7名、アカデミック・サポートセンターから2名の参加があり、マサチューセッツ大学の学修支援機能について情報を共有する良い機会となりました。

また、翌14日（水）には、農学部、理学部、工学部の各図書室や総合博物館の見学を行いました。マサチューセッツ大学アマースト校の中央図書館では、ラーニング・コモンズ*において数々の学修支援が行われており、これを機会に今後も情報交換や交流を続けていきたいと考えています。

*ラーニング・コモンズ

図書館に設置された学生の主体的学習を支援する場所。

（附属図書館）



講演するシュミットさん



北方資料見学の様子

附属図書館と学生サークル「Sapollo」との協働による パネル展示を開催

附属図書館は、本学の学生サークル「北海道大学図書館サークルSapollo」*と協働で様々な催しを企画していますが、10月から11月にかけて、メディアコートで2つの展示を開催しました。



「北大経由、文壇行き」展示風景

パネル展示「ビブリオバトル・ノート～北大ビブリオバトルを振り返る～」

10月22日（月）～11月9日（金）

5月から7月までに開催した第1回～第3回の「北大ビブリオバトル」と、9月に附属図書館の主催で開催した「ビブリオバトル北大予選会～首都決戦への道～」を振り返るパネル展示を開催しました。

バトラー（出場者）が紹介した本の

一挙公開や、バトラーの生の声、実行委員や観戦者から寄せられた感想などをイラストや写真を交えて掲載するなど、バトラーと観戦者の熱気が伝わってくる展示になりました。アンケートには「またビブリオバトルを開催してほしい」「自分も参加してみたい」といった声が寄せられました。



「ビブリオバトル・ノート」展示風景

パネル展示「北大経由、文壇行き―北大から世に出た現代作家たち」

11月13日（火）～11月30日（金）

本学で学んだ現代作家と本学とのつながりに焦点をあて、熟練の作家から若き気鋭の作家まで6人を選び、その人と作品をパネルで紹介しました。

取り上げた作家は「東 直己」「富樫倫太郎」「穂村 弘」「赤染晶子」「水原 涼」「工藤水生」で、いずれも北

大で学生生活を過ごし、魅力あふれる作品を著している文人ばかりです。北大生にも刺激となる人物像と個性的な作品群の紹介に、「作家のセレクトが面白い」「実際に読んでみたい」「6人の作家を身近に感じた」などの感想が聞かれました。



展示パネル

*「北大ビブリオバトル実行委員会」は11月にサークル名を「北海道大学図書館サークルSapollo」に改称しました。

（附属図書館）

附属図書館・大学文書館共催展示「“台湾は天然の恩恵裕なる”——植民地台湾を駆けた北大卒業生たち」第Ⅱ期を開催

12月4日（火）から、附属図書館本館玄関ロビーにおいて、附属図書館・大学文書館共催企画展示「“台湾は天然の恩恵裕なる”——植民地台湾を駆けた北大卒業生たち」の第Ⅱ期を開始しました。

第Ⅱ期のテーマは「技術——試験場・研究所の技師として」です。日本の台湾植民地統治の最重要政策のひとつであった農業振興において、北大卒業生は、農業技術者として極めて大きな役割を担いました。台湾総督府の農業関係調査研究機関であった農事試験場は、後に中央研究所農業部・農業試験所と改組を行ないますが、組織管理・運営の中核には、常に北大卒業生が当たりました。藤根吉春・鈴木真吉（農事試験場主事）、大島金太郎・渋谷紀

三郎（中央研究所農業部長）、磯永吉（農業試験所長）などです。

また、種芸・農芸化学・糖業・植物病理・応用動物・畜産などの各分野や地方支所の長をはじめ、試験場や研究所農業部の技師の多くは北大卒業生が占めました。具体的には、サトウキビ（金子昌太郎）、米（磯永吉）、バナナ（芳賀鉄五郎）、パイナップル（桜井芳次郎）、サツマイモ（平間惣三郎）、麻繊維（井街 顕）、茶（谷村愛之助）、牛（柳川秀興）といった台湾の主要農産物の生産・加工技術です。さらに、それを支える植物病理（川上瀧彌、三宅 勉）、害虫対策（三輪勇四郎）、肥料（渋谷紀三郎）の調査研究などです。

今回の展示では、下記の4部構成で資料を陳列し、人物紹介パネル等を掲

示しています。

1. 農事試験場から出発——有用植物、^{りんさん} 燐酸、^{ぼなな} 麻、^{あな} 苧蕉
2. 中央研究所農業部への改組——^{さとうきび} 露菌病、^{ある} 甘蔗、^{かり} 亜爾加里土壤、^{さつまいも} 黄牛
3. 農業試験所に——茶、^{さつまいも} 甘藷、^{ばい} 鳳梨、^{なつぷる} 叩頭虫
4. エンジニアたちのラボラトリー

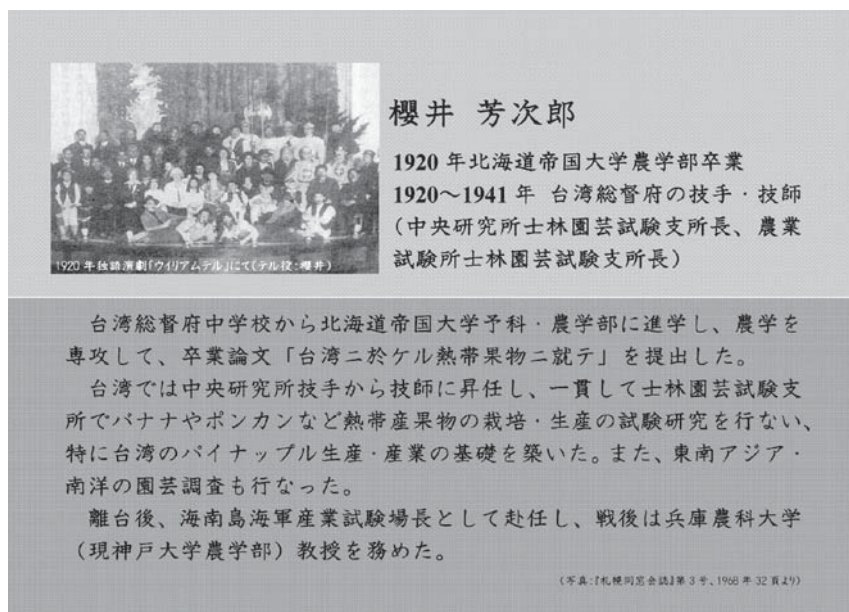
展示期間は平成25年3月31日（日）までです。附属図書館本館の開館時間にご覧いただけます。

この展示を通じ、北海道大学の歴史と台湾に関心を向けていただければと思います。

（附属図書館・大学文書館）



展示ポスター



人物紹介パネル（桜井芳次郎）

薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を挙

薬学研究院・薬学部では、11月13日（火）、第一講義室において、本研究院並びに本学部の教育と研究のために供された実験動物の慰霊祭を執り行い、教員、学生など100名を超える関係者が参列しました。

慰霊祭は、動物実験委員会の原島秀吉委員長より、実験動物に供された動物たちに追悼の辞が述べられ、次いで、参列者全員による黙祷及び献花が行われました。

最後に、原島委員長による挨拶があ

り、生命科学及び薬学の教育や研究の発展のために多大な寄与を遂げた各種実験動物の諸霊の供養を行いました。

（薬学研究院・薬学部）



「追悼の辞」を述べる原島委員長



多数の参列者

歯学研究科で「動物供養祭」を挙

歯学研究科では、11月29日（木）午後4時30分から、学部会議室において、動物供養祭を執り行いました。供養祭は、過去1年間に歯学教育・研究のため実験に供された動物（サル、ラット、マウス計1,868体）への感謝と追悼のために毎年実施しており、教職員、学生等の動物実験関係者約40人が参列しました。

供養祭では、最初に鈴木邦明歯学研究科長から挨拶があり、次いで、動物実験委員会委員長の柴田健一郎教授から、歯学研究の進歩に尊い命を捧げてくれた多数の実験動物の御霊の安らかなることを願う旨の「祭文」が捧げられ、最後に参列者全員により献花が行われました。

（歯学研究科・歯学部）



「祭文」を読み上げる柴田委員長



参列者に挨拶する鈴木研究科長



献花する参列者

消防訓練の実施

医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター

医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター合同で、11月8日（木）午前11時55分から、中棟1階の循環器・呼吸器外科学分野カンファレンス室から出火したとの想定で、消防訓練を実施しました。

出火時の初動体制を確立するため、各行動の中心となる自衛消防隊が直ちに活動し、出火場所に対応して各

職務分担の任務（通報連絡・避難誘導・消火・防護措置等）を行い、被害を最小限に食い止める訓練を実施しました。

終りには玉木長良医学研究科長から日頃の防火に対する心構えについて話があり、参加した約200名の教職員・学生は訓練の重要性と防災意識を改めて見直しました。

総合訓練に続いて、消火器を使った消火訓練を防災設備業者の指導の下で実施し、使用方法について理解を深め、一連の消防訓練を無事に終えることができました。

（医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、
アイソトープ総合センター）



初期消火活動の様子



消火訓練の様子

附属図書館

附属図書館本館では、11月9日（金）午後2時から、東棟2階第一会議室から出火したとの想定で、図書館利用者及び職員約140名が参加し、消防訓練を実施しました。

火災発生後、直ちに「通報連絡係、避難誘導係、消火係、防護措置係、救護係、搬出係」の自衛消防隊の各担当

に分かれ、現場の確認、消防署への通報、非常放送、避難誘導、消火活動等、実践さながらの訓練が行われました。

図書館の改修工事が終了してから初めての訓練だったこともあり、消防訓練に続いて防災設備業者の指導の下、避難器具の取扱説明を実施し、使用方法についてより一層の理解を深め、一

連の訓練を無事に終了しました。

また、実施後、訓練について各担当から意見聴取を行い、それを踏まえ問題点を集約し、次回の実施に向けて検討を行いました。

（附属図書館）



避難訓練の様子



自衛消防隊本部の様子

■お知らせ

冬期間の駐車について

ー除雪・通行の支障となる駐車はやめましょうー

例年12月から3月末までの間は、札幌キャンパス構内の主要幹線道路のほか、支線道路及び北13条共同駐車場等の除雪を行っています。除雪作業の支障となるため、札幌キャンパス構内では路上及び駐車場の終夜の駐車を禁止しています。ご理解とご協力をお願いします。

なお、不正駐車の場合には、大学構内への入構制限その他必要な措置を構ずることがあります。

(施設部環境配慮促進課)



過去に除雪の支障となった車両

■同窓会との交流

北海道大学環境科学同窓会 設立祝賀会



参加会員の集合写真

ホームカミングデーが行われた10月6日(土)、ファカルティハウス「エンレイソウ」において、北海道大学環境科学同窓会設立祝賀会が開催されました。

環境科学同窓会は、現在の環境科学

院の前身の環境科学研究科、地球環境科学研究科の修了生のほか、論文博士として学位を修得した者等を会員として組織され、本年5月10日(木)に設立されました。また、6月12日(火)に札幌市内のホテルで開催された「平

成24年度北海道大学連合同窓会 評議員会・幹事会合同会議」において、北海道大学連合同窓会への加入が認められています。

祝賀会には90名を超える会員が集い、はじめに記念撮影が行われ、嶋津克明環境科学同窓会長(環境科学院長)の開会挨拶の後、佐伯 浩総長から祝辞が述べられ、佐々木胤則北海道教育大学教授の乾杯の発声で開宴となりました。現役の学生と名誉教授の先生方が歓談する光景など、同窓会ならではの温かい雰囲気が会場一杯に広がり、最後に三上 隆理事・副学長の乾杯の発声で盛会のうちに終宴を迎えました。

(環境科学院・地球環境科学研究院)

■ 諸会議の開催状況

役員会（平成24年11月12日）

報告事項・平成24年度北海道大学進学相談会の開催結果について

- ・九州大学との合同活動報告会について
- ・世界トップレベル研究拠点プログラム（WPI）の審査結果について
- ・平成23年度に係る業務の実績に関する評価結果について
- ・保有している土地・建物の処分及び有効活用について

教育研究評議会（平成24年11月21日）

報告事項・次期総長候補者の選考について

- ・平成23年度に係る業務の実績に関する評価結果について
- ・学生の懲戒解除について

役員会（平成24年11月29日）

協議事項・重要な財産を譲渡する計画について

報告事項・平成24年度施設整備事業の設計概要について

- ・平成24年度今夏の節電対策の結果について
- ・平成24年度今冬の節電対策について
- ・「国立大学法人北海道大学において実施する各種評価に係る項目等一覧」の改訂について
- ・平成24年度中間決算について
- ・財務レポート2012について

※規程の制定、改廃については、「学内規程」欄に掲載しております。

■ 学内規程

北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

（平成24年12月1日海大達第114号）

本年12月1日付けで、薬学研究院に置く寄附分野を廃止したことに伴い、所要の改正を行ったものです。

■ 研修

研修名：平成24年度国立大学法人北海道大学簿記研修

開催期間：平成24年10月5日～平成24年11月18日

開催場所：TAC株式会社札幌校

研修目的：会計事務に従事する職員に、会計事務の基礎である国立大学法人会計基準、同注解及び実務指針を理解する上で必要となる複式簿記の基本知識を付与し、日商簿記3級資格を取得させることを目的とする。



受講風景

（財務部主計課）

研修名：平成24年度北海道大学教務事務実務研修

開催期間：平成24年11月8日～平成24年11月9日

開催場所：高等教育推進機構大会議室

研修目的：大学の教務事務は複雑多岐にわたることから、担当職員に教務事務の円滑な処理に必要な知識及び教務系職員の基礎知識を習得させるとともに、教務事務について協議・意見交換を行うことにより、教務事務に携わる職員の意識及び資質の向上を図ることを目的とする。



開講式で挨拶する
村田直樹理事・事務局長



グループ討議の様子（事例研究）

（学務部教務課）

研修名：平成24年度北海道地区大学等留学生担当職員研修

開催期間：平成24年11月15日～平成24年11月16日

開催場所：国際本部大会議室

研修目的：北海道地区の留学生交流事務を担当する大学等の職員に対し、留学生交流（留学生の派遣・受入）に関する専門的知識を実践的手法により習得させ、職員の資質の向上と事務能率の増進を図ることを目的とする。



真剣に討議する参加者
（危機管理シュミレーション）



「留学生の立場から提案します」
学生講師によるプログラム

（国際本部国際支援課）

研修名：平成24年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修

開催期間：平成24年11月28日～平成24年11月30日

開催場所：百年記念会館大会議室

研修目的：北海道地区国立大学法人等の会計事務に従事し、複式簿記の基礎的知識を有する職員に、国立大学法人（独立行政法人）会計基準、同注解及び実務指針に係る知識を習得させることを目的とする。



新日本有限責任監査法人
小泉修一公認会計士による講義



文部科学省高等教育局国立大学法人支援課
高木 歩専門職による講話

（財務部主計課）

■表敬訪問

国内

年月日	来 訪 者
24.12.5	名誉教授 鈴木 章 ご夫妻



名誉教授 鈴木 章 ご夫妻（右側）

（総務企画部広報課）

海外

年月日	来 訪 者	来 訪 目 的
24.11.9	エジプト大使館 文化・教育・科学局 文化担当官 Gad.Mohamed El-Qady 博士	両国の交流に関する懇談
24.11.27	PARE Program Steering Committee 参加者	世界展開力強化事業 PARE Programに係る打合せのため
24.11.28	前インドネシア泥炭学会会長 Bambang Setiadi 博士	本学サステナビリティ学教育研究センターでの講演会のため
24.11.29	JICA 堂道秀明 副理事長	本学とJICAの連携状況に関する懇談



エジプト大使館 文化・教育・科学局 文化担当官
Gad.Mohamed El-Qady 博士（左側）



PARE Program Steering Committee 参加者



前インドネシア泥炭学会会長
Bambang Setiadi 博士（中央右）



JICA 堂道秀明 副理事長（右から5人目）

（国際本部国際連携課）

人事

平成24年11月16日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【専門職（学術）】 大学院理学研究院学術上席専門職	河 村 裕	採用

平成24年11月16日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【技術職員等】 （辞職）	木 村 恵 美 鈴 木 沙耶香	北海道大学病院看護部看護師 北海道大学病院看護部看護師

平成24年12月1日付発令

新 職 名（発令事項）	氏 名	旧 職 名（現職名）
【教授】 大学院情報科学研究科教授	山 本 雅 人	大学院情報科学研究科准教授
【助教】 電子科学研究所附属グリーンナノテクノロジー研究センター助教	押 切 友 也	採用
【係員】 北海道大学病院医事課医療支援室	西 谷 篤	採用

新任教授紹介

平成24年12月1日付



情報科学研究科教授に

やまもと まさひと
山本 雅人 氏

複合情報科学専攻複雑系工学
講座

生年月日

昭和43年 7 月30日

最終学歴

北海道大学大学院工学研究科博士後期課程修了（平成 8 年 3 月）
博士（工学）（北海道大学）

専門分野

人工生命，最適化，複雑ネットワーク

訃報

名誉教授 久保 周一郎 氏
(享年87歳)



名誉教授 久保周一郎氏は、平成24年11月18日に逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和19年9月函館水産専門学校水産製造科を卒業、大蔵技官を経て、同22年3月函館水産専門学校文部教官に採用され、同26年3月北海道大学水産学部講師、同36年3月同助教授、同年4月北海道大学触媒研究所助教授、同38年3月大阪大学理学部助教授を経て、同42年8月北海道大学獣医学部教授に任ぜられました。以来20年余りにわたり獣医学部獣医学科家畜生

学講座を担当されるとともに、併せて同大学院獣医学研究科を担当し、同講座の教育・研究の充実に尽力され、多くの人材の育成に貢献されました。

また、昭和59年5月から同61年4月までは北海道大学獣医学部長として学部の運営、内容の充実と拡充等に熱誠にその職を務められ、同63年3月本学を停年退官後、同年4月北海道大学名誉教授の称号を授与されました。さらに同年4月から平成7年3月まで日本大学農獣医学部獣医学科教授として獣医生理化学の教育研究に従事されました。

研究面においては、昭和35年12月に東京大学から理学博士の学位が授与された、水産動物の筋収縮調節蛋白質トロポミオシンの化学構造とその比較生化学的意義に関する研究をはじめとして、筋収縮の分子論的機序の解明に貢献する多大な成果を収められました。さらに、食中毒に関わるボツリヌス菌に興味を持たれ、ボツリヌス毒素の構造と機能に関する研究を推し進めら

れ、その神経毒性発現機序を解明するなど、毒素研究の発展にも努力されました。

また、日本生化学会評議員、日本獣医学会評議員としてこれらの学会の発展に尽力されました。特に、獣医学及び関連分野の専門家を網羅した「近未来社会における獣医学—その現状と未来像—」研究班を組織され、その成果を「獣医学1988」として発表し、近未来社会における獣医学の役割と展望を明確にするなど、斯学の発展に貢献されました。

以上のように先生は、獣医学、生化学、生命科学の分野において優れた業績を挙げ、我が国における学術の進歩発展に貢献されとともに、数多くの後進の指導育成に尽力されました。これらの功績により、平成14年11月勲二等瑞宝章を受章されました。

ここに謹んで先生のご功績を称え、ご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(獣医学研究科・獣医学部)

名誉教授 内野 純一 氏
(享年81歳)



名誉教授 内野純一氏は、平成24年12月2日に逝去されました。ここに生前のご功績を偲び、謹んで哀悼の意を表します。

先生は、昭和28年4月に北海道大学医学部に入学、同32年3月に卒業されました。インターンを経て同34年、北海道大学医学部第一外科に入局されました。昭和41年に北海道大学医学部助

手に採用され、同47年に同講師、同58年に同助教授を経て、同60年3月に同教授に昇任されました。平成8年3月、本学を停年退官後、同年4月、北海道大学名誉教授の称号を授与されました。

研究面においては、障害肝の肝切除や肺結核の外科治療、肝癌細胞の培養、ヌードマウス移植、抗AFP抗体などの研究に携わり、さらには小児肝芽腫、神経芽腫や先天性胆道閉鎖症など小児外科領域を担当され、その病態、治療について研究されました。

診療面では、Surgical Oncologyの概念を早くから持たれ、外科治療のみで満足することなく、化学療法や抗体治療にも力を注いでおられました。肝エキノコックス症についても、世界に先駆けて超音波による検診システムを構築し、この国際的な業績に関しまして

は、札幌で国際シンポジウムが開催され、北海道医師会賞、北海道知事賞も受賞されています。

教育としては、教授在任中に、実に78名もの多くの博士号取得者を輩出され、主な学会活動としましては、平成4年に日本小児外科学会、同7年に日本癌治療学会の会長を歴任されました。

以上のように、先生は長年にわたり、消化器外科及び小児外科を中心とした外科治療に関して、幅広い研究活動に尽力されとともに、国内外の学術振興、人材育成に多大な貢献をされました。

ここに謹んで先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

(医学研究科・医学部)

資料

平成24年度外国人留学生数

◆部局別

学部等

平成24年11月1日現在

部局名	国費		外国政府派遣		私費		合 計
	学士課程	研究生等	学士課程	研究生等	学士課程	研究生等	
文学部		3(3)			1(1)	94(70)	98(74)
教育学部				1(1)	4(4)	22(21)	27(26)
法学部					2(1)	10(6)	12(7)
経済学部	2(2)				2(1)	41(23)	45(26)
理学部					3	4(1)	7(1)
医学部					3(2)	1(1)	4(3)
歯学部					2(2)		2(2)
薬学部							0(0)
工学部	12(5)		17(4)		13(4)	20(3)	62(16)
農学部					3(1)	7(7)	10(8)
獣医学部					1(1)	3(2)	4(3)
水産学部					3(1)	12(7)	15(8)
高等教育推進機構総合教育部	2(1)		6		12(8)		20(9)
合 計	16(8)	3(3)	23(4)	1(1)	49(26)	214(141)	306(183)

大学院等

部局名	国費				外国政府派遣				私費				合 計
	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	修士課程	専門職学位課程	博士課程	研究生等	
文学研究科	3(3)		8(4)	2	9(8)		11(10)	2(1)	61(45)		29(18)	5(3)	130(92)
法学研究科			4(2)		1(1)		9(4)	3	28(12)		17(6)	20(11)	82(36)
経済学研究科	3(2)		1		1(1)		2(1)	1	34(23)		6(5)	1(1)	49(33)
医学研究科	1		8(3)				5(3)		3(1)		9(6)	5(2)	31(15)
歯学研究科			2(1)								7(3)	1(1)	10(5)
獣医学研究科			20(8)				1	1(1)			10(4)	2(1)	34(14)
情報科学研究科	4(2)		10(3)	1	5(1)		13(3)	2(1)	33(7)		28(8)	10	106(25)
水産科学院	2		7(2)		1(1)		6(3)		13(5)		12(7)	4(2)	45(20)
水産科学研究院				2(1)				2					4(1)
環境科学大学院	4(3)		10(5)				15(5)		17(10)		42(18)		88(41)
地球環境科学研究院				2(1)								5(2)	7(3)
理学大学院	3(1)		8(3)	1	1		2(1)		6(1)		15(4)		36(10)
理学研究院								1(1)					1(1)
農学大学院	12(7)		26(17)		3(1)		20(10)		22(17)		15(4)		98(56)
農学研究院				3				3				3(1)	9(1)
生命科学大学院	2(2)		24(6)		1(1)		4(2)		7(1)		22(13)		60(25)
教育学大学院					2(1)		1	1	28(18)		9(7)	1(1)	42(27)
教育学研究科											1(1)		1(1)
国際広報メディア・観光学院	1		4(1)		1(1)		6(2)		37(31)		6(3)	1(1)	56(39)
メディア・コミュニケーション研究院				2(2)				1				16(13)	19(15)
国際広報メディア研究科											1(1)		1(1)
保健科学院					1				1(1)				2(1)
保健科学研究院												5(4)	5(4)
工学大学院	19(2)		32(9)		3		31(10)		27(6)		19(4)	11(4)	142(35)
工学研究院								3(1)				9(1)	12(2)
工学研究科											7		7(0)
総合化学大学院	2(1)		7(2)				4(2)		10(5)		22(7)	1	46(17)
公共政策学教育部		1								3(1)			4(1)
公共政策学連携研究部												1(1)	1(1)
低温科学研究所								2(1)					2(1)
電子科学研究所				1				1					2(0)
遺伝子病制御研究所								1					1(0)
触媒化学研究センター				1								2(1)	3(1)
スラブ研究センター				2				1				1(1)	4(1)
観光学高等研究センター												1	1(0)
国際本部留学生センター												1(1)	1(1)
高等教育推進機構												2(1)	2(1)
合 計	56(23)	1(0)	171(66)	17(4)	29(16)	0(0)	130(56)	25(6)	327(183)	3(1)	277(119)	108(53)	1,144(527)

日本語研修生等

国際本部留学生センター	日本語・日本文化研修生		日本語研修生 国 費	合 計
	国 費	私 費		
	20(13)	15(13)	8(2)	43(28)

外国人留学生総数

学部留学生数	大 学 院 留 学 生			研究生等	日本語研修生 日本語・日本文化研修生	留学生総数
	修士課程	専門職学位課程	博士課程			
88(38)	412(222)	4(1)	578(241)	368(208)	43(28)	1,493(738)

* () 内は女子を内数で示す。

* 修士課程には博士前期課程を、博士課程には博士後期課程を含む。

* 研究生等には特別研究学生及び特別聴講学生を含む。

(国際本部国際支援課)

平成24年度国別外国人留学生数

◆国・地域別

平成24年11月1日現在

[illegible]

※ () 内は女子を内数で示す。

(国際本部国際支援課)

北大時報掲載記事事項別一覧（平成24年掲載分）

表紙

- 1月号 ・大学入試センター試験（2012.1.14・15）
 2月号 ・雪景色の古河講堂
 3月号 ・一般入試前期日程の合格発表（2012.3.8）
 4月号 ・1930年代後半の第一農場「エルムの鐘」
 5月号 ・附属図書館と法学部棟をつなぐ渡り廊下（2012.4.2）
 6月号 ・旧医学部建物と中庭（1955年）
 7月号 ・メインストリート・低温科学研究所（1955年）
 8月号 ・ひらめき☆ときめきサイエンス「こんぶの森を育てよう！」（2012.7.28）
 9月号 ・学生発案型イベント「夏休み企画！ニンテンドーDSを持って北大博物館へGO！GO！」（2012.8.4・5）
 10月号 ・ホームカミングデー2012「歓迎式典・記念講演会」（2012.10.6）
 11月号 ・北13条通り（1955年頃）
 12月号 ・旧札幌農学校図書館（1955年頃）

裏表紙

- 1月号 ・北の息吹（57）エゾノシモツケソウ（*Filipendula glaberrima*）
 2月号 ・北の息吹（58）メアカンキンバイ（*Potentilla miyabei*）
 3月号 ・北の息吹（59）エゾツツジ（*Therorhodon camtschaticum*）
 4月号 ・北の息吹（60）エゾイチゲ（*Anemone yezoensis*）
 5月号 ・北の息吹（61）ハクサンチドリ（*Dactylorhiza aristata*）
 6月号 ・北の息吹（62）エゾオヤマノエンドウ（*Oxypetalis japonica var. sericea*）
 7月号 ・北の息吹（63）エゾスカシユリ（*Lilium pensylvanicum*）
 8月号 ・北の息吹（64）ジムカデ（*Harimanella stelleriana*）
 9月号 ・北の息吹（65）リシリリンドウ（*Gentiana jamesii*）
 10月号 ・北の息吹（66）チシマセンブリ（*Swertia teraetala* ssp. *tetrapetala*）
 11月号 ・北の息吹（67）センブリ（*Swertia japonica*）
 12月号 ・北の息吹（68）イワヒゲ（*Cassiope lycopodioides*）

総長告辞等

- 1月号 ・年頭の挨拶
 4月号 ・告辞（学士学位記授与式、入学式）

役員便り

- 2月号 ・大学運営を担う組織－総長室・本部・機構－
 3月号 ・国際的に開かれた大学－海外オフィスの役割－
 5月号 ・総合入試1期生の移行を終えて
 6月号 ・研究戦略と産学連携
 7月号 ・大学に求められる広報活動－広報と同窓会－
 8月号 ・北海道大学における職員・人事制度
 9月号 ・グローバルな大学を目指して
 10月号 ・情報化の推進にあたって
 11月号 ・女性教員力活用の現状と課題
 12月号 ・教育支援体制の構築に向けて

全学ニュース

- 1月号 ・鈴木 章名誉教授が日本学士院会員に選定
 ・大学入試センター試験の実施
 ・第7回北海道大学・九州大学合同活動報告会を開催
 ・平成24年度予算府案（本学関係分）の主要事項
 ・北大フロンティア基金
 ・サステナビリティ・ウィーク2011の開催
 ・サステナビリティ・ウィーク2011を振り返って
 ・サステナビリティ・ウィーク2011オープニング・セレモニー

- ・北海道－フィンランドデイズ・オープニングセッション
- ・第3回北方圏の環境研究に関するシンポジウム
- ・国際シンポジウム「北方のツーリズムと景観」
- ・国際シンポジウム「先住民族と教育」
- ・国際シンポジウム「東アジアとメディアの新たな可能性～東日本大震災をめぐって」
- ・市民公開セミナー「健康を創る最先端技術と健康マネジメント」
- ・ラジオ番組「はてな？サステナ」
- ・世界環境学生会議 in 北大
- ・第8回プレゼン・ディベート大会
- ・現代社会におけるリスク分散のあり方と環境教育
- ・特別講演会「がんの放射線治療の歴史と最先端技術」
- ・社会実験「GMどうみん議会」
- ・シンポジウム「被災地の復興と人材育成－持続的社会構築のための社会起業の可能性」
- ・ペロタクシー DE おしゃべり&ECO 2011
- ・第3回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト
- ・サステナブルキャンパス国際シンポジウム2011
- ・JSPS 東アジア若手研究者招聘セミナー「口腔科学を通じた持続可能な国際交流」
- ・現代社会の呪縛構造－社会環境・生活習慣に潜む病根－
- ・第6回フェアトレードフェア
- ・ESD 国際シンポジウム「社会格差への教育の挑戦」
- ・セラミド研究会 第4回学術集会
- ・アフリカ・サブサハラにおける衛生問題に対する挑戦
－持続可能な水と衛生に関する第2回 ANERI-EAUR ワークショップ 第8回持続可能な衛生に関する国際会議－
- ・ワーク・ライフ・バランス：持続可能な幸福の追求
- ・地域医療フォーラム
- ・Candlize 2011
- ・GIFT-Glbal Issues Forum for Tomorrow-
- ・Greener になろう！持続可能な北海道のために－グリーン購入促進に向けたパネルディスカッション－
- ・留学希望者向けセミナー：SD on Campus
- ・ジョイント公開講演会「持続可能な都市システムの構築をめざして」
- ・産学官セミナー「地理空間情報が拓く未来Ⅲ－食と観光の GIS－」
- ・CLARK THEATER 2011
- ・遊ぶ・学ぶ・働く－持続可能な発達の支援のために－
- ・ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ：あの日からの復興－保健科学の視点から－
- ・環境・エネルギーシンポジウム～震災復興、自然エネルギー、北海道の力～
- ・健康な高齢社会と持続可能な発展
- ・ドキュメンタリー映画「タイガからのメッセージ」特別試写会 in 札幌
- ・グリーン回路とシステムに関する国際ワークショップ
- ・全球陸域プロジェクト（GLP）オープン・ワークショップ：アジアの陸域システムの脆弱性、回復力、持続性
- ・第15回アイヌ語弁論大会 イタカン ロー ～アイヌ語で話しましょう～
- ・ノーベル化学賞受賞記念プログラム 北大ショートフィルム第3弾上映会&鈴木章先生トークショー
- ・第2回アムール・オホーツクコンソーシアム国際会合
- ・パブリック・フォーラム「ヒマラヤからみた温暖化－氷河の変動と災害」
- ・第2回サステナブル・キャンパス・コンテスト
- ・「痛っ」のサイエンス
- ・薪・カフェ
- ・第14回ソウル大学・北海道大学ジョイントシンポジウムを開催
 - ・分科会1：数理解析と関連分野における最近の発展
 - ・分科会2：植物の発生と環境応答
 - ・分科会3：環境科学におけるサステナビリティ
 - ・分科会4：複雑対象・複雑環境の先端的モデリング・計測技術に関するソウル大－北大GCOE共同ワークショップ
 - ・分科会5：機械工学と航空工学に関するシンポジウム
 - ・分科会6：食の安全
 - ・分科会7：日韓の補償問題・歴史和解（関係和解）問題－慰安婦問題に焦点を当てつつ
 - ・分科会8：NTNU-HU-SNU理科教育ジョイントシンポジウム-アジア的対話による地平の拡大
 - ・分科会9：獣医学分科会シンポジウム

- ・分科会10：ナノバイオが先導する核酸医薬の新展開
 - ・分科会11：2011ソウル大学－北海道大学眼科ジョイントシンポジウム
 - ・分科会12：持続可能性と公衆衛生
 - ・分科会13：第2回コンバージェンス科学技術フロンティアに関する合同シンポジウム
 - ・分科会14：高等教育における教育力向上政策と戦略の考察：過去，現在，未来
 - ・分科会15：シベリア＝モンゴル＝極東：考古学的談話
 - ・分科会16：大学の国際化－海外オフィスの役割
 - ・第1回教育改善マネジメント・ワークショップを開催
 - ・平成23年度北海道大学学生支援担当職員SD研修の開催
 - ・病原体等取扱者教育訓練を実施
- 2月号**
- ・本学職員表彰を実施
 - ・AO入試合格者の発表
 - ・北海道大学一般入試の志願状況
 - ・北大フロンティア基金
 - ・塩野義製薬株式会社 手代木功社長へ感謝状を贈呈
 - ・「若手人材育成シンポジウム “シンフォスター2012”」の開催
 - ・公立はこだて未来大学と「北海道地域における大学等の知的財産の技術移転に関する協定」締結
 - ・北海道大学総長奨励金受給留学生報告会を実施
 - ・企業研究セミナーを開催
- 3月号**
- ・台湾 国立中興大学と大学間交流協定を締結
 - ・「教育総長賞・研究総長賞」表彰式を挙行
 - ・鈴木 章，根岸英一触媒化学研究センター特別招へい教授が触媒学会の特別名誉会員に選任
 - ・遺伝子病制御研究所 上出利光教授が平成23年度北海道科学技術賞を受賞
 - ・第10回九大・北大合同フロンティア・セミナーの開催
 - ・北海道大学一般入試（前期日程・後期日程）及び私費外国人留学生入試の実施と合格者の発表
 - ・北大フロンティア基金
 - ・「効果的 外部資金獲得・運営セミナー（リサーチ・アドミニストレーター入門編）」を開催
 - ・平成23年度総長室事業推進経費（公募型プロジェクト研究等支援経費）「若手研究者自立支援」研究成果発表会を開催
 - ・土屋定之文部科学省科学技術・学術政策局長による講演会を開催
 - ・人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催
 - ・レアアース（希土類）レスモーターを「札幌モーターショー2012」に出展
 - ・トークライブ『働く女性のONとOFF ～プロフェッショナルが語る「働き方」と「生き方」～』を開催
 - ・平成23年度外国人留学生歓迎・送別懇談会を開催
 - ・留学生センター日本語研修コース修了式（2011年10月入学者）
- 4月号**
- ・平成23年度学位記授与式の挙行
 - ・総長告辞（学士学位記授与式）
 - ・来賓祝辞（学士学位記授与式）
 - ・平成24年度入学式の挙行
 - ・総長告辞（入学式）
 - ・名誉教授に58氏
 - ・本学永年勤続者表彰に126氏
 - ・平成24年度北海道大学の予算
 - ・北大フロンティア基金
 - ・低温科学研究所技術部 中坪俊一技術専門職員が日本化学会化学技術有功賞を受賞
 - ・「グリーンスパコン・クラウド連携シンポジウム」を開催
 - ・グローバルに活躍したい学生を支援する「ファースト・ステップ・プログラム（FSP）」を開始
 - ・東日本大震災において救護等の活動を行った職員に対する感謝状授与式及び慰労会の開催
 - ・ノーベル化学賞受賞者Ada Yonath博士を迎えて
 - ・平成23年度北海道大学大塚賞授与式を挙行
 - ・平成23年度北海道大学鈴木章科学奨励賞－自然科学実験－授与式を挙行
 - ・平成23年度クラーク賞表彰式を挙行
- 5月号**
- ・韓国 仁川大学校と大学間交流協定を締結
 - ・北海道大学交流デー（武漢・四川）を開催
 - ・春の叙勲に本学から3氏
 - ・平成23年北大えるむ賞授与式を挙行

- ・平成24年度「全学教育科目に係るTA研修会」を開催
- ・平成24年度科学技術分野の文部科学大臣表彰に2氏
～若手科学者賞：理学研究院 角五 彰准教授, 工学研究院 白崎伸隆助教
- ・北大フロンティア基金
- ・「日本語研修コース」入学式を挙
- ・「新入生対象留学オリエンテーション」を開催
- ・「ポートランド州立大学サマー・スプリングプログラム説明会」及び「フィンランド・サマースクールフェア」を開催
- ・放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教育訓練を実施
- ・病原体等取扱者教育訓練を実施

6月号

- ・北海道大学ヘルシンキオフィス開所式を挙
- ・ロシア 北東連邦大学と大学間交流協定を締結
- ・名誉教授称号授与式の挙
- ・講演会「大学における男女共同参画推進の重要性－大学改革の観点から－」を開催
- ・平成23年度北海道大学外国人留学生後援会の決算
- ・北大フロンティア基金
- ・北海道大学私費外国人留学生特待プログラム留学生採用証書授与式を挙
- ・「北海道海外留学フェア2012」を開催
- ・「海外留学説明会」及び「短期語学研修プログラム説明会」等を開催
- ・動物実験実施者等教育訓練を実施
- ・遺伝子組換え実験の申請等に係る講習会を実施

7月号

- ・「大学連携バイオバックアッププロジェクト (IBBP)」に関する協定を締結
- ・産学連携本部「函館サテライト」を設置
- ・水産科学研究所 桜井泰憲教授が環境大臣表彰を受賞
- ・「総長主催記者懇談会」を開催
- ・北大キャンドルナイト2012を開催
- ・第11回北大・九大合同フロンティア・セミナーを開催
- ・日本学術振興会学術システム研究センター研究員に係る説明会を開催
- ・平成24年度総長室事業推進経費「公募型プロジェクト研究等支援経費」採択結果
- ・北大フロンティア基金
- ・第20回北海道大学教育ワークショップ (FD) を開催
- ・化学物質取扱講習会を開催

8月号

- ・韓国 漢陽大学校と大学間交流協定を締結
- ・申珏秀 駐日大韓民国特命全権大使と学生との懇談会を実施
- ・クラーク博士の曾孫 Jane Ashley Lundy氏が本学を訪問
- ・北海道大学 緑のピアガーデン2012を開催
- ・北大フロンティア基金
- ・平成24年度 公益財団法人北海道大学クラーク記念財団助成事業の決定
- ・平成24年度北海道大学新渡戸賞授与式を挙
- ・平成24年度北海道大学公開講座「私たちの未来とリスク」を開催
- ・北海道大学入試説明会を実施
- ・平成24年度 知的財産に関するセミナーを2件開催
- ・平成24年度北海道大学情報セキュリティセミナーを開催
- ・「出入国管理制度説明会」を開催
- ・留学生と地域との交流「ホリデー in ひだか」を開催
- ・山中伸一文部科学審議官が来学
- ・放射線障害防止のための教育訓練の実施
- ・構内で発生した伐採木・剪定枝を配布
- ・「省エネルギー講習会－2012夏－」を開催
- ・環境広場さっぽろ2012に出展

9月号

- ・北海道大学ルサカオフィス開所式を挙
- ・薬学研究所 松田 彰教授がJohn A. Montgomery Awardを受賞
- ・公益財団法人北海道大学クラーク記念財団への寄附
- ・平成24年度教員免許状更新講習を開催
- ・平成24年度北海道大学オープンキャンパスを開催
- ・本学名誉教授が札幌キャンパスで中高生を対象に「サイエンスツアー」を実施

10月号

- ・札幌キャンパスを駆け抜ける - 2012北海道マラソン -
- ・北大フロンティア基金
- ・産業医兼安全衛生委員巡視を実施（札幌キャンパス）
- ・サイエンスカフェに産学連携本部 木曾良信TLO部門長がゲストとして出演
- ・北洋銀行「ものづくりテクノフェア」に参加
- ・中国・清華大学経済交流訪問団が来学
- ・日本語教授法ワークショップ開催
- ・留学生センター日本語研修コース修了式並びに同コース，日本語・日本文化研修コース（日研コース）及び北海道大学短期留学プログラム（HUSTEP）合同修了祝賀会を開催
- ・北海道大学ホームカミングデー2012の開催
 - 第1回ホームカミングデーを終えて—
 - ・総務企画部広報課
 - 歓迎式典・講演会，懇談会
 - ・文学研究科・文学部／文学部同窓会，
 - 公開講演会，懇親会
 - ・法学研究科・法学部／法学部同窓会，経済学研究科・経済学部／経済学部同窓会
 - 軍艦講堂で懐かし講義，同窓会総会，懇親会
 - ・獣医学研究科・獣医学部
 - 獣医学部ホームカミングデー
 - ・情報科学研究科／北楡会
 - 北楡会母校交流会
 - ・水産科学院・水産科学研究院・水産学部／北水同窓会
 - 水産学部卒業生のつどい
 - ・環境科学院／環境科学同窓会
 - 環境科学交流会－35年の歩み－，同窓会設立記念祝賀会
 - ・理学院・理学研究院・理学部
 - 理学部近況報告，施設見学
 - ・薬学研究院・薬学部
 - 薬学研究院・薬学部講演会，施設見学会
 - ・農学院・農学研究院・農学部
 - 市民公開・農学特別講演会
 - ・教育学院・教育学研究院・教育学部
 - 教育学部63年 講演会，同窓生交流コーナー
 - ・国際広報メディア・観光学院／メディア・コミュニケーション研究院
 - ホームカミングデー2012@IMCTS
 - ・保健科学院・保健科学研究院・医学部保健学科
 - 保健科学研究院 近況報告会
 - ・工学院・工学研究院・工学部／工学部同窓会
 - 北海道大学工学系イノベーションフォーラム2012，OB・OGとの懇親会 ほか
 - ・低温科学研究所
 - キャンパスツアー ～施設見学会 -50℃の世界を体験～
 - ・北方生物圏フィールド科学センター
 - 「生物生産研究農場」ミニツアー，植物園の見学
 - ・総合博物館
 - 北大ミュージアムクラブMouseion・学生による展示解説
 - ・北大キャンパスビジットプロジェクト（学務部入試課担当）
 - キャンパスツアー ―現役北大生とめぐるキャンパス今昔―
 - ・附属図書館
 - 展示，図書館ツアー
 - ・学務部学生支援課
 - 体育館見学会，遠友学舎見学会，学生が奏でる音楽ストリート
- ・北海道大学交流デー（ソウル）を開催
- ・井口 學名誉教授が産学官連携功労者表彰を受賞
- ・平成24年度北海道大学インターンシップを実施
- ・「平成24年度 衛生管理者会議」を開催

- ・教育著作権セミナーを開催
- ・北海道大学鈴木章科学奨励賞—自然科学実験— 被表彰者の決定
- ・科学研究費申請セミナーを開催
- ・北大フロンティア基金
- ・交換留学を促進する「第2回ファースト・ステップ・プログラム (FSP)」をフィンランドで実施
- ・人材育成本部上級人材育成ステーションで「赤い糸会&緑の会」を開催
- ・イノベーション・ジャパン2012に出展
- ・構内で発生した伐採木・剪定枝を配布
- ・北大事業所内保育所「ともに」で親子ミニ運動会を開催
- ・未来創薬・医療イノベーション拠点形成事業
第10回国際シンポジウム“これまでの成果と今後の方針”“Frontiers of Interdisciplinary Research in Medicine”を開催
- ・創成研究機構 生命機能分子研究開発プラットフォーム推進センター「動物実験施設慰霊祭」を挙行
- ・北キャンパスで消防訓練を実施

11月号

- ・ザンビア共和国の3大臣が本学を訪問
- ・秋の叙勲に本学から1名
- ・「北海道大学進学相談会 in 東京・大阪・名古屋」を開催
- ・平成24年度北海道地区大学SD研修「大学職員セミナー」を開催
- ・平成24年度北海道大学レーン記念賞授与式を挙行
- ・イチョウ並木の一般開放を実施
- ・「北海道大学学術成果刊行助成制度」による図書の刊行及び新たに欧文誌の刊行助成
- ・北大フロンティア基金
- ・放射線障害防止のための教育訓練及びエックス線障害防止のための教育訓練を実施
- ・「北海道大学短期留学プログラム (HUSTEP)」,「日本語・日本文化研修コース (日研コース)」及び「日本語研修コース」入学式を挙行
- ・北海道大学総長奨励金給付証書並びに北海道大学私費外国人留学生特待プログラム留学生採用証書授与式を挙行
- ・日米イノベーションフォーラムを開催

12月号

- ・次期総長候補者として現理事・副学長の山口佳三氏を選出
- ・平成24年度科研費審査委員表彰に本学から2氏 一工学研究院 名和豊春教授, 薬学研究院 市川 聡准教授—
- ・平成24年度医学教育等関係業務功労者表彰に本学から2氏
- ・文学研究科教授 高橋英光著の図書が平成24年度 (第46回) 市河三喜賞を受賞
- ・平成24年度北海道大学フロンティア奨学金受給者の決定
- ・北大フロンティア基金
- ・AO入試合格者の発表
- ・帰国子女入試合格者の発表
- ・大学入試センター試験 本学一般入試個別学力検査等 実施体制等の決定
- ・第21回北海道大学教育ワークショップ (FD) を開催
- ・「北海道地区FD・SD推進協議会」総会を開催
- ・「冬山登山講習会」を開催
- ・第12回北大・九大合同フロンティア・セミナーを開催
- ・第1回「食と健康」研究会を開催
- ・動物実験実施者等教育訓練を実施
- ・遺伝子組換え実験の申請等に係る講習会を実施
- ・「平成24年度 安全監督者会議」を開催
- ・平成24年度北海道地区国立学校等安全管理協議会に参加
- ・サステナビリティ・ウィーク2012の開催
サステナビリティ・ウィーク2012を振り返って
 - ・フィンランドー北大 ジョイント・シンポジウム：北方圏の環境変化
 - ・環境・生態に関する施策と環境評価モデリング
 - ・本当は菌じゃない菌痛のはなし
 - ・第19回日本時間生物学会 特別講演・企画シンポジウム「持続可能な社会と生物時計」
 - ・国際シンポジウム：アフリカにおけるサステナビリティ学の展開
 - ・市民セミナー 安心した暮らしと在宅ケアを支える
 - ・電動カートDE北大散策
 - ・北大カフェプロジェクト サステナ・カフェ
 - ・24時間国際サステナ対話
 - ・GiFT2012 -Global Issues Forum for Tomorrow-

- ・サステナ学生フォーラム
- ・国際シンポジウム：かわりゆくアジアの山岳環境
- ・ESD国際シンポジウム：共生社会への教育の挑戦
- ・先住民文化遺産とツーリズム－北海道の可能性
- ・日中共同シンポジウム 持続可能なサニテーションとリスク管理
- ・国際シンポジウム：東アジアの子どもの健康とサステナビリティ
- ・産学官セミナー 地理空間情報が拓く未来Ⅳ－防災GISとハザードマップ－
- ・STAND UP TAKE ACTION in Hokudai
- ・北大×JICA連携企画 持続可能な社会をつくる日本の海外ボランティア
- ・環境政策セミナー：持続可能な北海道・日本・世界へ ～再生可能エネルギーとグリーンエコノミー～
- ・国際シンポジウム：異性装とパロディ－自己と文化の多様性
- ・第3回サステナブル・キャンパス・コンテスト
- ・第4回北海道大学サステナビリティ学生研究ポスターコンテスト
- ・CLARK THEATER 2012
- ・国際協力プロジェクトをいかに実現するか－開発コンサルタントが語る途上国現場と仕事
- ・留学希望者向けセミナー SD on Campus：Invitation to Study Abroad Program
- ・やさしい情報科学とライフイノベーション公開講座－体験しながら学ぶ理科・科学入門教室
- ・第9回プレゼン・ディベート大会 原発は是か非か！？－エネルギー政策と北海道経済－
- ・大学改革シンポジウム サステナブルキャンパス国際シンポジウム2012
- ・時計台サロン：農学部に聞いてみよう－自然と食の巡り逢い
- ・「生きづらさ」を超えて
- ・公開講座：ようこそ！ヘルスサイエンスの世界へ
- ・第3回 3.11札幌若もの会議 ～持続可能な社会と被災地の復興～
- ・市民公開シンポジウム 自然エネルギーを1次産業に活用した地域振興
- ・地域経済経営ネットワーク研究センターシンポジウム 地域の多元的『豊かさ』を目指して－農業の視点から－
- ・ジュリアン・ブラン講演会 フランス各地域における農業の再生を目指して
- ・第20回全国共同利用情報基盤センター長会議を開催
- ・平成24年度北海道大学情報セキュリティセミナーを開催
- ・日独交流150周年記念植樹
- ・北大インターナショナルハウスで消防避難訓練を実施

部局ニュース

- 1月号**
- ・工学研究院・工学院・工学部及び情報科学研究科等が大韓民国ソウル大学校工科大学内に連絡オフィスを設置
 - ・水産学部附属練習船おしよ丸に対し内閣府から感謝状
 - ・函館キャンパス体育館で「水産学部・水産科学院主催企業セミナー」を開催
 - ・平成23年度 北海道大学薬学部合同企業説明会を開催
 - ・観光学高等研究センター公開講座「旅の記憶、まちの記憶、出会いの記憶」が終了
 - ・ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～
KAKENHI「ようこそ不思議な細菌の世界へ～身の周りの細菌を見てふやして感じてみよう～」を開催
 - ・総合化学院で「FD研修－リスクアセスメントについて－」及び「英語による授業を担当する教員のためのFD研修」を開催
 - ・第4回工作技術フォーラムを開催
 - ・低温科学研究所技術部で第4回技術部セミナー及び第17回技術報告会を開催
 - ・第9回 脳科学研究教育センターシンポジウム「高次脳機能のメカニズム」を開催
 - ・北海道大学病院でクリスマスコンサートを開催
- 2月号**
- ・低温科学研究所が「ドイツ・マックスプランク陸生微生物学研究所」及び「デンマーク・コペンハーゲン大学 ニールスボーア研究所」と部局間交流協定を締結
 - ・韓国・釜慶大学校水産科学大学と水産科学院・水産学部における学生交流に関する覚書の締結
 - ・グローバルCOEプログラム「知の創出を支える次世代IT基盤拠点」、第5回国際シンポジウム「GCOE-NGIT2012（知の創出を支える次世代IT）」を開催
 - ・スラブ研究センター国際シンポジウム「近現代帝国の比較」を開催
 - ・スラブ研究センターが公開講演会「大震災と海洋汚染」を開催
 - ・公開シンポジウム「血管を標的とする革新的医薬分子送達法の基盤技術の確立」を開催
 - ・水産科学研究院で平成23年度部局FD研修会（第16回）を開催
 - ・メディア・コミュニケーション研究院でFD講演会「大学で起こるハラスメント～原因と予防方法について～」を開催
 - ・「ビブリオバトル in 北海道大学附属図書館」の開催
 - ・附属図書館で「出向者連絡会」を開催

- ・真冬の森の宝、見つけた！－雨龍研究林で「森のたんけん隊2012冬」を開催－
- 3月号**
- ・観光学高等研究センターが岐阜県白川村と連携協定を締結
 - ・第2回日本学術振興会育志賞－優秀な大学院博士課程学生の顕彰・支援－ 本学大学院学生2名が受賞
 - ・農学研究院が「林業技術者育成 日独国際シンポジウム」を開催
 - ・触媒化学研究センター第7回情報発信型国際シンポジウム（CRC International Symposium in Canada）を開催
 - ・薬学研究院でIBL寄附分野シンポジウム「アルツハイマー病研究の進展と治療戦略」を開催
 - ・最先端研究基盤事業 平成23年度ファーマサイエンスフォーラム「創薬を指向した化合物ライブラリースクリーニング」の開催
 - ・水産科学研究院寄附分野「水産総合基盤システム科学分野」研究成果報告会を開催
 - ・経済学研究科がシンポジウム「ファイナンス理論の新展開と金融リスク管理」を協賛
 - ・工学研究院・工学部が「北海道大学工学系産業技術フォーラム2012」を開催
 - ・文学研究科FD研修会「大学におけるハラスメントへの対応と予防」を開催
 - ・薬学研究院FD研修会「大学におけるメンタルヘルス」を開催
 - ・先端生命科学研究院でFDSD研修会「総会2011」を開催
 - ・メディア・コミュニケーション研究院でFD講演会「外国語教育におけるCan-do Statements」を開催
 - ・農学研究院で平成23年度部局FD研修会を開催
 - ・企画展示「クラーク博士と札幌の植物－W.S.クラーク博士来札・札幌農学校開校135年記念－」を開催
 - ・農学院・農学研究院・農学部で「留学生新年会」を開催
- 4月号**
- ・獣医学研究科・獣医学部が標津町と連携協定を締結
 - ・工学研究院・工学院、総合化学院が中国 清華大学材料科学与工程系・工程物理系・化学工程系と学術交流に関する覚書を締結
 - ・北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション七飯淡水実験所におけるサケマス類飼育水槽の竣工
 - ・水産科学院各種表彰（伊藤一隆賞、佐々茂雄賞、はるにれ賞及びジョンカッター賞）の授賞式を挙行
 - ・工学院「北大フロンティアプログラム」平成23年度3月修了式を挙行
 - ・脳科学研究教育センター発達脳科学専攻第8期修了生に修了証書授与
 - ・総合博物館で「HOKUDAIミュージアムマイスター」認定式を挙行
 - ・メディア・コミュニケーション研究院がテッサ・モリススズキ教授を迎えて国際シンポジウムを開催
 - ・GCOE総括シンポジウム「心はなぜ、どのように社会的か？－フロンティアとアジェンダ」を開催
 - ・保健科学研究院で寄附分野「脳機能画像学分野」終了記念シンポジウムを開催
 - ・地震火山研究観測センター主催の平成23年度シンポジウムを開催
 - ・薬学研究院が「日本薬学会第132年会組織委員会企画シンポジウム」で、大型採択事業を紹介
 - ・附属図書館講演会「多様化する入試とこれからの教育支援」を開催
 - ・総合博物館で「卒論ポスター発表会」を開催
 - ・総合博物館で「バイオミメティクスセミナー」をシリーズで開催
 - ・附属図書館・大学文書館共催企画展示「北大生の学生群像Ⅲ期 戦前期の北大生の学生生活－北大生、世界と格闘する－」を開催
- 5月号**
- ・観光学高等研究センターが美瑛町と連携協定を締結
 - ・農学研究院が第1回時計台農学サロン「魅せる農学の世界 過去から未来」を開催
 - ・スラブ研究センターが「震災復興祈念コンサート&写真展」を開催
 - ・経済学部でメンタルヘルス講演会を開催
 - ・平成24年度薬学実務実習開始セレモニーを挙行
 - ・水産科学院・水産学部で「教員とTAの合同研修会」を開催
 - ・脳科学研究教育センター発達脳科学専攻の開講式を挙行
 - ・文部科学省 橋渡し研究支援推進プログラム（実施機関：北海道臨床開発機構）5年間の成果報告会を開催
 - ・先端生命科学研究院 五十嵐靖之特任教授が糖脂質、スフィンゴ脂質のゴードン会議（イタリア開催）を主催
 - ・環境健康科学研究教育センターが、北京大学医学部健康科学センターでセミナー開催
 - ・北海道大学病院で研修医歓迎会を開催
 - ・総合博物館で企画展示「私たちの生活を支える金属鉱床－札幌周辺の鉱山を例に－」を開催
 - ・大学文書館で彰化高級中学修学旅行生のための資料見学会を開催
 - ・大学文書館で上田茂穂氏撮影写真を受贈
- 6月号**
- ・工学研究院「フロンティア化学教育研究センター」を設置
 - ・地球環境科学研究院・環境科学院がGEOMAR-ヘルムホルツ キール海洋研究センターと部局間学術交流協定を締結
 - ・ロシア 北東連邦大学での協定締結記念式典に、文学研究科の教員が出席
 - ・スラブ研究センターが平成24年度公開講座「ユーラシアの自然と環境は誰が守るのか」を開催
 - ・薬学部が第15回生涯教育特別講座を開催
 - ・獣医学部で「地方自治体等合同就職説明会」を開催

- ・函館キャンパスで「春のキャンパス一斉清掃」を実施
 - ・北海道大学病院が臨床研究中核病院整備事業に選定
 - ・看護週間－「看護の日の夕べ」ほか様々な催しを実施
 - ・北海道大学病院で「第64回国立大学病院看護部長会議」を開催
 - ・附属図書館で「北大ビブリオバトル第1回大会」を開催
 - ・大学文書館で大学関係の記念品・物品を収集
 - ・大学文書館で元総長丹保憲仁名誉教授より資料を受贈
 - ・大学文書館で櫻井俊郎旧蔵資料を受贈
 - ・大学文書館で諏訪望旧蔵資料を受贈
- 7月号**
- ・地球環境科学研究所・環境科学院が台湾国立東華大学環境学院と部局間学術交流協定を締結
 - ・公共政策学連携研究部及び教育部が芽室町議会と包括的連携協定を締結
 - ・農学研究院が北海道新聞社編集局との連携協定を締結
 - ・3研究所合同で一般公開を開催
 - ・環境科学院で北大祭・研究施設公開「もっと身近に環境科学」を開催
 - ・第1回スラブ研究センター公開講演会「中央アジアから見る世界の『今』」を開催
 - ・水産学部附属練習船うしお丸が気象庁長官表彰を受賞
 - ・法科大学院で弁護士による説明会を開催
 - ・会計専門職大学院で公認会計士・監査審査会委員の特別セミナーを開催
 - ・会計専門職大学院で公認会計士制度説明会を開催
 - ・経済学部で成績優秀者表彰式を挙行
 - ・経済学部がプレゼン・ディベート大会に向けてセミナーを開催
 - ・附属図書館で2012年 日・EUフレンドシップウィーク「フィンランド展」を開催
 - ・工学部で「第1回心のケアに関する講習会」を開催
 - ・薬学部でメンタルヘルスケア講習会を実施
 - ・平成24年度国立大学歯学部長・歯学部附属病院長会議を開催
 - ・日本ハムファイターズが院内学級を訪問
 - ・総合博物館で企画展示「藻類が人類の未来を救う」を開催
 - ・大学文書館で第2代総長南鷹次郎関係資料を受贈
- 8月号**
- ・グローバルCOEプログラム 「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」主催 国際サマースクール2012を開催
 - ・電子科学研究所創立20周年 附属グリーンナノテクノロジー研究センター発足記念式典を開催
 - ・スラブ研究センターが新学術領域研究の国際シンポジウムを開催
 - ・情報法政策学研究センターで日中韓シンポジウム「動く社会、動く知的財産法～東アジアの視点からの提案」を開催
 - ・会計専門職大学院で（社）日本内部監査協会との共同セミナーを開催
 - ・薬学研究院で第19回ファーマサイエンスフォーラム「バイオ医薬の現状と未来」を開催
 - ・農学研究院で平成24年度第1回FD研修会を開催
 - ・獣医学研究科で「安全講習会」を開催
 - ・北海道大学納骨堂慰霊式を挙行
 - ・「平成24年度薬用植物園見学会」を開催
 - ・ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～
 - ◆ゼリーを軟骨に作り変えよう！～水で出来た未来材料「ゲル」～
 - ◆北大農場で「体験！ベリー研究の最前線 “君も育種家になろう！”」
 - ◆こんぶの森を育てよう！～ゆたかな海をこの手で～
 - ・北大農場公開デー「ウインナーをつくってみよう」を開催
 - ・総合博物館でカルチャーナイト2012「チェンバロと星空の夕べ」を開催
 - ・北海道大学病院で「第47回ふれあいコンサート 七夕の夕べ」を実施
 - ・メディア・コミュニケーション研究院公開講座「広東語で知る香港文化」が終了
 - ・メディア・コミュニケーション研究院が、ソウル大学日本研究所の教授引率現地研修に協力
 - ・大学間交流協定校 韓国釜慶大学校の練習船「カヤ号」が函館寄港、水産科学研究院で日韓教育交流事業を実施
 - ・水産学部が函館港まつり「ワッショイはこだて」に参加
 - ・「函館ペリーボート競漕」に水産学部から5チームが参加
 - ・附属図書館・大学文書館共催展示「“エルムの森”の青春―北大生の群像 1876～1949」を開催
 - ・附属図書館・大学文書館共催展示「“台湾は天然の恩恵裕なる”―植民地台湾を駆けた北大卒業生たち」第1期を開催
 - ・大学文書館で高松正信旧蔵資料を受贈
 - ・大学文書館で戦後の学生在学資料を受贈
 - ・大学文書館で資料見学学習会を開催

9月号

- ・電子科学研究所にて新生「ニコイメーキングセンター」開所記念式典を挙
- ・スラブ研究センターがグローバルCOEプログラム「境界研究の拠点形成」による稚内・サハリンセミナーを開催
- ・スラブ研究センターで第3回サマースクール・プログラムを開催
- ・農学研究院で市民公開シンポジウム「農学・食料科学が創る安全・安心な社会ー人類生存基盤のための科学・技術ー」を開催
- ・法学研究科・附属高等法政教育研究センター公開講座「東アジアのなかの北海道」が終了
- ・情報法政策学研究センターでサマーセミナー「最新の知的財産訴訟における実務的課題ー特許法をめぐってー」を開催
- ・公共政策大学院が地方議員向けサマースクールを開催ー地方議会改革をテーマにー
- ・経済学研究科 地域経済・経営ネットワーク研究センターが、公開ワークショップ「制度生態系アプローチによる経済政策論の展開」を共催
- ・獣医学部で北大畜大共同獣医学課程・夏期集中授業「農畜産演習」「帯広基礎獣医学演習」を実施
- ・水産科学院で第2回国際サマーコースを開催
- ・ダイナミックな野外研究を満喫！ 北方生物圏フィールド科学センターで「野外シンポジウム2012 ～森をしらべる～」を開催
- ・ひらめき☆ときめきサイエンス～ようこそ大学の研究室へ～
北方生物圏フィールド科学センターで「北海道の魚、まるごとリサーチ！」を開催
- ・総合博物館で学生発案型・夏休みイベントを開催
- ・総合博物館でパラタクソノミスト養成講座を開催

10月号

- ・北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション室蘭臨海実験所竣工記念式典・祝賀会を挙
- ・環境科学院が占冠村及び星野リゾート・トマムと、3者による連携・協力に関する協定を締結
- ・教育学部で「ESDキャンパスアジア in 北大 2012」を実施
- ・経済学研究科で国際交流協定校との共同セミナーを開催
- ・会計専門職大学院で公認会計士業界説明会を開催
- ・保健科学研究院が「平成24年度FDワークショップ」を開催
- ・理学研究院がえりも町で防災教育とサイエンスカフェを実施
- ・薬学部が第15回生涯教育特別講座を開催
- ・平成24年度 地球環境科学研究院公開講座「環境を支える化学」が終了
- ・平成24年度水産学部公開講座「水産科学がひらく未来」が終了
- ・函館キャンパスで「秋のキャンパス一斉清掃」を実施
- ・先端生命科学研究院が「子ども霞ヶ関見学デー」で消化管体験ツアーを開催
- ・北海道大学病院で災害医療訓練、CBRNE災害対策訓練を実施
- ・医学研究科・歯学研究科合同慰霊式を挙
- ・動物慰霊式を挙（医学研究科附属動物実験施設、遺伝子病制御研究所附属動物実験施設、獣医学研究科）
- ・附属図書館本館で「北海道大学全学インターンシップ」を実施
- ・北図書館で札幌市立高等学校職場体験学習の生徒を受入れ
- ・附属図書館で本について語り合う「お茶会」開催
- ・附属図書館で知的書評合戦「ビブリオバトル北大予選会～首都決戦への道～」を開催
- ・大学文書館で農学実科卒業生村上貞関係資料を受贈
- ・大学文書館で開拓使仮学校生徒戸澤鼎関係資料を受贈

11月号

- ・北方生物圏フィールド科学センター耕地圏ステーション 生物生産研究農場余市果樹園開設100周年記念事業を挙
- ・メディア・コミュニケーション研究院、国際広報メディア・観光学院、観光学高等研究センターが国際シンポジウム「フィルム/コンテンツ・ツーリズムと地域社会」を開催
- ・総合博物館がタイ王国国立科学博物館と部局間交流協定を締結
- ・経済学研究科でカンファレンス「Hokkaido & Kyoto Universities Joint International Conference on International Economics & Economic Theory」を開催
- ・経済学研究科・経済学部で「学部生、研究生のための大学院ガイダンス」を開催
- ・薬学研究院で平成24年度医薬品等審査迅速化事業費補助金「ナノテクノロジーを基盤とした革新的医薬品に関する評価方法」キックオフシンポジウムを開催
- ・農学研究院で平成24年度第2回FD研修会を開催
- ・本学技術職員組織が、第5回低温研技術部セミナー及び第5回工作技術フォーラムを開催
- ・北方生物圏フィールド科学センターで畜魂祭挙
- ・電子科学研究所で一般救命講習を実施
- ・消防・防災訓練の実施（薬学研究院・薬学部、農学研究院・農学部、理学研究院、情報基盤センター、工学研究院、獣医学研究科、歯学研究科）
- ・函館キャンパスの建物が津波避難ビルに指定
- ・水産科学研究院が文部科学省において「海」をテーマとする展示を実施
- ・総合博物館入館者80万人を達成！

- ・総合博物館で「ミュージアムマイスター」認定式を挙
- ・大学文書館で北大スキー部関係資料を受贈
- ・大学文書館で宮澤弘幸旧蔵アルバムを受贈
- ・大学文書館で大学沿革に関する各種資料を収集
- 12月号
 - ・グローバルCOEプログラム「統合フィールド環境科学の教育研究拠点形成」主催
国際サマースクール2012フォローアッププログラムを開催
 - ・スラブ研究センターがBRIT XII (Border Regions in Transition: 移行期の境界地域) 研究大会を東アジアで初開催
 - ・教育学研究院が北海道学習障害児・者親の会と連携協定を締結
 - ・平成24年度 薬学部成績優秀賞授与式を挙
 - ・歯学研究科で市民公開特別講座「インプラントって何？」を開催
 - ・薬学研究院でアインファーマシーズ寄附分野シンポジウム「医療安全における薬剤師の果たすべき役割」を開催
 - ・生命科学院でノーベル化学賞受賞者 (Johann Deisenhofer博士) による講義を実施
 - ・経済学部で特別講演会「北海道の資源を活かす経営」を開催
 - ・「脳科学研究教育センター合宿研修」の開催
 - ・総合博物館がキャンパス紹介映像を制作
 - ・法学研究科・法学部・公共政策大学院で留学生パーティを開催
 - ・経済学研究科・経済学部で外国人留学生懇親会を開催
 - ・附属図書館が「附属図書館講演会」及び「国立大学図書館協会地区協会助成事業北海道地区・ワーキンググループ実施報告会」を開催
 - ・附属図書館で「UMass-Hokudai Library Workshop」を開催
 - ・附属図書館と学生サークル「Sapollo」との協働によるパネル展示を開催
 - ・附属図書館・大学文書館共催展示「“台湾は天然の恩恵裕なる”——植民地台湾を駆けた北大卒業生たち」第Ⅱ期を開催
 - ・薬学研究院・薬学部で「実験動物慰霊祭」を挙
 - ・歯学研究科で「動物供養祭」を挙
 - ・消防訓練の実施 (医学研究科・医学部、遺伝子病制御研究所、アイソトープ総合センター、附属図書館)

お知らせ

- 2月号
 - ・過半数代表候補者の決定
- 3月号
 - ・被扶養者の認定又は取消等の届出は速やかに
- 4月号
 - ・平成24年度北海道大学公開講座等開設一覧
- 5月号
 - ・附属図書館に、くつろぎの空間「メディアコート」がオープン
 - ・北海道大学 緑のピアガーデン2012の開催予定
 - ・平成24年度 人間ドックの実施について
 - ・北海道地区福祉共同事業契約宿泊施設の開設
- 6月号
 - ・平成24年度北海道大学公開講座 (全学企画)「私たちの未来とリスク」
 - ・「北海道大学 緑のピアガーデン2012」のご案内
 - ・北海道大学インフォメーションセンター「エルムの森」及び「エルムの森ショップ」時間延長のお知らせ
- 7月号
 - ・「北海道大学の役職員の給与等の水準 (平成23年度)」の概要について
 - ・夏季期間における工学系建物の閉鎖の実施について
- 8月号
 - ・被扶養者の要件の確認
- 9月号
 - ・「北海道地区国立大学大滝セミナーハウス」利用のご案内
- 10月号
 - ・次期総長候補者の選考日程が決定
 - ・医療費通知事業の実施
 - ・平成24年度に採択された大学改革に係る教育支援プログラムの紹介
- 11月号
 - ・附属図書館公式Facebookページ開設のお知らせ
- 12月号
 - ・冬期間の駐車について - 除雪・通行の支障となる駐車はやめましょう -

寄稿等

- 3月号
 - ・定年退職を迎えるにあたって
- 9月号
 - ・民間企業派遣研修報告 株式会社電通における研修を終えて

博士学位記授与

- 1月号
 - ・課程博士22人, 論文博士12人
- 4月号
 - ・課程博士301人, 論文博士16人
- 7月号
 - ・課程博士29人, 論文博士5人
- 10月号
 - ・課程博士86人, 論文博士15人

レクリエーション

- 1月号 ・ 方円会が学内教職員囲碁大会を実施
・ 方円会が北大囲碁部との交流会を実施 ― 全日本学生囲碁選手権大会に向けて「檄を飛ばす会」―
- 4月号 ・ 札幌フットサルリーグ2011 WINTER STAGEに出場
- 7月号 ・ 教職員テニス大会の開催
- 8月号 ・ 学内教職員ソフトボール大会の開催
・ 平成24年度学内職員バドミントン大会（個人戦）の開催
・ 教職員テニス大会の開催
- 9月号 ・ 平成24年度学内バレーボール大会の開催
・ 教職員テニス大会の開催
- 10月号 ・ 平成24年度学内教職員フットサル大会の開催
・ 教職員卓球大会の開催 ― 団体戦・ペア・個人戦―
- 11月号 ・ 教職員サッカークラブが公式試合に出場！

同窓会との交流

- 2月号 ・ 恵迪寮同窓会「新年寮歌始めの会」
- 4月号 ・ 北海道大学卒業パーティー2012 ～大学生生活、絆を彩る～
・ 函館同窓会「総会及び懇親会」
- 7月号 ・ 平成24年度北海道大学連合同窓会 評議員会・幹事会合同会議を開催
・ 東京同窓会「新社会人歓迎会」
・ 関西同窓会「北大会館祭」（9周年）
・ 第64回工学部同窓会総会
・ 「都ぞ弥生」百年記念事業と記念祭
- 8月号 ・ 北海道大学新潟同窓会総会
- 9月号 ・ 愛媛エルム会 第4回総会・懇親会
- 11月号 ・ 北海道大学教育学部同窓会 平成24年度総会・懇親会
・ 北海道大学法学部・経済学部同窓会 合同同窓会総会・懇親会
・ 恵迪寮同窓会 第13回「開識社講演会」
・ 旭川北大同窓会 平成24年度総会・懇親会
・ 北海道大学関西同窓会 創立50周年記念事業
・ 北海道大学栃木同窓会 平成24年度総会・講演会・懇親会
・ 愛媛エルム会 第4回総会・懇親会（再掲）
- 12月号 ・ 北海道大学環境科学同窓会 設立祝賀会

研 修

- 1月号 ・ 平成23年度北海道地区国立大学法人事務情報化講習会（第2回ACCESS中級）
- 5月号 ・ 平成24年度北海道地区国立大学法人等初任職員研修（一般職）
- 7月号 ・ 平成24年度北海道地区国立大学法人等中堅職員研修
・ 平成24年度国立大学法人北海道大学会計実務研修
- 8月号 ・ 平成24年度北海道地区国立大学法人等会計事務研修（初級）
- 10月号 ・ 平成24年度北海道地区国立大学法人等技術職員研修
- 12月号 ・ 平成24年度国立大学法人北海道大学簿記研修
・ 平成24年度北海道大学教務事務実務研修
・ 平成24年度北海道地区大学等留学生担当職員研修
・ 平成24年度北海道地区国立大学法人等会計基準研修

表 敬 訪 問

(国内)

- 2月号 ・ 全日本空輸株式会社 執行役員 札幌支店長 渡辺 俊隆 氏
・ 公立はこだて未来大学 理事長 中島 秀之 氏
- 4月号 ・ 札幌国際大学長 濱田 康行 氏
- 5月号 ・ 独立行政法人土木研究所 寒地土木研究所 所長 柳屋 圭吾 氏
・ 北海道大学国際婦人交流会
- 6月号 ・ 独立行政法人科学技術振興機構 理事長 中村 道治 氏
- 9月号 ・ 石狩湾新港管理組合 専任副管理者 佐々木 朗 氏

- 11月号 ・東日本電信電話株式会社（NTT東日本）北海道支店 一行
 ・株式会社日立製作所 北海道支社 一行
- 12月号 ・名誉教授 鈴木 章 ご夫妻

（海外）

- 1月号 ・ウダヤナ大学（インドネシア）I Negah Sujaya 副学長補佐
 ・武漢大学（中国）謝 紅星 副学長
 ・日本国協力センター（JICE）松岡 和久 理事長
 ・仁川大学校（韓国）一行
- 2月号 ・カンボジア教育青年スポーツ省 Phoeurng Sackona 次官及びカンボジア工科大学 Om Romny 学長
 ・モンゴル国立大学 原子核研究所 Suren Davaa 所長
 ・東義大学校（韓国）Tae-Kyung Yoon 副学長
 ・北海道大学韓国同窓会長 李 宇新 氏
- 3月号 ・駐日ベネズエラ・ボリバル共和国大使館 Seiko Luis Ishikawa Kobayashi 特命全権大使
 ・シカゴ大学（アメリカ）Stephen Berry 名誉教授
- 4月号 ・ロッテンブルグ大学（ドイツ）Bastian Kaiser 学長
 ・JICA札幌 丹羽憲昭 新所長
 ・イスラムインドネシア大学 Edy Suandi Hamid 学長
 ・タイ教育省高等教育委員会 Kamjorn Tatiyakavee 副事務総長
- 5月号 ・駐札幌韓国総領事館 鄭煥星 総領事
 ・江原大学校（韓国）權英重 学長
 ・公州大学校（韓国）徐万哲 学長
 ・武漢大学（中国）王伝中 副学長
 ・広東海洋大学（中国）章超樺 副学長
- 6月号 ・駐日カナダ大使館 Jonathan T. Fried 特命全権大使
 ・華中科技大学（中国）李 培根 学長
 ・西北農林科技大学（中国）張光強 書記
 ・中国国家外国専門家局 張建国 局長
 ・キング・ファイサル大学（サウジアラビア）Abdullah Ibrahim Al-Saadat 副学長
 ・アラスカ大学（アメリカ）Scott Lin Huang 教授
- 7月号 ・タマサート大学（タイ）Taweep Chaisomphob 副学長
 ・合肥工業大学（中国）Xu Congwei 学長
 ・東京大学総長室顧問 Stefan Noreén 氏
 ・在札幌オーストラリア領事館 Christopher Wood 領事
 ・在日フランス大使館 Bertrand Fort 文化参事官
 ・駐日ケニア共和国大使館 Benson H.O. Ogutu 特命全権大使
- 8月号 ・サッポロ・デンタル・カレッジ（バングラデシュ）M. A. Hannan 校長
 ・駐日大韓民国大使館 申 秀 特命全権大使
 ・新郷医学大学（中国）郭 志坤 副学長
 ・中国北京市 苟 仲文 副市長
- 9月号 ・浙江大学（中国）王 玉芝 発展委員会副主席
 ・JICA 黒川恒男 理事
 ・清華大学（中国）顧 秉林 前学長
 ・在札幌オーストラリア領事館 Ian Brazier 領事
 ・高麗大学校（韓国）Byoung-Chul Kim 学長
 ・パテイン大学（ミャンマー）Nyunt Phay 学長
 ・ブリティッシュ・カウンシル Jeff Streeter 駐日代表
- 10月号 ・第10回日ロフォーラム参加者 一行
 ・延世大学校（韓国）Kim, Jung Sik 商経大学長
 ・ナバホ工科大学（アメリカ）Elmer Guy 学長
- 11月号 ・キューバ共和国国家評議会科学顧問 Fidel Castro Diaz-Balart 博士
 ・ザンビア共和国 Given Lubinda 外務大臣ほか
 ・スイス連邦工科大学 Heinz Blatter 名誉教授、ブレーメン大学（ドイツ）Wilhelm Hagen 教授
 ・ロンドン大学（イギリス）考古学研究所 Tim Schadla-Hall 教授
 ・韓京大学校（韓国）Han-Cheol Hwang 農業生命科学大学長

- 12月号 ・ エジプト大使館 文化・教育・科学局 文化担当官 Gad.Mohamed El-Qady 博士
 ・ PARE Program Steering Committee 参加者
 ・ 前インドネシア泥炭学会会長 Bambang Setiadi 博士
 ・ JICA 堂道秀明 副理事長

諸会議の開催状況 (平成23年12月～平成24年11月分掲載)

学 内 規 程

- 1月号 ・ 国立大学法人北海道大学病原体等安全管理委員会規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学病原体等安全管理規程の一部を改正する規程
- 2月号 ・ 国立大学法人北海道大学総長選考会議規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学遠友学舎規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学寄附金規則の一部を改正する規則
- 3月号 ・ 国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学インターナショナルハウス使用料等規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学借上宿舍等規程の一部を改正する規程
- 4月号 ・ 国立大学法人北海道大学組織規則の一部を改正する規則
 ・ 北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学産学連携本部規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学産学連携本部運営委員会規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学人材育成本部規程等の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 ・ 大学法人北海道大学国際本部規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学高等教育推進機構規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学教育研究組織の長の選考及び任期に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学通則の一部を改正する規則
 ・ 教育職員免許状授与の所要資格の取得に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学大学院通則の一部を改正する規則
 ・ 北海道大学学位規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学全学教育科目規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学大学院理工系専門基礎科目規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学大学院共通授業科目規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学学生相談室規程の一部を改正する規程
 ・ 北海道大学病的材料検査に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学契約職員就業規則の一部を改正する規則
 ・ 国立大学法人北海道大学短時間勤務職員就業規則の一部を改正する規則
 ・ 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園臨時職員就業規則の一部を改正する規則
 ・ 国立大学法人北海道大学特任教員就業規則等の一部を改正する規則
 ・ 国立大学法人北海道大学における教員の人事等に関する特例規則の一部を改正する規則
 ・ 国立大学法人北海道大学における教員の任期に関する規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学職員兼業規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学利益相反マネジメント規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学職員労働時間、休憩、休日及び休暇規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学職員育児休業・介護休業等規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学職員給与規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学全学運用教員規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学水産学部等の施設に係る自家用電気工作物保安規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学法人文書管理規程の一部を改正する規程
 ・ 国立大学法人北海道大学情報セキュリティ委員会規程
 ・ 国立大学法人北海道大学情報セキュリティ対策規程

- ・国立大学法人北海道大学事業所内保育所ともに規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学文学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学教育学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学法学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学経済学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学理学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学医学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学歯学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学薬学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学工学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学農学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学獣医学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学水産学部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学獣医学部・帯広畜産大学畜産学部共同獣医学課程協議会規程
- ・北海道大学大学院法学研究科規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院医学研究科規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院獣医学研究科規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院農学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院生命科学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院工学院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院公共政策学教育部規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学大学院獣医学研究科附属動物病院規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学電子科学研究所規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学電子科学研究所附属ナノテクノロジー研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学電子科学研究所ニコンバイオイメージングセンター研究部門における設備の使用に関する規程を廃止する規程
- ・北海道大学遺伝子病制御研究所規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学触媒化学研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学人獣共通感染症リサーチセンター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学アイヌ・先住民研究センター規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学アイヌ・先住民研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学社会科学実験研究センター規程及び北海道大学社会科学実験研究センター運営委員会規程の一部を改正する規程
- ・北海道大学環境ナノ・バイオ工学研究センター規程の一部を改正する規程
- 5月号 北海道大学探索医療教育研究センター規程の一部を改正する規程
- 6月号 国立大学法人北海道大学嘱託職員就業規則の一部を改正する規則
- 国立大学法人北海道大学役員給与規程の一部を改正する規程
- 国立大学法人北海道大学職員給与規程等の一部を改正する規程
- 国立大学法人北海道大学子どもの園保育園職員給与規程の一部を改正する規程
- 7月号 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター規程の一部を改正する規程
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション共同利用規程
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター森林圏ステーション共同利用協議会規程
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション厚岸臨海実験所及び室蘭臨海実験所共同利用規程
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター水圏ステーション厚岸臨海実験所及び室蘭臨海実験所共同利用協議会規程
- 北海道大学北方生物圏フィールド科学センター宿泊施設利用規程の一部を改正する規程
- 北海道大学総合博物館運営委員会規程の一部を改正する規程
- 北海道大学環境健康科学研究教育センター規程の一部を改正する規程
- 国立大学法人北海道大学役員の給与の臨時特例に関する規程
- 国立大学法人北海道大学創成研究機構規程の一部を改正する規程
- 国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析・加工受託規程の一部を改正する規程
- 国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程
- 8月号 国立大学法人北海道大学における個人情報の開示等に関する規程の一部を改正する規程
- 北海道大学大学院公共政策学連携研究部附属公共政策学研究センター規程の一部を改正する規程
- 北海道大学附属図書館利用規程の一部を改正する規程
- 北海道大学附属図書館北図書館規程の一部を改正する規程

- 9月号 ・国立大学法人北海道大学職員の給与の臨時特例に関する規程
 ・国立大学法人北海道大学職員の特別の有給休暇に関する規程
 ・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学における財務及び会計に関する職務権限規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学固定資産管理規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学創成研究機構共用機器管理センター分析・加工受託規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学オープンファシリティ使用規程の一部を改正する規程
- 10月号 ・北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学創成研究機構規程の一部を改正する規程
- 11月号 ・国立大学法人北海道大学総長の任期に関する規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学事務組織規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学公印規程の一部を改正する規程
 ・国立大学法人北海道大学における公益通報の処理及び公益通報者の保護等に関する規程の一部を改正する規程
 ・北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程
- 12月号 ・北海道大学における講座等に関する規程の一部を改正する規程

計	報
---	---

- 1月号 ・准教授 小野塚 久夫 氏
 ・名誉教授 三浦 良一 氏
- 3月号 ・名誉教授 尾崎 晃 氏
 ・名誉教授 能町 純雄 氏
- 4月号 ・名誉教授 堀口 郁夫 氏
- 5月号 ・名誉教授 上見 練太郎 氏
 ・名誉教授 川島 利兵衛 氏
 ・名誉教授 藤野 和夫 氏
- 7月号 ・名誉教授 田中 英二 氏
 ・名誉教授 高橋 香織 氏
- 8月号 ・名誉教授 石田 正己 氏
- 10月号 ・名誉教授 宮崎 保 氏
 ・助教 宮本 正樹 氏
- 11月号 ・名誉教授 酒井 昭 氏
 ・名誉教授 青田 昌秋 氏
 ・名誉教授 神山 桂一 氏
 ・名誉教授 田中 達夫 氏
- 12月号 ・名誉教授 久保 周一郎 氏
 ・名誉教授 内野 純一 氏

資	料
---	---

- 4月号 ・平成24年度入学者の道内・道外別及び卒業年度調べ
 ・平成24年度入学者の都道府県分布及び地域比率
- 5月号 ・役職員数（平成24年 5 月 1 日現在）
- 6月号 ・在籍学生数（平成24年 5 月 1 日現在）
 ・平成24年度外国人留学生数（平成24年 5 月 1 日現在）
 ・平成24年度国別外国人留学生数（平成24年 5 月 1 日現在）
 ・平成23年度卒業・修了者の就職等状況一覧
- 11月号 ・役職員数（平成24年10月 1 日現在）
 ・在籍学生数（平成24年10月 1 日現在）
 ・広報誌等一覧（平成24年10月調査）
- 12月号 ・平成24年度外国人留学生数（平成24年11月 1 日現在）
 ・平成24年度国別外国人留学生数（平成24年11月 1 日現在）
 ・北大時報掲載記事事項別一覧（平成24年掲載分）

編集メモ

●今号の表紙は、1955年頃の冬のキャンパス風景です。雪に映えた中央の建物は旧図書館で、現在は北海道大学出版会とサステナビリティ学教育研究センターが利用しています。
写真は、本学卒業生の上田茂穂様が在学中に撮影されたものです。

●札幌の初雪は11月18日と、1876年以降の観測史上2番目に遅かったようですが、そのまま根雪となり、イチョウ並木の黄葉から一転、雪景色のキャンパスとなりました。

●この度、総合博物館の藤田良治先生がキャンパス紹介映像を制作し、その作品の貸出を行っています。（関連記事49頁）
本学キャンパスの四季の移ろいを映し出し、上映した「ホームカミングデー」では、色彩豊かな映像に同窓生の方々も見入っていました。



2009. 8. 8 大雪山白雲岳

北の息吹 68 イワヒゲ (*Cassiope lycopodioides*)

本種は高山帯に生えるツツジ科の小低木であるが、8月号で取り上げたジムカデとは違い、岩場に生えたひげ状の枝由来と思われる和名は納得できる。細い枝は鱗状の葉でびっしり覆われて緑色の紐のようになり、その先端に近い部分から突き出した細長い柄の先端に壺状の白い花を一個つける。花の大きさは1 cm以下と小さいのだが、沢山の花が同じ方向を向いて垂れ下が

る様はよく目立つ。これも北方系の種で本州中部からカムチャッカ半島まで分布するが、ヒマラヤや北極周辺には、この仲間の数種が広く分布しているという。国内での分布の中心は大雪山系で、表大雪では土のある地面に大きな群落が発達する。

前理事・副学長 岡田 尚武

北大時報 ⑫ No.705 平成24年12月発行

北海道大学総務企画部広報課 〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

TEL：(011) 706-2610 / FAX：(011) 706-4870 / E-mail：kouhou@jimu.hokudai.ac.jp

北大時報はインターネットでもご覧いただけます。http://www.hokudai.ac.jp/bureau/populi/